

芝浦工業大学の歩み

1927~2011



学校法人
芝浦工業大学

芝浦工業大学の歩み

1927~2011



巻頭言

学校法人 芝浦工業大学

理事長 **五十嵐 久也**

有元史郎により、1927年に東京高等工商学校(芝浦工業大学の前身)が大田区大森に開設され、同年港区芝浦に第二校舎が開校しました。爾来85年、我が国の最大の国難であった大東亜戦争を乗り越え、本年から15年後の2027年には創立100周年を迎えることになります。

時は今、芝浦工業大学の校史が編纂されたことは実に慶賀にたえません。まずもって校史編纂委員会をはじめとする関係各位の労苦に対し深甚の敬意を表します。

ご承知のとおり本学は、理工系大学の伝統校として広く社会から評価されています。これは、開学から現在に至るまで教員、職員の並々ならぬ努力の結果であります。特に近年は充実した教育研究の結果として、本学で学んだ卒業生が社会で活躍することによりブランド力が向上していると考えられます。社会が求める人材の育成に努めた結果、「理工系を目指すなら芝浦工大」「学生を採用するなら芝浦工大」ということになり、入学志願者数が飛躍的に増加し、就職率についても他大学を凌駕しています。

これらをさらに発展させることが求められます。そのためには一層の経営基盤強化を図り、自らの存在意義を現状に甘んじることなく、今後の在り方を明確にして“特色ある教育研究活動”に挑戦していかなければなりません。未来に向けて確固たる地位を築くために、1. 建学の精神に基づく教育研究を保証して展開する 2. 財務状況の健全化と透明性を確保する 3. 人材の活性化に努める 4. 中学、高校、大学の一貫した理工工学教育により他校との差異化を図る 5. 教育施設、実験設備、運動施設を充実させる 6. 全学合意の法人経営を行う、などの施策を確実に実行したいと考えています。

15年後の創立100周年には、名実ともに社会から真に求められる大学になるよう全員で努力していきましょう。そして100周年を迎えた時は次の創立200周年への展望ができるような芝浦工業大学になることを期待しご挨拶とさせていただきます。



校史発行に寄せて

建学の精神を21世紀の今に実践する
芝浦工業大学の更なる進化を

芝浦工業大学

学 長 柘植 綾夫

21世紀は早や11年が過ぎ、世界は政治・経済・科学技術と教育の全分野において、変革に向けた大きな潮流の真っ只中にあります。一方、我が国はこの世界の潮流に乗り遅れて、いわゆる負のスパイラルからの脱出に苦しんでいる状況にあり、それを支える人材の育成においても大きく世界に遅れをとっています。さらに2011年3月11日に発生した東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故という国難に直面した日本の再生への勝負は、まさにこれからの5年にあるとの覚悟が必要です。

本学の建学の精神である「社会に学び、社会に貢献する技術者の育成」の実践が、本学の歴史において、今ほどその重要性が高まった時代は無かったと言っても過言ではないでしょう。

幸い、今年創立85年目を迎える本学は、教員、職員、学生の努力そして校友会と後援会の皆さまのご尽力のおかげで、今「名実ともに勢いのある大学」として社会から評価を受けるまでに成長してきました。建学の精神は確実に受け継がれ、実践型人づくり・国づくりの三大要素である「工学教育と工学研究とイノベーションへの参画」の三位一体的な実践とたゆまぬ改善が毎日なされていることは、本学の誇りとするものであります。

一方では、これから一層厳しさを増す私立大学の淘汰の潮流を考えると、「兜の緒を締める覚悟」が私たちに求められております。

あと5年で迎える創立90周年においても輝き続ける芝浦工業大学を目指して4年前に開始した「チャレンジSIT-90」作戦は、各部署の教員・職員・学生の全学挙げた参加活動によって、「本学の建学の精神を、21世紀の今に実践する自律的組織風土」として根を張ってきました。そして、全員参加のもと、「たゆまざる創意工夫」と「シナジー効果の追求」によって、「工学教育と工学研究とイノベーションへの参画」を三位一体的に推進する日本の工学教育のトップランナーとして、全学挙げて取り組んでまいりました。

このたびの新たな校史発行にあたり、“温故知新”を越えて“温故創新”の決意をもって本学の85年の歴史に学び、21世紀の社会と世界が求める生きた工学教育を実践していく芝浦工業大学の新たな歴史を、教員・職員・学生と後援会・校友会の全員参加で築いていくことを祈念します。



建学の精神

社会に学び、社会に貢献する技術者の育成

創立者の建学理念

建学の精神は、学校における教育活動の拠り所となる教育思想であり、教育哲学です。国で言えば憲法、人で言えば人生観に当たるものです。

本学の創立者 有元史郎に「非科学的教育の提唱」と題した論文があります。1931(昭和6)年12月、本学の前身、東京高等工学校発行の『校友会雑誌』第5号に掲載されました。創立者が書いたこの論文は、実学重視の教育理念と気概を高らかにうたい上げており、本学の建学の精神の源泉となるものです。

同論文で、有元は昭和初期の学校教育に対し、「社会と絶縁する傾向を以っている(原文)」と指摘しています。専門性の深掘りに特化して、社会と学問を関連づける全人的な視点を失う傾向に警鐘を鳴らしているのです。

有元はこのような「現代教育の根本的欠陥を救済すべく」「非科学的教育」を提唱します。有元の言う「非科学的教育」とは、「科学を排斥するものでも教育の科学的研究を否認するものでもなく、学問的体系によらざる教育、科学的観点の下に教材蒐集しゅうしゅうすることなき教育を意味するもの」で、「我等の生活の中に科学の解け込んだ現代文化の諸相を教材とし、社会の一員たる個人に社会的活動の意義を体得せしめる教育」でした。そして、東京高等工学校は「本邦の私立学校として特色ある専門教育を施し以って実社会に貢献せんとする」と宣言して、有元はこの論文を結びました。

「建学の精神」の明文化へ

有元が唱えた実学重視の技術者育成の理念は、学則や設置要項の中に簡潔な文言として研ぎ出されています。本学の源流である東京高等工商学校の学則の冒頭にはこうあります。

東京高等工商学校学則 第一章 目的及編成 第一条
本校ハ実業界ノ中堅タルベキ技術者及社員ヲ養成シ併
セテ徳性ノ涵養ニ努ムルヲ以テ目的トス

1949(昭和24)年、新制大学として設置された芝浦工業大学の設置要項と学則にも、次ページ(中段)のように明記されました。

新制大学として同時期に発足した工科大単科の大学で、技術者の育成を大学の目的として設置要項および学則に明記した大学は他に存在しません。この実学重視の技術者育成の理念は創立時から脈々と伝えられ、本学の真髄として了解されてはいましたが、それを明文化した建学の精神が本学にはありませんでした。学則や設置要項の中に記述されている目的を再確認し、建学の精神として明確に成文化しようという機運が高まり、2010(平成22)年10月、常勤理事会の審議を経て以下の文言が採択され、確定を見ました。

社会に学び、 社会に貢献する技術者の育成

「非科学的教育の提唱」の解釈に現代の息吹を与えたもので、創立90周年(2017年)に向けた取り組み「チャレンジSIT-90」作戦の紹介の際に用いられるようになりました。本学の根本である実学重視を基軸にして、深意を有しながらも平易で簡潔にまとめています。学校開設に当たって旗幟鮮明きしぜんめいに掲げ、その後も堅持する「技術者の育成」は本学の真骨頂であり、建学の精神の結句として肝要です。





非科学的教育的提唱

昭和六年 十二月

本校機械工學科々員 有元史郎

我等の知識我等の情意が現代文化の中にあつて發展する限り、我等の現代文化の諸相とより緊密な接觸より深き交渉を有たなければならぬ。

今の學校教育が世人の非難を受けるは、その教育が學問を學問として授け我等の生活我等の社會と絶縁する傾向を以つていからである。學校を幸へ社會の荒浪にもまれつゝある青年は、學校の正科がその學修が自分達を下らない人間にしてしまつた」とさへ言つてゐる。

中學の卒業者は言つた。歴史、博物、曰く……の學習が、我等の生活を如何に助けたか。我等の人生に如何なる意義を與へたか。我等中學五年間の生活は、上級學校入學者の御招待たるに過ぎなかつたではないか。法規の規定するところ教科書の示すところに従つた我等の學修、一週二十餘時間五年間の我等の努力、それが我等に何を與へたか、それはせいふ新聞雜誌にある一部分その他下らない何の役立にも立たない、やくざな事項の記憶に過ぎないではなかつたか。現代教育に對するこの嘆聲、この不平、我等教育者は如何に聞くべきか。……こは現代社會の實情を無視した學校教育に對する怨みの聲、呪の聲でなく何であらう。

大學教育はいくらか如上の傾向を緩和したかの如く見えないではないが、しかしその實際を觀ると矢張り個々の學問的觀點からのみ教材を選択し各教科を孤立せしめ、我等の社會生活と縁遠きものにしてしまつてゐる。見よ文學の教材を法律、經濟、理數の教材を、更に見よそれが我等の社會生活の中に如何に溶け込んでゐるかを。文學は文學と法律は法律、經濟は經濟、理學は理學と各獨立な姿で相對峙し、各その領域から教材を選択し、學生の教養に實せんとしてゐる。その結果學生の知識、學生の情意互に關係を失ひ、統一ある知識、統一ある行動を取ることが出来なくなつてゐる。

學校教育が一方が、學問的觀點より教科を選定し、教材を蒐集しつゝある間に他方我等の社會生活に於ては、これ等の諸科學がその體系を解離し、我等の社會生活に解け込み、各方面に現代特色ある文化の諸相を示しつゝある。學校教育は須からくこゝに着眼すべきではないか。

學校は少くとも専門教育以上としては學校は只學問のみを教ふるところではない。學校教育の任務は、我等の生活を、社會的個人としての我等の生活を、より良くし、より豊饒あるものとするところに深き意義を有つてゐる。我等の社會生活に交渉を有たざる純學問的修養は、少くとも専門教育に於て意義をなさない。學校の諸教科が學問的に選定せられ、各教科に於ける教材が學問的排列から脱却し得ずその各々が獨立の姿で相對峙するは何としても教育の効果を減殺する障礙たらざるを得ない。今後の教育は現代文化の諸相を中心とする合科的教材、合科的教育でなければならぬ。否現代文化の諸相を教材とせる非科学的教育でなければならぬ。

有元史郎の論文「非科学的教育的提唱」

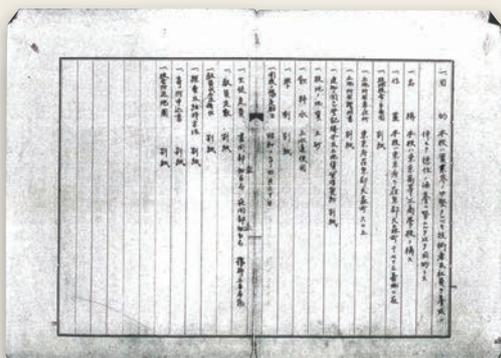
芝浦工業大学設置要項 一、目的及び使命

識見豊かな技術者を養成するを以て目的とし、学び乍ら學理を応用研鑽する事により優秀な指導者を育成し、文化日本建設の爲めに貢献するを以て其の使命とする。

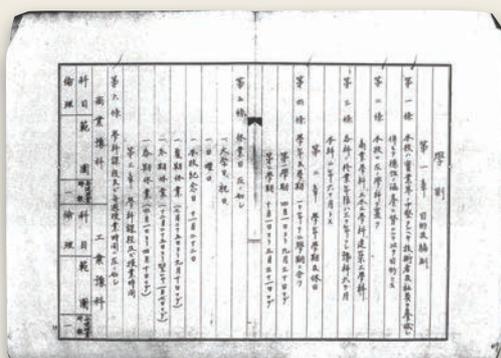
芝浦工業大学学則 第一条

本学は教育基本法並びに学校教育法に則り學術の中心として深く工学の研究を行い世界文化に貢献し、併せて広く一般の學術教養と専門の工業教育を施す事に依り、学生をして人格を陶冶し學理を究めしめ、体位の向上を計り、以て優秀なる技術者を育成する事を目的とする。而してその実践と応用に依り将来工業界の指導者たらしむる事を使命とする。

(1949年、新制大学発足時)



東京高等工商学校設立目的



東京高等工商学校設立時の学則(冒頭)





芝浦工業大学校歌

北原白秋 作詞
山田耕筰 作曲

行進の流れにのって

あ さ ひ に か が や く ー か ぜ と う し
 お ゆ う だ い そ ら あ り ー く も は う ー つ
 る あ お げ よ ー こ う き の へ ん ぼ
 ん ー た る ー を ー は く あ の で ん だ う ー こ
 こ に そ び ー え ー わ れ ら が こ う が
 く ー え い き あ つ む ー し ば う
 ら ー し ば う ら ー わ れ ら が ほ こ ー う ー

三

永遠に栄ゆく 意志と秩序
 誠実 ただあり 道は徹る
 夢むな空理の 漠々たるを
 精微をきはめて 事に即かば
 工学日本 大を成さん
 芝浦 芝浦 われらが母校

二

世紀に脈うつ 熱と理性
 剛健 矩あり 常に鍛ふ
 行へほがらに 澆刺たれや
 師弟の純情 一に依りて
 磨くにこの技 神に通ず
 芝浦 芝浦 われらが母校

一

朝日に輝く 風と潮
 雄大 空あり 雲は移る
 仰げよ校旗の 翩翩たるを
 白亜の殿堂 ここに聳え
 われらが工学 英気鍾む
 芝浦 芝浦 われらが母校





芝浦工業大学中学高等学校校歌

中山知子作詞
蒔田尚昊作曲

遙か曠野の果てに
わきおこる響きは
自然と人との
出会いを伝える
豊かな知恵の実を
てのひらに受け継ぎ
新たに育てて
守りゆく われら

明日の空に馳せる
限りない憧れ
まことの自由に
瞳は輝く
芝生の輪のなかで
確かめるよろこび
たがいのちからを
認めあう われら
われら たたえる
芝浦 芝浦
若い希望ここにすべて
あずけよう

1982(昭和57)年、板橋に新校舎が完成して、高校が池袋から移転、併せて中学校も開設されたことを機に新たに作られた校歌です。中山知子氏は授業を参観し、先生や生徒の学校への思いを歌詞に託しました。

芝浦工業大学柏中学高等学校校歌 「毎日が喜び」

小椋佳作詞・作曲
川辺真編曲

緑と実り 自然の恵み
抱かれて建つ 白い学び舎
出逢う友は皆
輝く太陽のかなた
無限の宇宙へ 挑む翼を磨く
伝統を築くものたち
新しい道を拓くものたち
柏の青春 毎日が学ぶ喜び

伸びやかな風 行く大津川
深い想いの 城址公園
集う友は皆
あふれる友情をかかえ
それぞれの夢に 熱い誓いを結ぶ
責任を果たすものたち
自由な心を抱くものたち
柏の青春 毎日が学ぶ喜び
柏の青春 毎日が生きる喜び

1989(平成元年)年、創立10周年を前にして、シンガーソングライターの小椋佳氏に制作を依頼しました。在校生を主対象に自由記述のアンケート調査を実施、その回答を反映して作られました。





学校法人芝浦工業大学 シンボルマーク

デザインは「工」の字から発想、「大地と空、そして宇宙、その中心に位置する大学」という構成です。上下二つの楕円は天と地を表しています。その中心に立つ直方体は芝浦工業大学を、頭部の小さな楕円は、たえず未来へ向う宇宙を示します。

「大地に根をはり、大空に展開し、宇宙をめざす工学。その核となる工科系総合教育機関でありたい」という願いの意匠化を国際的グラフィック・デザイナー、粟津潔氏に依頼、1993(平成5)年に誕生しました。



芝浦工業大学 校章

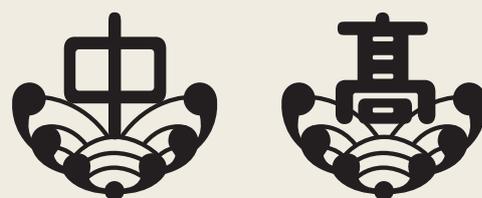
芝浦工業大学の伝統の地、芝浦は東京湾岸に位置します。海から潮の香届く校舎に学生たちは学びました。

1949(昭和24)年、新制大学となったときに制定された芝浦工業大学の校章は、中心に据えた大文字「大学」の下支えに波動を配したものです。立地に恵まれて躍動、発展する工業大学の息吹を表現したデザインです。

考案したのは、波形が初代学長を務めた松縄信太(元理事長)、大学の字体が事務局長であった三浦元秀(元理事長)。二人の合作です。



芝浦工業大学中学高等学校 校章



芝浦工業大学柏中学高等学校 校章





目次

巻頭言(理事長)	2
校史発行に寄せて(学長)	3
建学の精神	4
校歌	6
シンボルマーク・校章	8
目次	9
口絵	10
第1章 創立から拡充へ	
創立者 有元史郎	18
東京高等工商学校創設	20
発祥の地 大森校舎の所在	22
伝統の地、芝浦に開設した校舎	24
草創期の教育	26
各科学課担任表	28
八周年記念祭	30
校歌の誕生と移り変わり	32
第2章 戦禍を越えて新制大学誕生	
財団法人から学校法人に	34
初代理事長 岸本綾夫	36
学風三則	38
戦時下の学生たち	40
燃えさかる炎から芝浦を守り抜く	42
初代学長 松縄信太	44
各種学校から工専、新制大学へ	46
工学教育の礎石	48
短期大学	50
工学部二部	52
鐵中・育英と連なる芝浦の史脈	54
第3章 疾風怒濤の大学改革	
大宮キャンパス開校	56
スポーツ隆盛	58
大学闘争	60
学園の民主化	62
大学存亡の淵から	64
学生寮	66
芝浦人の望郷の屋舎	68

第4章 キャンパスの新生と再生	
豊洲キャンパス開校	70
芝浦新キャンパス開校	72
工業高校、付属一高、そして柏高校へ	74
中学高等学校	76
柏中学高等学校	78
システム工学部の開設	80
デザイン工学部の誕生	82
大学院	84
校友会	86
後援会	88
第5章 変革そして伝承	
事務処理の電算化と職員意識の変革	90
環境活動への取り組み‘ISO14001’の認証取得	92
教員倫理綱領	94
大学基準の適合認定とJABEEの認定	95
入試・学生募集	96
就職支援	98
国際交流	100
産学連携・知財管理と先端研究	102
地域社会に貢献する大学へ	104
ロボットセミナー	106
芝浦祭の顔、芝屋	108
多彩な課外活動	110
校史編纂の取り組み	112
学校法人沿革年表	114
技術者教育の系譜	118
現況	120
施設史年表	121
学校別卒業生数(年度別)	124
大学院(専攻別)・大学(学部学科別)・卒業生数(年別)	126
歴代理事長	128
歴代校長・学長	129
名誉理事長・名誉学長・名誉教授	130
名誉賛助員	131
建学の精神に関する資料	132
参考文献	134
校史編纂委員会、編集後記	135
奥付	136

※表紙の写真は、新芝浦校舎入口正面の壁(スクラッチタイルは、旧芝浦本館校舎壁面に貼られていたものを模して作製)
見返しの濃緑色は、芝浦工業大学のスクールカラー





東京高等工商学校建築工学科(夜間部)第1期生の授業風景(1929年)

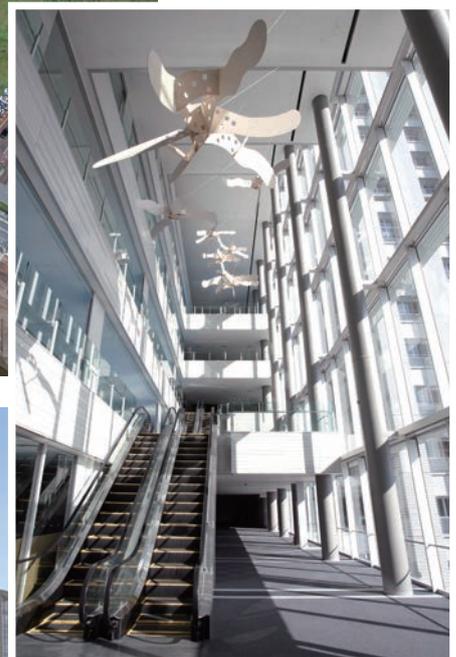
電球の薄明かりの下、粗末な机と椅子が所狭しと並んだ教室に端座し、面を上げ、一心に食い入るように前を見据えた学生たち。詰め襟の学生服と背広にネクタイ姿が相半ばし、年齢に幅がある。教場に、凜とした「向学の気」が張り詰めている。工業の振興のため、中堅技術者の育成が急がれており、先生も学生も社会の要請に応えようと懸命だった時代。写真は本学草創期の授業風景を映し出すにとどまらない、その時代の教育の姿を生き生きと伝えてくれる。



豊洲キャンパス



豊洲キャンパス (2006年8月)



豊洲キャンパス (2006年)



新芝橋より望む本館（1940年ごろ）



芝浦キャンパス（1940年ごろ）



芝浦キャンパス（1972年）



芝浦キャンパス（2005年）



芝浦キャンパス（2005年）



芝浦キャンパス（2005年ごろ）



新芝浦キャンパス（2009年7月）



新芝浦キャンパス（2009年）

大宮キャンパス



大宮キャンパス (2011年7月)



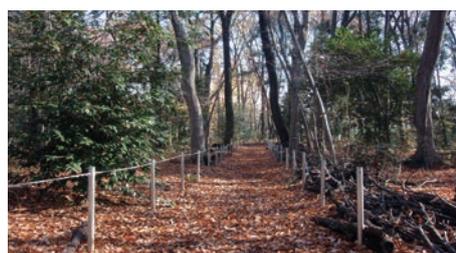
5号館 (旧システム工学部棟)



大宮キャンパス正面 (2011年)



第1学生クラブハウス棟



雑木林



野球場



図書館



芝浦工業大学中学高等学校



中学高校（1990年ごろ）



図書室



柏中学高校（2010年）



グリーンホール



芝浦工業大学柏中学高等学校



機械科実習 (1937年)



製図授業 (1940年ごろ)



田町駅を背景に、通学風景 (1940年ごろ)



東京高等工学校前にて (1940年ごろ)



食堂にて (1963年)



田町商店街にて (1965年)



授業ガイダンス (1965年)



大宮キャンパス（2005年）



芝浦キャンパス研究室にて（2005年）



芝浦キャンパスラウンジにて（2005年）



大宮キャンパス 4号館 2階



齋藤記念館前

創立者 有元史郎

旺盛な向学心

1896(明治29)年6月25日、有元史郎は広島県尾道市の裕福な商家に生まれましたが、事業の失敗や父親の死によって家が困窮し、親戚の家に引き取られました。向学心の強かった有元は家を飛び出し、大阪で奉公に出たりしながら夜学に通うなどの努力をして勉強を続けました。経済的にも窮したり、大病を患ったこともありましたが、兄の援助を得て遅れながらも中学卒業資格を取得して、1919(大正8)年7月、第七高等学校(現鹿児島大学)理科甲類に入学。以降は順調に学業を続け、同校を卒業して1922(大正11)年4月、東京帝国大学工学部機械工学科に入学。1925(大正14)年3月、同学科を卒業しました。

三菱商事に入社が決まっていたのですが、有元はこれを取りやめ、東京帝大経済学部3年に学士入学します。この頃、夜間は岩倉鉄道学校(現岩倉高等学校)に非常勤講師として勤めました。学校教師の経験も、後に自ら学校を作ったことに生かされたと思われる。経済学部卒業後も、東京帝大法学部、日本大学商科、文科と続いて修了し、合わせて5つの学士号を得ました。

与えられた命を燃やして

有元は自分が学ぶことにとどまらず、教育の重要性に深く思いを至らせて、多くの若者のために学ぶ場、学校を作ることに意欲を燃やしました。30歳の若さで東京高等工商学校を創設した前年、1926(大正15)年、有元は友人と共同で大阪に商工学校を開校しますが、その学校はすぐに友人に譲りました。その後も、東京高等工商学校の他に横浜と大阪に工科系の学校経営を考えたのですが、両校ともうまく行きませ

んでした。

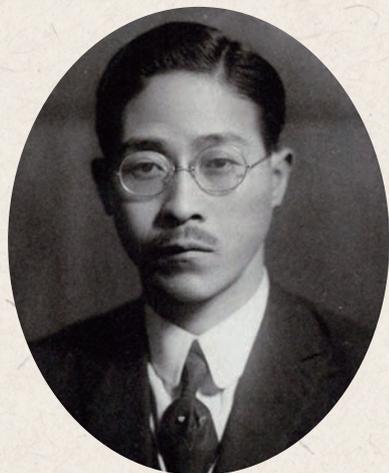
逆に、東京高等工商学校は東京高等工学校となり、優れた教師陣による授業も功を奏して発展します。各科の授業課目の中で有元が最も重視したのが倫理学でした。菅原道真を祖と仰いだ有元の間人観、教育観が技術者の育成に反映されていたと言えます。

波瀾万丈の短い人生でしたが、有元は与えられた命を、教育だけでなく、さまざまな事業にも捧げました。1937(昭和12)年8月、岡山県の津山市長に推薦され、当時は東京高等工学校の校長でしたが、在職のまま就任しました。しかし、同年10月、津山市疑獄事件により引責辞職。その翌年、1938(昭和13)年5月30日、事故で亡くなりました。享年41。

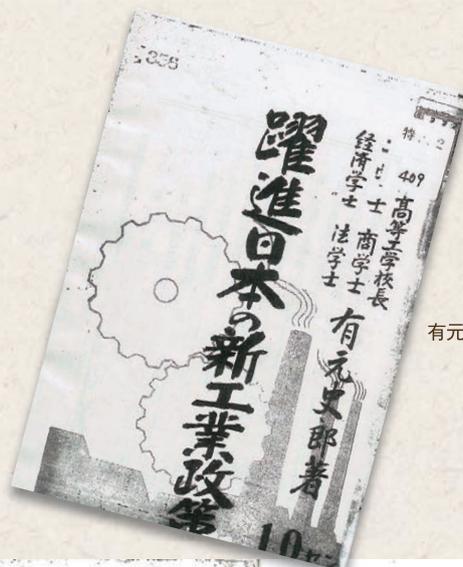
家族が語る有元史郎像

有元史郎の最大の理解者で内助の功篤かった妻、有元芳子(有元ヨシ)は夫の死後も東京高等工学校の経営に力を尽くしました。有元芳子は、亡き夫について、「時代には少し早く生まれてきてしまった人」と語っていたそうです。

2007(平成19)年11月4日、本学豊洲キャンパスで開催された創立80周年記念式典で、有元史郎の三女、有元美佐子・ヘンソンさんは「創立者、父『有元史郎』を偲ぶ」と題した記念講演を行いました。本学の創立者、有元史郎が、どのように人生を送り、どのような思いで学校を作ったか、エピソードとともに明らかにされ、多くの人の胸に深く刻まれる画期的な場となりました。ステージのスクリーンに大写された父親の遺影を背に、母親の形見の着物を召して、両親と心ひとつに語りかけるようなヘンソンさんのスピーチに聴衆は大きく心動かされます。講演が終わってからもしばらくは拍手が鳴り止みませんでした。



有元史郎



有元史郎著書表紙

者學大の世出不・家育教るな大偉
 長校學工等高京東
 士學濟經・士學法・士學商・士學工
著名六の生先郎史元有

刊新 躍進日本の新工業政策 双龍齋を創設的指導 凡そ大教育の教育 あらゆる工業人の良的指導	刊新 人を作る教育 凡そ大教育の教育 あらゆる工業人の良的指導	刊新 工業道徳 あらゆる工業人の良的指導	刊新 躍進日本の新工業政策 双龍齋を創設的指導 凡そ大教育の教育 あらゆる工業人の良的指導	刊新 人を作る教育 凡そ大教育の教育 あらゆる工業人の良的指導	刊新 工業道徳 あらゆる工業人の良的指導
定価 三十 送料 三十	定価 三十 送料 三十	定価 九二 送料 九二	定価 三十 送料 三十	定価 三十 送料 三十	定価 九二 送料 九二
所行發 社學科新	所行發 社學科新	所行發 社學科新	所行發 社學科新	所行發 社學科新	所行發 社學科新

發行所 新科學社
 東京市下谷區御徒町三ノ二
 東京市大塚區市野倉町三六六
 東京市小石川區大塚坂下町一九四
 著者 有元史郎
 印刷者 鍋田久吉
 昭和十一年十二月十日印刷
 昭和十一年十二月十五日發行
 (定價金十錢)

有元著作広告

有元史郎 年譜

1896(明治29)年6月25日	広島県尾道市土堂町に誕生
1897(明治30)年7月	父死去、親戚のもとに引き取られる
1903(明治36)年4月	尾道尋常小学校入学
1912(明治45)年2月	同高等科卒業直前に退学。以後、大阪などで商店に勤め、苦学を重ねる
1919(大正 8)年7月	第七高等学校理科甲類入学
1922(大正11)年4月	東京帝国大学工学部機械工学科入学
1925(大正14)年3月	東京帝国大学工学部機械工学科卒業。三菱商事への入社を取りやめ、東京帝大経済学部3年に学士入学。この年、北村芳子と結婚。この後、東京帝大法学部、日本大学商科、文科と続いて修了し、5学士号を得る。
1926(大正15)年4月	大阪商工学校創立(大阪市北区桜の宮町)するが、友人に譲る
1927(昭和 2)年7月6日	東京高等工商学校設立認可
1937(昭和12)年8月	岡山県津山市長に推されて就任
1937(昭和12)年10月	津山市疑獄事件で引責辞職
1938(昭和13)年5月30日	事故により逝去



有元美佐子・ヘンソンさん講演 (2007年11月4日)

東京高等工商学校創設

提出された設立申請書

第一次世界大戦(1914～1918年)後、1923(大正12)年に発生した関東大震災の傷もまだ癒えず、世の中が経済不況の重苦しさに覆われていた昭和の初期。本学の創立者 有元史郎は工業や商業に関する専門を学びたいという中等程度の学校を卒業した若者たちのために「東京高等工商学校」という各種学校を創設しました。

この当時、財閥などの大企業では将来の幹部候補は大学・専門学校卒、中堅幹部候補は中等程度の学校卒、一般の労働者は尋常小学校卒程度と、社員や労働者を学歴別に採用する学歴社会の風潮が強まりつつありました。中等学校が増加したために、腕に何の技能も付けないままに社会に放り出される若者が、とりわけ都会で激増していることに有元は思いを至らせたのでした。1927(昭和2)年2月26日、東京府知事に提出された東京高等工商学校設立申請書には、中堅の技術者と社員の養成を目的とすると記されています。

学校は東京府下荏原郡大森町諏訪1073番地に位置し、商業学科、土木工学科、建築工学科の3学科が置かれました。

苦難を越え、東京高等工学校として隆盛

本学の源、東京高等工商学校の開校は1927(昭和2)年5月。創立者 有元史郎は若輩の自分はふさわしくないとして校長の任に就かず、初代校長には、設立申請書に設立費寄付者として名を連ねた一人、法学博士、慶應義塾大学教授であった瀧本誠一を招きました。瀧本は実証的な日本経済史研究の道を開いた一人です。

開校の翌年、1928年11月4日には校友会が発足し、学校としての体裁が整い始めたその矢先、学校を大きく揺るがす事件が起きました。1929(昭和4)年3月、学校の運営方針をめぐる学内に対立が生じ、一部の教員と学生が東京高等工商学校から分離し、独立します。武蔵高等工科学校(後の武蔵工業大学、現在の東京都市大学)の創立です。

この事件後、同年6月、瀧本は校長を辞任。代わって工学博士の名井九介みよとい きゅうすけが第2代校長に就任しました。名井は内務省技師、北海道庁土木部初代勅任技師などを務めて北海道開発に大きく貢献した人物で、校長在職中に第20代土木学会長も務めました。

同年7月、学則変更が行われ、商業科が廃止になり、土木工学科、建築工学科の2学科に、需要が増大しつつあった電気工学科を加えて総合的な工学系単科の学校へと転換し、校名を東京高等工学校と変更しました。

工業の各種学校であっても、有元が学校の生命線と心得、陣容を整えることに努めて集めた東京高等工学校の教授陣は当代一流でした。このことが評判を呼び、入学を希望する者が増え、学校は苦難を乗り越った後、再び波に乗って順調に発展していきました。

1929年当時の校舎は旧アメリカンスクールのレンガ造りの建物だけでしたが、10年足らずの間に急速に敷地・建物が拡張されます。芝浦界限には高い建物がほとんどなかったため、完成した鉄筋コンクリート4階建ての校舎からの眺めは素晴らしかったと言われます。1937(昭和12)年3月、一連の建設工事が完了して、キャンパスは芝浦一帯で類を見ない近代建築の立派な校舎がそびえ立つ威風堂々としたものに様変わりしました。同年4月には陸軍大将、岸本綾夫を総長に迎え、東京高等工学校は隆盛期を迎えます。

東京高等工商学校設立申請書

一、私議今般東京高等工商学校ヲ設立致シ度別紙関係書類相添へ此段及申請候也
昭和二年二月二十六日

原籍地 広島県尾道市久保町七百六十九ノ一 七百七十一ノ一合併
現住所 東京府下荏原郡大森町諏訪一〇七三

有元史郎

印

明治二十九年六月二十五日 生

東京府知事 平塚廣義 殿
履 歴

- 一、大正十一年三月 東京帝国大学工学部機械科卒業
- 一、大正十四年三月 東京帝国大学経済学部経済学科卒業
- 一、大正十四年四月 早稲田大学及岩倉鉄道学校講師トナル
- 一、大正十四年九月 兩校ヲ辞シ大阪商工学校ヲ設立シ専ラ育英事業ニ従事ス
右之通相違無之候也

昭和二年二月二十六日

右 有元史郎

- 一、目的、本校ハ実業界ノ中堅タルベキ技術者及社員ヲ養成シ併セテ徳性ノ涵養ニ努ムルヲ以テ目的トス
- 一、名称、本校ハ東京高等工商学校ト称ス
- 一、位置、本校ハ東京府下荏原郡大森町一千七十三番地在

(以下略)

○学則

第二条 本校ニ左ノ学科ヲ置ク 商業学科、土木工学科、建築工学科

第三条 各科ノ修業年限ハ三ヶ年トシ予科六ヶ月、本科二年六ヶ月トス

第七条 授業時刻ハ昼間部ハ午後一時ニ始マリ午後五時ニ終ル
夜間部ハ午後六時ヨリ始マリ午後九時十五分ニ終ル

第十三条 (入学金 五円)

学費 (一期 四十二円)

○校長 法学博士 瀧本誠一(倫理学)

○教務主任 法学士 新谷知

○学監 林田虎雄

○学生監督 陸軍砲兵少佐 新倉長一郎

□設立費寄付

34,000円 設立発起人出費

1,000円 瀧本 誠一

1,500円 管野盛次郎

1,000円 井上匡四郎

500円 佐藤 潤家

1,000円 小橋 一太

計39,000円

◎昭和2年5月1日開校

東京高等工商学校設立申請書



瀧本誠一
初代校長



名井九介
第2代校長

発祥の地 大森校舎の所在

大森で産声を上げる

1927(昭和2)年2月に、創立者 有元史郎は東京高等工商学校設立申請書を東京府知事に提出し、東京府荏原郡大森町諏訪1073番地に設置の認可を求めました。

有元が学校の立地を大森に選んだのは、当時から京浜地帯には中小の町工場が集まっており、その経営者の子やそこで働く人たちが大勢入学することを見込んだからだと言われています。

旧城南女学校の校舎で授業

認可に当たり、東京府知事から当時の文部大臣に宛てた文書の中に、備考として次の記述があります。

省線大森駅ヨリ東方約15分時 京浜学校裏停留場ヨリ西方約5分時

土地低地ナルモ生徒保健上考慮ヲ要スベキ程度ニアラズ

附近人家漸ク稠密ノ度ヲ加工 市街ノ体裁ヲナシツツアルモ教育上考慮スベキ施設ナシ

校舎ハ旧城南女学校々舎ヲ其ノ俛使用スルモノニシテ採光通風佳良ナリ

省線大森駅は現在のJR京浜東北線大森駅に、京浜学校裏停留場は現在の京浜急行線平和島駅に当たります。現在の戸板女子短期大学(東京都港区芝)の前身校の一つである城南女学校は、1923(大正12)年4月に東京府荏原郡大森町字諏訪1093番地に女子に主として裁縫を教える学校として開校しました。

東京高等工商学校と城南女学校それぞれの設置の申請書に添付された書類には、いずれも校地が300

坪(約990㎡)、建物は木造瓦葺(ぶぎ)2階建て1棟と書かれています。教室などの間取りや大きさも同じです。東京高等工商学校の授業は、1925(大正14)年に城南女学校が移転した後、その校舎を使って行われていたということが裏付けられます。

校舎所在地の地番

不可解なのは、所在地が東京高等工商学校の設立申請書では「諏訪1073番地」、城南女学校の設置申請書では「諏訪1093番地」となっており、一致しないことです。

1927(昭和2)年10月、有元は通学や通勤に不便であることを理由に、芝区芝浦町のアメリカ学校跡への校舎移転願を東京府知事に提出。移転した後も、1933(昭和8)年まで大森では授業が行われ、大森校舎を第1校舎、芝浦に開設したものを第2校舎と称して区別しました。

1929(昭和4)年、東京高等工学校に校名を変更した翌1930年4月、有元は第1校舎に東京高等工学校附属普通部を開校しました。設立申請書に添付された校舎平面図は、既述の大森校舎のそれと重なります。学校の所在地は「諏訪1093番地」と記されています。

地番の差異が疑問として残りますが、古地図には大森校舎が明示されています。現在の住居表示で言うと、校舎があったのは東京都大田区大森北6丁目23番15号辺りと推定されます。前述の校舎平面図にある校門は公道、現在の環七通り(東京都道318号環状七号線)に面していました。往時、その校門を昼夜、多くの向学心の強い学生が出入りしました。



- ①城南女学校(大森町字諏訪1093番地)
- ②大森町字諏訪1073番地
- ③諏訪神社
- ④学校裏停留所

東京高等工商学校大森校舎近辺地図(1925年 文化地図普及会発行)



東京高等工商学校正門

伝統の地、芝浦に開設した校舎

海の中から生まれた芝浦の街

戦前は埠頭の街、荷揚げの街として独特の活気にあふれていた芝浦の街は、1945(昭和20)年5月の空襲により街全体が焦土と化しました。しかし、立ち直りは早く、日本経済が高度成長期に突入するころから“京浜工業地帯の表玄関”として再び活気を取り戻します。今では幹線道路、鉄道、そしてモノレールが複雑に絡み合う交通網のただ中にあり、交通の要所となっています。

その芝浦もかつては海の中にありました。明治時代の地図を見ると、海岸線は現在のJRの線路沿いまで迫っています。1909(明治42)年に田町駅が開設された時も、ホームのすぐ足下まで海だったと言われています。

1917(大正6)年、現在の港区海岸と港区芝浦一帯の大規模な埋め立て造成が開始され、これによって現在の田町駅から海側の埋め立て地と運河の輪郭が出来上がりました。芝浦は海の中から生まれた街なのです。そして、埋め立ての10年後、1927(昭和2)年に芝浦工大はこの地で歴史を刻み始めました。

異人学校と呼ばれたモダンな校舎

本学発祥の地である大森校舎では通学や通勤に不便だという理由から、1927(昭和2)年9月、第2校舎として開設されたのが芝浦校舎です。東京府芝区芝浦町(現東京都港区芝浦)にあったアメリカン・スクール・イン・ジャパンが麻布に移転し、空き校舎となっていたところを探し出されました。その位置は2006(平成18)年に解体される前の芝浦校舎の南東棟辺りでした。モダンな外観の校舎を目にして地元の人たちは「異人学校」と呼んでいたそうです。

アメリカン・スクール・イン・ジャパンの校史『A HISTORY OF OUR FIRST CENTURY』(Ray & Vicky Downs著、2003年刊行)によると、この校舎について「当時、帝国ホテルの建設にあっていたフランク・ロイド・ライト(Frank Lloyd Wright、1867-1959)に理事会が校舎のスケッチを依頼した」と記されています。ライトは、近代建築の巨匠とされるアメリカの建築家で、日本では1923(大正12)年の関東大震災にも耐えた帝国ホテルの設計者として名高い人物です。

1921年1月に開校した校舎はライトが当初描いた案からは遠いものでしたが、「生徒からは『素晴らしい建物だ』との声があがった。校舎の階上から東京湾の船の往来が見渡せた」と前掲書に書き残されています。また、「芝浦に通うのは容易ではなかった。生徒たちは田町駅で下車、線路下のトンネルを運河まで抜けると、フェリーが学校まで運んでくれるという寸法であった。しかし、時には大潮と泥がトンネルに流れ込み、板が敷かれてはいたが、滑りやすいことこの上なかった」との記述があることから、校舎が建設された当時、通学路は未整備であったことがうかがえます。

大森から芝浦へ、東京府知事に提出した移転願に添付されていた図面には、「敷地坪数九百八十七坪五勺校舎坪数五百五十六坪」とあります。地下に製図室を置き、1階には教室3部屋のほか事務室、学監室、職員室、2階には教室1部屋、特別教室1部屋、研究室と校長室、応接室がありました。芝浦工大の伝統は、この小さな校舎から芽生えました。

14107
東京府立芝浦高等学校

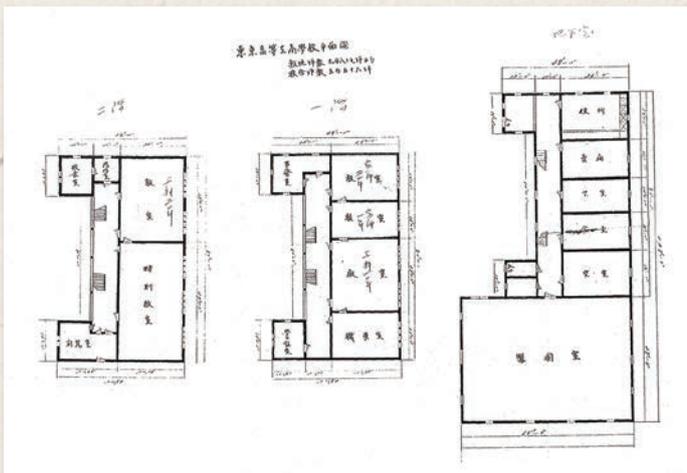
校舎移転願

授業致し居り、支度學生通學ノ便甚ク悪シ、
教職員通勤ニ不便ヲ感シ、支度市内芝浦
町末丁目舊舊地ニテ、カ、學校校跡ニ移轉御許
可相成度、此致御願及ビ、矣也。

東京府立芝浦高等学校主
府立大森高小跡、丘三九七番地

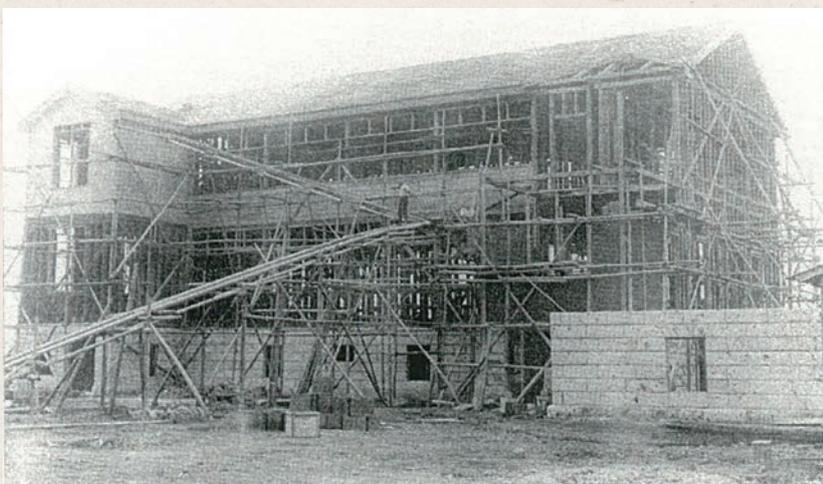
有元史郎

東京府知事
平塚廣義殿



校舎移転願

校舎図面



建設中のアメリカン・スクール・イン・ジャパン(『A HISTORY OF OUR FIRST CENTURY』より)



異人学校と呼ばれていたアメリカン・スクール・イン・ジャパン

草創期の教育

優れた教師陣

本学草創期の教育の特長として優れた教師陣が挙げられます。一般に各種学校の修業年限は2年でしたが、有元史郎は東京高等工商学校のそれを3年にして、専門学校並みの教育をしようと考えました。実現するには優秀な教員をそろえることが必要でした。各種学校では、専任教員が少数でも、大学や専門学校など他の学校の教員や、工業系の場合には現場で働いている有能な技術者など、非常勤のスタッフへの依存が可能でした。有元は交渉力を発揮して優れた教員の確保に努めました。

当時の「各科学課担任表」(29ページ)を見ると、慶應義塾大学教授、東京帝国大学助教授などの大学教員や専門学校のスタッフに加えて、鉄道省監督局技術課技師、内務省土木技師など、諸官庁の第一線で働いていた高級技師も含まれていたことがわかります。学生たちは、当代一流の学者や理論と実務に精通した高級技師から直接に学ぶことを誇りにしていたと伝えられています。

工学基礎のテキスト編纂

用いられたテキストにも創意工夫が見られます。本学の校史編纂の始動に、歴史資料整理ワーキンググループ(2006～2007年)の一員として協力し、『芝浦工業大学歴史資料整理目録』の作成を主導した丸山剛史宇都宮大学教育学部准教授の次の指摘に注目する必要があります。

創立者有元史郎の業績として着目されることの一つは、自ら設立した学校を拡充して世に貢献しようとしただけでなく、東京高等工商学校(のち東京高等工学校)

の教員たちの協力を得て、自分たちの学校の生徒を含む多くの若者たちのために、邦語による工学系基礎学科のテキストを編纂・発行する努力を重ね、工業教育の普及に努めたことである。

東京高等工商学校編の『解析幾何学』、『高等三角法』、『高等代数学』、『物理学』、『力学』(以上1928年、有文閣)、東京高等工学校編『イングリッシュ・エッセー』、『応用力学』、『高等解析幾何学』、『高等三角法』、『高等図学』、『高等力学』(以上1931年、有文閣)、東京高等工学校編『高等物理学』(1935年、有文閣)、『独逸文典』(1936年、有文閣)などである。

戦前の制度では、中学校、高等女学校の教科書には検定制度があったけれども、実業学校のそれについては検定制度もなく、自由発行自由採択であった。まして高等諸学校の教科書には何らの制度的制約がなかった。すなわち、当時は中等学校から進学する高等学校や専門学校では自由にそれぞれの生徒向けの教科書を用いていた。こうしたなかで、正規の学校に学ぶ機会に恵まれなかった者を対象とする学習図書はほとんどなかったから、独学者向けの講義録形式で編集されたこうしたテキストは、内容からいえば決してやさしいものではなかったにしても、若者たちに歓迎された。

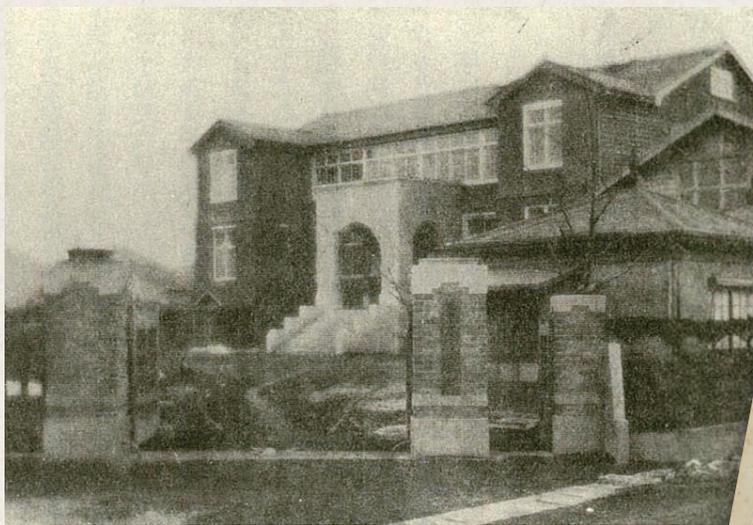
『芝浦工業大学』建学の理念

(2007年、学校法人芝浦工業大学発行『温故知新』)

当時の日本の工業界を支えていたのは、大学を卒業した一握りの学士と多数の工員たちでした。有元は、日本の工業力を振興させるためには学士と工員の間には、実用的な知識と技術を身につけた中堅技術者が必要と考え、育成に乗り出します。その取り組みの一端がテキスト作りでした。社会の求めを鋭敏にくみ取り、それを大衆的に広がりあるものに具現化したところに有元の見識が見て取れます。



工学基礎学科のテキスト(国立国会図書館所蔵)



草創期の校舎(1930年ごろ)



東京高等工学校学則

各科学課担任表

錚々たる教授陣

東京高等工学校(東京高工)の1933(昭和8)年のものと思われる「各科学課担任表」(担任表)が残っています。この表から、当時の東京高工の教育の姿が浮かび上がってきます。

担任表には土木、電気、建築、機械の4学科延べ144に及ぶ課目とその担任教員の氏名および肩書が学科ごとに列記されています。

校長は名井九介工学博士で、土木学会長を務めた勅任技師。建築学科長は大澤三之助工学博士で、日本建築の第一人者。土木工学科長は宮本武之輔工学博士で、内務省技師として技術者の地位向上に貢献しました。電気工学科長は福田勝工学博士。機械工学科長は松縄信太工学博士で、鉄道技術研究所長、機械学会長などを歴任、日本におけるメートル法推進のリーダーとしても尽力しました。本学の学長・理事長として戦後の復興をなし遂げた人物です。

このように錚々たる面々がキャップであれば、学内の統率はもとより、社会的にも信頼を高めたこととされます。若き創立者、有元史郎は一流の先生が学校の生命線と心得、陣容を整えることに努めました。

有元史郎の慧眼

さらに担任表を見ますと、すべての学科の巻頭課目が倫理学になっていることがわかります。工業の学校としては特異ですが、有元は工業界における道徳を非常に重視していたからだと思われます。東京高工の教育目的にも「…徳性の涵養に努める」と明記されています。また有元には13章からなる『工業道徳』の著作(1937年)があるところからも、今日でいう「工

業倫理」の重要性を昭和の初期に見抜いていたことがうかがえます。

授業の特長

全学科共通科目である「工業衛生」という課目が注目に値します。今でいう「安全工学」または「産業医学」に類する課目と理解されますが、昭和初期に工業界での安全や職業病などを配慮した講義が行われていたことは驚きです。担任教員も医学博士で法学士という理想的な人選がなされています。

さらに、どの課目も複数の教員で担任されていることが特長になっています。専門科目であれば、大学教員と技師との組合せ、「法制」という課目であれば、元検事と弁護士といった具合です。同じ講義を異なった立場の教員から受けるので学生は物事の表裏がわかります。卓越した授業システムです。

語学にも重点が置かれ、英語教員は2人とも留学経験者、独逸語担当の1人は東京外語出身、工業英語にも3人の米国工学士が含まれています。そのほか、イリノイ、コロンビア、ボストン工科、パリなどの諸大学卒業の教員が専門科目を教えています。昭和の初期の各種学校としては異例の顔ぶれと言えます。

八周年記念祭

記念すべき年を盛大に祝賀

1933(昭和8)年11月3、4日、創立8周年と新校舎の落成を祝って記念祭が盛大に挙行されました。有元史郎は『東京高工新聞』(1933年11月10日付)に「八周年記念祭を祝す」と題した文を寄せ、「八年といえは、これを少年にたとえれば既に学齢期に入って一人歩きのできる年である。本校また八歳の^{よわい}齡を重ねて、ここに八周年記念祭を行った」と述べています。有元自ら記念祭歌まで作っていた点からも、取り組みに力の入っていたことがうかがえます。

「八」の字へのこだわり

それにしても、本学創立の年を考えると、これは8周年ではなく6周年の記念祭ではないかと、いぶかる向きもありましょう。また、5の倍数の年に周年祝賀の行事を催すのが一般的であり、8周年を祝うのは珍しい^{ことさら}ことです。なぜ殊更に8だったのでしょうか。

有元は前掲の『東京高工新聞』で、「『八』は我が国に於いては実に目出度^{めでた}き数であり、本校また八周年記念祭を挙^も行したのは固より、深く^よ掘る所があったからである」と所見を述べています。

漢字の本家、中国では、「財をなす」「金持ちになる」を意味する「発財」の「発」と「八」が広東語で同音であることから吉数となったと言われます。日本では、漢数字の八は末広りの字形から縁起が良いとされます。有元もまたこの吉数にこだわって記念祭挙行の時を選定したものと思われま

す。本学の源、東京高等工商学校の設立申請がなされたのは1927(昭和2)年2月26日。この日は1926年度に属します。この年度を起点に数えて、創立から8番目の年度ということで1933年に8周年記念祭を

開催したという解釈が有力です。ちなみに、1926年4月、有元は友人と共同で大阪に商工学校を創設しましたが、その学校は間もなく友人に譲っており、これを本学の起源と解する説は見当たりません。

温故知新と技術者の地位向上を強調

有元は八周年の意義に言及して、「本校の将来は現在の発展なるが如く、本校の現在は過去八星霜の総和である。(中略)本校に対する純真の創造は過去に依りて現在を理解し、現在に依りて将来に対する画策^たを樹て、それに立脚して本校の教育的理想を実現せねばならぬ」としています。まさに「温故知新」です。

さらに有元は寄稿の中で、技術者の社会的地位向上を強調。当時の技術者が不遇であることを嘆き、日本の発展は「工業立国」にこそあり、それを担う技術者が尊敬されるべきであると訴えました。

そして、「単に刹那的に八周年記念祭を祝することをなさずして、この祝典をして永遠に意義あらしむべく一層勉勵努力して我が国工業界の先駆者たらんことを切望する次第である」と文を結んでいます。

校歌の誕生と移り変わり

校歌の成り立ち

東京高等工学校の、「巨鯨潮吹き鵬の舞心」で始まる当初の校歌は、創立者の有元史郎が作詞、須川政太郎が作曲。1933(昭和8)年11月に制定されました。この校歌は、有元が亡くなって3年余り後、1941(昭和16)年11月18日に新たな校歌が制定発表されるまで学生たちに歌われました。

現在歌われている芝浦工大の校歌は「東京高等工学校校歌」として誕生しました。作詞は北原白秋(1885~1942)。生涯に数多くの詩歌を残し、今なお愛唱される童謡の生みの親、日本を代表する詩人です。作曲は山田耕筰(1886~1965)。日本に交響楽とオペラを興し、不朽の名曲をあまた作った日本音楽史上の巨匠です。希代の名コンビの手になる本学の校歌は、今に歌い継がれている貴重な作品の一つです。

北原白秋(以下、白秋)自筆の原詩には「昭和16年10月20日作」と記されています。白秋は1937(昭和12)年に眼底出血に見舞われ、急速に視力が低下したと言われています。困難な詩作活動を強いられながら、白秋は本学校歌を作り上げました。亡くなる1年ほど前のことです。

歌詞の変遷

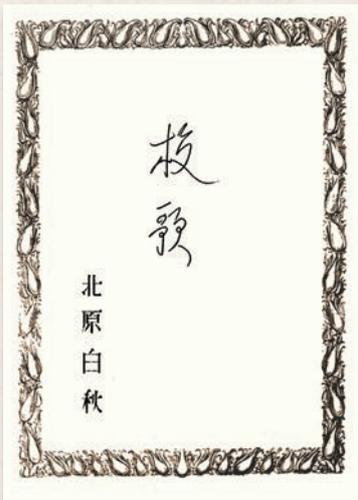
校歌3番の冒頭は「永遠に栄ゆく」。このくだりを原詩に当たると、「東亜に栄ゆく」となっています。校歌が完成したのは1941(昭和16年)年。この年12月に太平洋戦争が勃発しました。白秋が校歌の制作に取り組んでいた当時、日本がアジア支配の大義名分として掲げていたのが「大東亜共栄圏」です。「とうあにさかゆく」と歌われた一節には「大東亜共栄圏」が影

を落としていたと思われます。

1945(昭和20)年、日本の敗戦後、「東亜」は使用がはばかれる言葉となりました。代わって「とうあ」に音感の通じる「とわ」が校歌の歌詞に採択され、それに「永遠」という漢字が当てられました。節全体を「永遠に 栄ゆく」と書き表し、音数をそろえて「とわに さかえゆく」と歌うことになったと推察されます。

原詩から表現が変わった個所は他にもあります。当初、歌詞は「東京、東京、高等工学」と結ばれていましたが、後に、歌いやすさを考慮したからでしょう、「東京、東京、東京高工」と改められました。そして、東京高等工学校が、芝浦高等工学校、芝浦工業専門学校と変遷し、1949(昭和24)年、学制改革により新制大学に移行して芝浦工業大学になる流れの中、1番から3番までいずれの歌詞も、結びが「芝浦、芝浦、われらが母校」と定まりました。

校歌の出だし、「朝日に輝く風と潮」の「潮」は、かつて白秋の生家で製造していた酒の銘柄でもあります。そのことに照応すると思われるが、1番の一節「英気鐘む」の「鐘」は壺の形をした酒器を意味し、「深く愛する」、「非常にかわいがる」という意の「鍾愛」の「鍾」です。字体がよく似ているので、しばしば「鐘」と誤って記されました。「魯魚の誤り」ということですが、こうした誤りや表現の変更について常勤理事会で審議した結果、2010(平成22)年10月、校歌の歌詞が正式に確定しました。



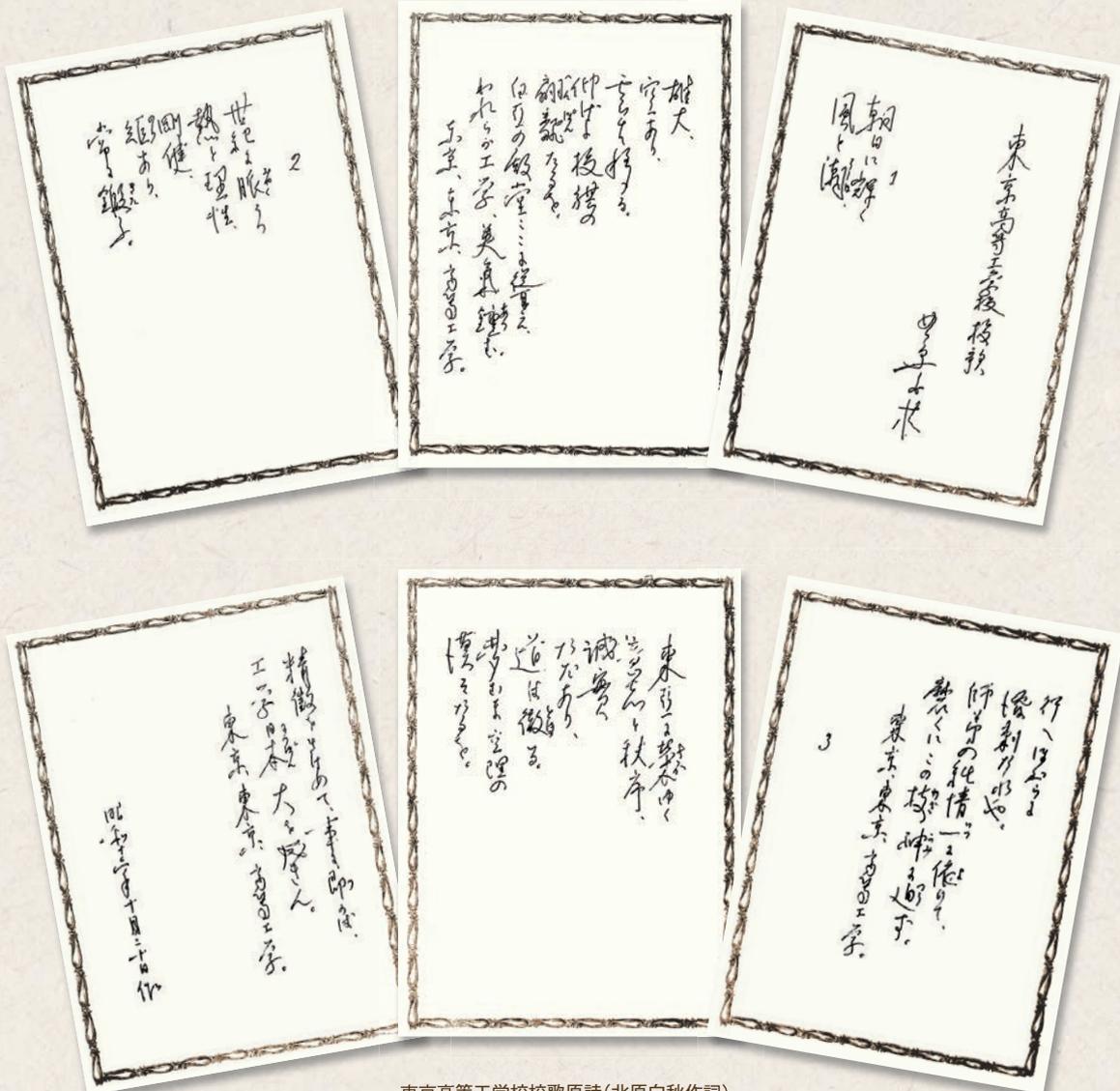
北原白秋 (1885~1942)

生涯に数多くの詩歌を残し、今なお歌い継がれる童謡を数多く発表するなど、近代の日本を代表する詩人である。



山田耕筰 (1886~1965)

日本初の管弦楽団をつくるなど日本において西洋音楽の普及に努めた。欧米でも名前を知られた最初の日本人音楽家。日本音楽史上の巨匠である。



東京高等工学校校歌原詩(北原白秋作詞)

財団法人から学校法人に

財団法人東京高等工学校設立

1950(昭和25)年3月15日、私立学校法が施行されました。第2次世界大戦前の私立学校令(1899年勅令第359号)と異なる点は、私立学校を自主的かつ公共的なものとした点、私立学校の設置者を学校法人とした点などです。

- 第一条 この法律は、私立学校の特性にかんがみ、その自主性を重んじ、公共性を高めることによつて、私立学校の健全な発達を図ることを目的とする。
- 第二条3 この法律において「私立学校」とは、学校法人の設置する学校をいう。
- 第三条 この法律において「学校法人」とは、私立学校の設置を目的として、この法律の定めるところにより設立される法人をいう。

私立学校法が施行される前、私立学校の設置者は原則として財団法人でした。

芝浦工業大学の前身、東京高等工学校が民法第34条の規定により「財団法人東京高等工学校」設立の許可を受けたのは1943(昭和18)年3月31日。経営の安定化に向けて法人格が取得されたのは本学の歴史上、画期的な出来事で、設立代表者は創立者有元史郎の遺志を継いだ妻、有元芳子(有元ヨシ)でした。財団法人は、有元芳子と東京高等工学校後援会および学園会の寄附を基本財産として設立されました。初代理事長には岸本綾夫が就任。陸軍大将、東京高等工学校校長などを歴任、東京市長(現東京都知事)を務めたこともある人物です。

1943年、戦局が悪化して学徒出陣が始まり、風雲急を告げたこの年、本学の動きも急でした。10月29日、財団法人の名前は「財団法人芝浦学園」に改められました。さらに同じ年、12月15日には校名も芝浦高等工学校に変わりました。

学校法人芝浦工業大学に

敗戦を境に日本の学校教育は大きく改革されます。1946(昭和21)年には教育基本法、学校教育法が相次いで施行されました。社会変動の大きなうねりの中、新制大学が次々に誕生しました。芝浦工業大学の設置は1949(昭和24)年のことです。

1950年の私立学校法施行を機に、私学助成金などの行政からの補助や税制上の優遇措置が受けられ、社会的信用も増すことが期待されて、多くの学校がなだれ込むように財団法人から学校法人に変わりました。

附則2 この法律施行の際現に民法による財団法人で私立学校(中略)を設置しているもの及び学校教育法附則第三条の規定により存続する私立学校で民法による財団法人であるものは、この法律施行の日から一年以内にその組織を変更して学校法人となることができる。

附則3 前項の規定により財団法人がその組織を変更して学校法人となるには、その財団法人の寄附行為の定めるところにより、組織変更のため必要な寄附行為の変更をし、所轄庁の認可を受けなければならない。(以下略)

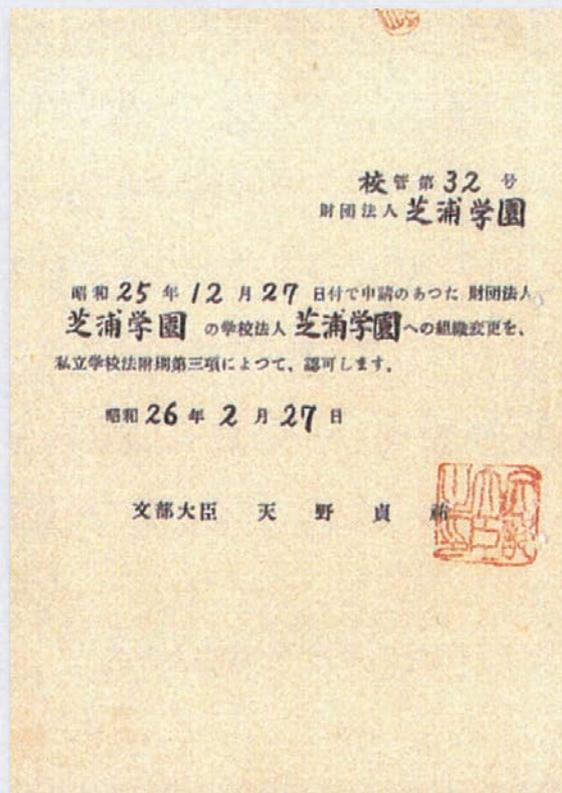
この附則第三項により、芝浦工業大学は1950(昭和25)年12月27日付で「財団法人芝浦学園」から「学校法人芝浦学園」への組織変更を申請し、1951(昭和26)年2月27日付で文部大臣から認可されました。その後、1962(昭和37)年4月21日付で「学校法人芝浦学園」は「学校法人芝浦工業大学」に改称されて今日に至っています。



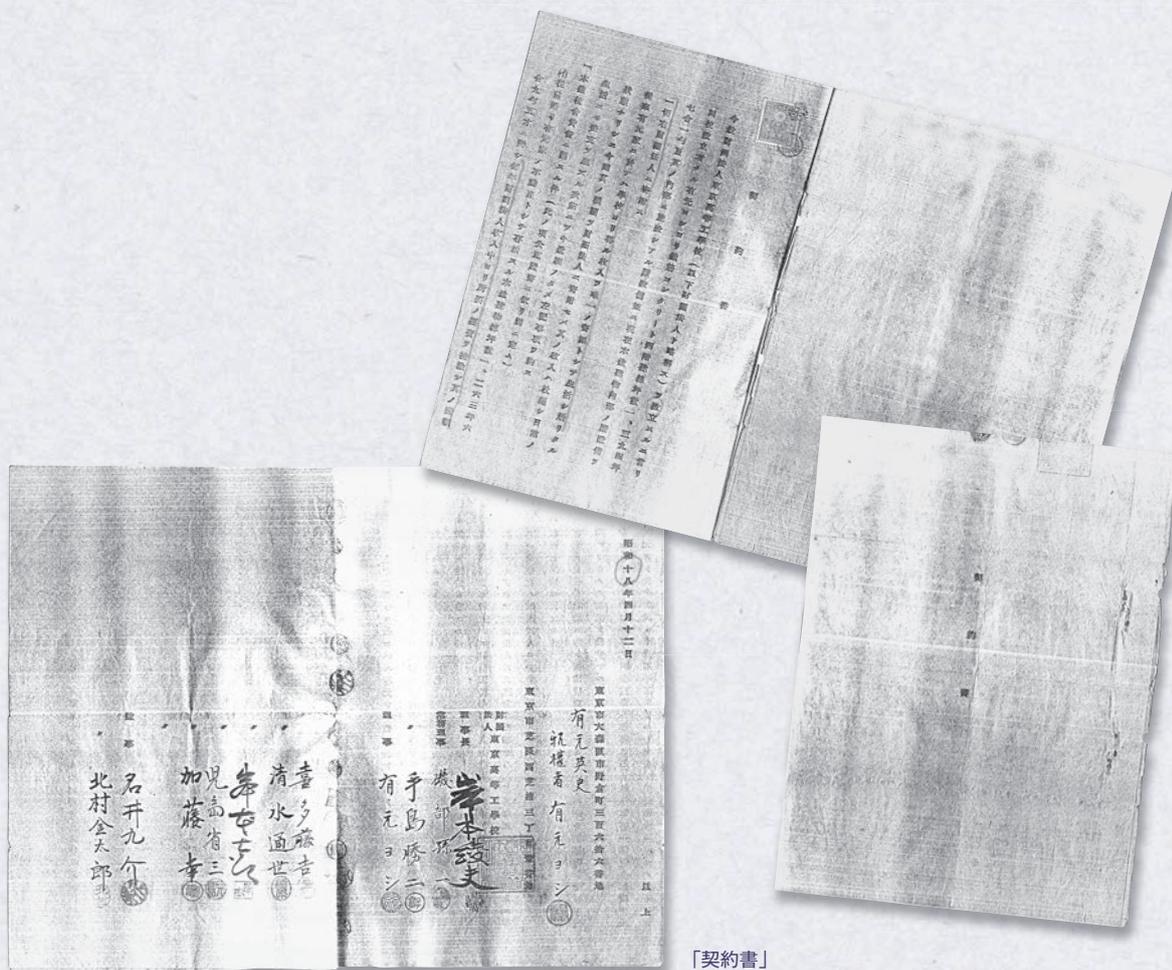
財団法人東京高等工学校
設立代表者、有元芳子(有元ヨシ)



「財団法人東京高等工学校」設立許可書



「学校法人芝浦学園」への組織変更認可



「契約書」

初代理事長 岸本綾夫

技術畑から陸軍大将に

本学の法人化は、東京高等工学校当時、1943(昭和18)年のことで、財団法人東京高等工学校が設立されました。初代理事長に就任したのが岸本綾夫です。岸本は1943年4月から1944年2月まで同法人の理事長を務めました。

岸本は1879(明治12)年6月29日、岡山市に生まれ、波瀾万丈の人生を送ります。前半生、岸本は軍人となって最高位に登り詰めました。1899(明治32)年11月に陸軍士官学校を卒業した後、岸本は通例の幹部養成の陸軍大学校には進まず、帝国大学派遣学生として東京帝国大学工科大学校造兵科に入学、卒業しました。陸軍では技術者が軽視されていたと言われますが、岸本は技術畑一筋に進み、1936(昭和11)年8月、大日本帝国陸軍大将となります。日露戦争にも従軍し軍功をあげており、学力も最優秀の人材とはいえ、異例のことでした。当時、社会的に冷遇されていた技術者の地位向上に力を傾けた本学創立者、有元史郎が強く望んで岸本を自らの学校に招いたであろうことは想像に難くありません。

軍人校長、初の理事長として

1937(昭和12)年4月、岸本は東京高等工学校総長に就任しました。翌1938年5月、当時の東京高等工学校校長であった有元が急死。あとを受けて、同年6月、岸本が校長に就任しました。さらに岸本は、有元亡き後、学校の経営母体となった学園会の第1回理事会会長も務めています(1938年9月~1943年4月)。この学園会が財団法人東京高等工学校の設立準備に取り組んだのでした。

1937年7月には日中戦争が、1939年9月には第2

次世界大戦が勃発。そして、1941(昭和16)年12月、日本が太平洋戦争に突入した激動の時代です。当時の大方の学校がそうであったように東京高等工学校でも軍事教育が行われ、学生は連日、軍事教練で鍛えられました。学校幹部には軍人が名を連ねましたが、当時の卒業アルバムには岸本を始め、多くの軍服姿の教員の写真が収められています。東京高等工学校附属工科学校では、岸本は自ら揮毫した「学風三則」の大きな額を各教室に掲げ、生徒たちにその「学風三則」(38ページ)を唱和させる指導を行いました。

最後の東京市長

1942(昭和17)年8月、岸本は校長在職のまま第19代東京市長(現東京都知事)に就任。東京市が都制に変わって東京都になる前、1943年6月まで、最後の東京市長を務めました。岸本は軍人市長として戦時体制の強化、市民生活の安定、行政簡素化の3点を骨子として市政を行います。隣組の組織強化や国民精神総動員運動などを推進したり、市の行政組織の一つ、生活局を戦時生活局に改組したりしました。

東京市長在任中、一時的に校長職から離れ(1943年1~7月、名井九介校長)、後に復帰したものの、1944年3月には名誉校長となり、同年10月に辞任。同じ月、満州製鉄株式会社の理事長に就任して中国に渡りました。1945(昭和20)年8月、日本が敗戦。

同年11月28日、満州に残っていた岸本は鞍山において八路軍(日中戦争時の中国の軍隊組織)に連行されたまま、不帰の客となりました。



岸本綾夫



明治神宮参拝風景(1940年ごろ)



岸本綾夫揮毫「忠誠」

岸本綾夫軍歴

1899(明治32)年11月	陸軍士官学校卒業(第11期、要塞砲兵科)
1900(明治33)年 6月	任官(陸軍砲兵少尉)
1903(明治36)年	陸軍砲兵工学校高等科卒業、日露戦争に出征、旅順攻略に参加
1909(明治42)年	東京帝国大学工科大学校造兵科卒業
1920(大正 9)年 2月	軍務局砲兵課長
1920(大正 9)年 9月	大佐
1922(大正11)年 2月	野重砲四聯隊長
1924(大正13)年12月	少将、陸軍科学研究所第二課長
1930(昭和 5)年 8月	中将、欧州(ドイツ)出張(科学研究所附)
1931(昭和 6)年 8月	陸軍造兵廠長官
1934(昭和 9)年 8月	陸軍技術本部長
1936(昭和11)年 8月	大将、待命
1936(昭和11)年 8月	予備役編入

学風三則

直立不動で唱和

芝浦工大の前身、東京高等工学校の1940(昭和15)年から1943年までの卒業アルバムには本学の初代理事長、岸本綾夫揮毫の「学風三則」の写真が掲載されています。

学風三則

1. 雄大剛健にて明朗快活言行一致する事
2. 師弟の情誼厚く規律厳正なる事
3. 空理空論を排して実用応用を心掛くる事

東京高等工学校のあるべき校風、その生徒として心掛けるべきことがうたわれています。

各教室には黒板の上、中央に「学風三則」の大きな額が掲げられていました。当時を知る同校附属工科学学校の卒業生の話によると、毎朝、授業の開始前、全学科で教室ごとに生徒たちはこの「学風三則」を唱えました。号令がかかり、生徒全員が起立して直立不動の姿勢を取り、大声で唱和したそうです。ただ、この光景は附属工科学学校だけで見られたもので、続く進学先の予科や東京高等工学校では「学風三則」の唱和は行われなかったということです。

生徒たちが唱和する様子から、戦前や戦時中に天皇制国家の思想、教育の基本理念を示した教育勅語を連想させますが、「学風三則」の文言はそれとは趣きが異なっています。東京高等工学校ならではの教育の独自性が感じられます。

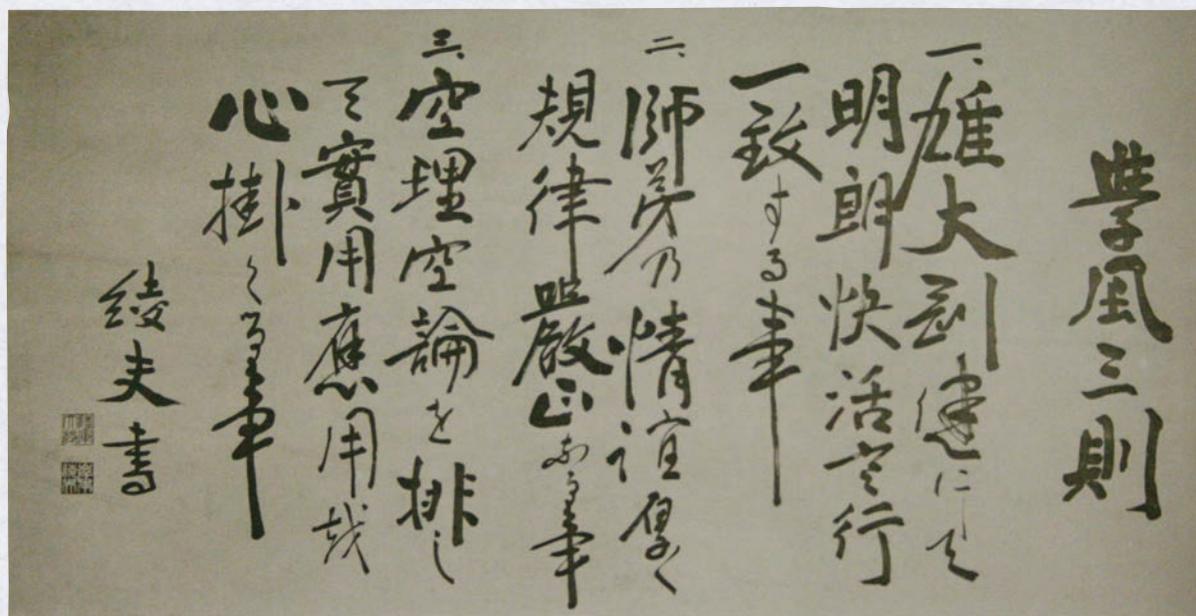
校歌との相似

興味深いのは、「学風三則」の随所に、芝浦工大の校歌にも用いられている言葉や類する表現が見出さ

れることです。校歌の1番の歌詞「雄大 空あり 雲は移る」、2番の「剛健 矩あり 常に鍛ふ」、「行へほがらに 澆刺たれや」、「師弟の純情 一に依りて」、3番の「夢むな空理の 漠々たるを」には「学風三則」と校歌に相通じるものが感じ取れます。

校歌の作詞が完成したのは1941(昭和16)年。作者北原白秋自筆の原詩には「昭和16年10月20日作」と記されています。白秋が5年にわたる闘病生活の末に亡くなった前年のことです。制作を依頼したと言われる創立者、有元史郎は既に1938(昭和13)年5月に他界しています。一方、岸本綾夫は、1937年4月に東京高等工学校総長に就任、1938年6月に同校校長に就任、1944年に名誉校長を辞任するまで同校の運営に携わりました。

1941年の卒業アルバムまで、有元作詞の「巨鯨潮吹き」で始まる東京高等工学校初の校歌が掲載されていますが、1942年の卒業アルバムから白秋が作詞した「朝日に輝く」の校歌に替わります。有元と岸本、白秋の3人の校歌をめぐる関係、そして、白秋は「学風三則」から着想して校歌を作詞したのかもしれないなどと、興味は尽きません。



岸本綾夫揮毫の「学風三則」(1941年卒業アルバム掲載)



授業風景(1941年)

戦時下の学生たち

軍事教練と勤労奉仕

太平洋戦争末期、戦局の悪化とともに、1943(昭和18)年6月には「学徒戦時動員体制確立要綱」が、1944年2月には「決戦非常措置要綱」が閣議決定され、本格的な学徒の戦時動員の実施、勤労働員も通年の状態に入りました。

本学でも1930年代後半から、普通教育や職業教育の他に軍事教育が積極的に行われており、学生たちは厳しい軍事教練や勤労奉仕に従事しました。甲良良三さん(芝浦高等工学校機械工学科1945年卒業)は、東京高等工学校附属工学校卒業後、予科を経て、1943年4月に東京高等工学校(同年12月に芝浦高等工学校に校名変更)に入学。1年次は、学徒戦時動員体制下ではありましたが、授業は行われていました。しかし、2年次途中から、学生たちが勤労働員に出されることが多くなって授業は行われなくなります。3年次、甲良さんは1945(昭和20)年5月から8月まで、宮城県の大賀城に海軍の銃器・火薬類の生産増大を目的に建設された海軍工廠に勤労働員で送り込まれました。

学業半ばにして

敗色濃くなる中、1943年12月、徴兵年令がそれまでの20歳から19歳に引き下げられました。翌年には兵役法施行規則が改められ、満17歳以上の者とすると同時に17歳未満の者の志願も可となりました。

東京高等工学校の1943年4月入学者の「学費納入原簿」を見ると、学生の一覧表の大部分の氏名には赤い線が引かれてあり、そこかしこ、名前の横に「退」あるいは「退学」と赤く走り書きされています。「入営」あるいは「応召」という赤い文字も散見されます。

右ページの写真は機械工学科夜間部に在籍した一人の学生の学費納入原簿です。在籍すべき3年間の月毎に学費の領収印欄があります。彼の学費納入は1943年4月13日の第1学年4月分に始まり、第2学年12~3月の4か月分を1944年12月16日に納めて終わっています。最後の年、第3学年はすべての月が空欄です。摘要欄には「昭和19年12月16日届出入営」と朱筆が入っています。

ガリ版刷りの卒業証書

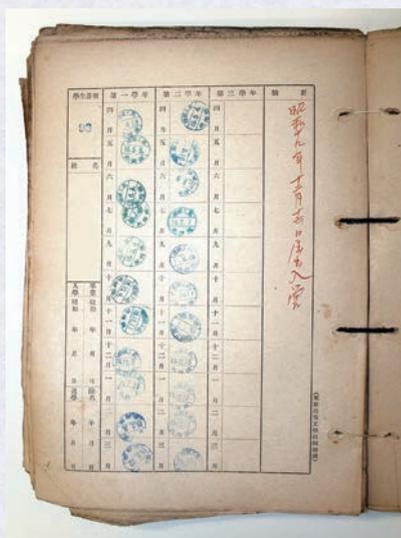
前述の甲良さんとは東京高等工学校附属工学校入学時から同期の後藤勝治さん(芝浦高等工学校機械工学科1945年卒業)も多賀城の海軍工廠に送り出されました。来る日も来る日も旋盤作業に明け暮れて敗戦を迎えました。

家に帰っても学校の授業はなく、不安を抱えながら過ごしていた折、3年生は9月に繰上げ卒業になるという話が耳に入ってきました。後藤さんは卒業式に出席。受け取った卒業証書を大切に保管してきました。

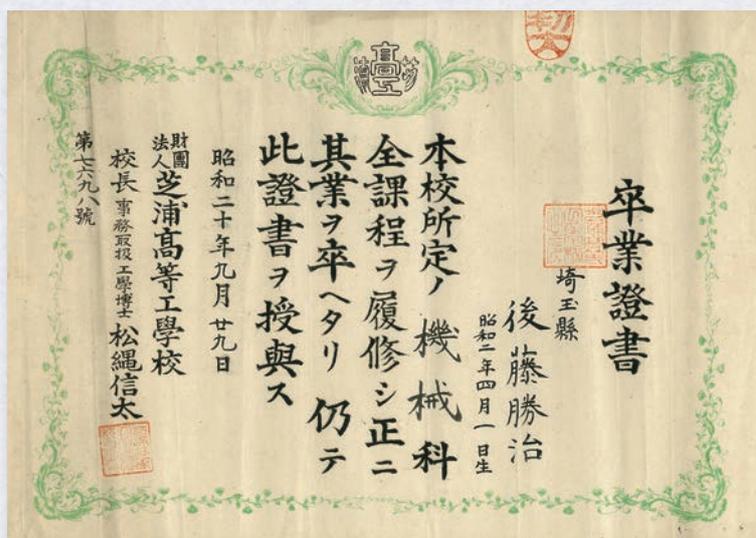
卒業式は1945(昭和20)年9月29日に挙行されました。その年5月の大きな空襲で唯一焼け残った本館4階の講堂が式場になりました。敗戦直後の混乱期、卒業式開催の知らせが学生たちに行き渡ることは難しかったのですが、講堂は大勢の人で埋まりました。卒業生に渡されたのはガリ版刷り(正式には謄写版印刷と呼ばれる。孔版印刷の一種)の卒業証書。物資の欠乏した当時、何もかも手作りの証書でした。周りの飾り罫の緑色は今も鮮やか。インクの調合を始め、印刷技術にすぐれ、丁寧に作られたものでした。



軍事教練(1937年)



学費納入原簿



後藤さんの卒業証書

コラム

やました いたろう
山下 市太郎

(1943年 東京高等工学校二部機械工学科卒業)

昭和13年、東京高工附属工科学校に入学した時は日米交渉決裂で暗雲が垂れ込めていた。油、鋼材、食料、資源欠乏の中、耐えるものは学術と根性だけ。とは言っても空きっ腹は我慢では凌げなかった。13歳の中学生には酷な話。ほとんどの者は夜か放課後、食べ物関係のバイトを探した。

中学の教科で驚きは製図の授業とチェックの凄まじさ。これには参った。授業時間で描き切れない図面を家に持ち帰り、夜中に仕上げた。翌日先生に見せると、前より悪いと赤鉛筆で大きな×を付けられ、泣き面。それは卒業資格不足を補うしごきだろ。

さらに、登下校はカーキ色の制服(東京で同色服は府立電気校)。週2回、軍事教練でも半日徹底的にしごかれた。岸本閣下特命だったか。

燃えさかる炎から芝浦を守り抜く

1945(昭和20)年5月25日、470機もの米軍機が来襲して東京を空爆。この夜、芝浦一帯は炎の海と化しました。芝浦工大の前身、芝浦工業専門学校も空爆にさらされ、辛うじて芝浦校舎の鉄筋コンクリート4階建ての本館は死守しましたが、木造3階建ての校舎は全焼しました。

この時の様子が、その時校内にいた三浦元秀教授もとひで(後の学校法人芝浦工業大学理事長)が著した『雑草2(補)』(1970年12月5日発行)掲載の「焦土と化した芝浦地区」に詳しく記されています。長い引用になりますが、表記を原文のままに紹介します。

(略)当夜本学の防衛の任に当たった教員は私の他に体育教員一名、学生30名で、19時所定の点呼をおわって交替仮睡に入ったのであったが、21時警戒警報に追討ちをかける空襲警報が慌しく発令されるに至った、本学においても非常呼集を行ったが、これに応じた学生は僅かに三名で総員五名となってしまった。(略)

沖電気を中心とする焼夷弾の乱投によって火災は見る見る内に拡大し、まき起る風力を強めつゝ本学方面に殺到し来たった。その一つは本学南西側旧称十間道路対側の一連の木造二階建三階建の商店をなめ盡すに及んで、十間道路は火の川と化して田町駅になだれ込んでいった。他方火力は本学東南方にも延び本学を迂回して、瓦斯タンクの方から国鉄路線を超えて田町方面に延びていったので、本学は火炎に包囲され旧本館の火災防衛に専心している間に木造三階建校舎をみすみす火災に任せざるを得なかったのである。(略)

空襲時余にして本学旧本館には交錯した警報に狼狽した、荷を負い子供の手をひいた家族が少なからず避難し来り、本学旧本館の引火性は高まり避難者

の危険も増大するに至ったので、声を大にして海岸方面風上への再避難を力説し誘導に成功した。従つて旧称十間道路側木造二、三階建商店が類焼、焼落ちつゝある段階において校舎の窓硝子は亀裂し、炎のあおりをうける度に亀裂と剥落は加はり、窓に設備されていた大防空暗幕は発煙し、屋内温度は上昇し、発汗、息切れを来す状態となったので、暗幕には三名の体重をかけてちぎり落として水湿し、机上面にも散水を加えた。洗面所の給水は三階以下であるが一階以上四階にわたり五名の馬穴リレーによって散水を果した。給水と貯水を使い果し、時に水をかぶり、床面溜り水に転身して水湿するなど二時間余りの闘いであった。(略)

燃えさかる炎と壮絶な闘いを繰り広げ、「芝浦」を守り抜こうとした者たちの命がけの行動でした。その功あって、芝浦校舎の本館は命拾ひしたのです。

芝浦は焦土と化し、田町駅のホームからも本館が見えました。見渡す限りの焼け野原に残っていたのは芝浦工大の本館と骨格だけの沖電気本社屋、2つの建物でした。

その後、米軍が本館を接收しようとしたが、三浦教授たち教職員の努力により何とか接收を免れることができました。



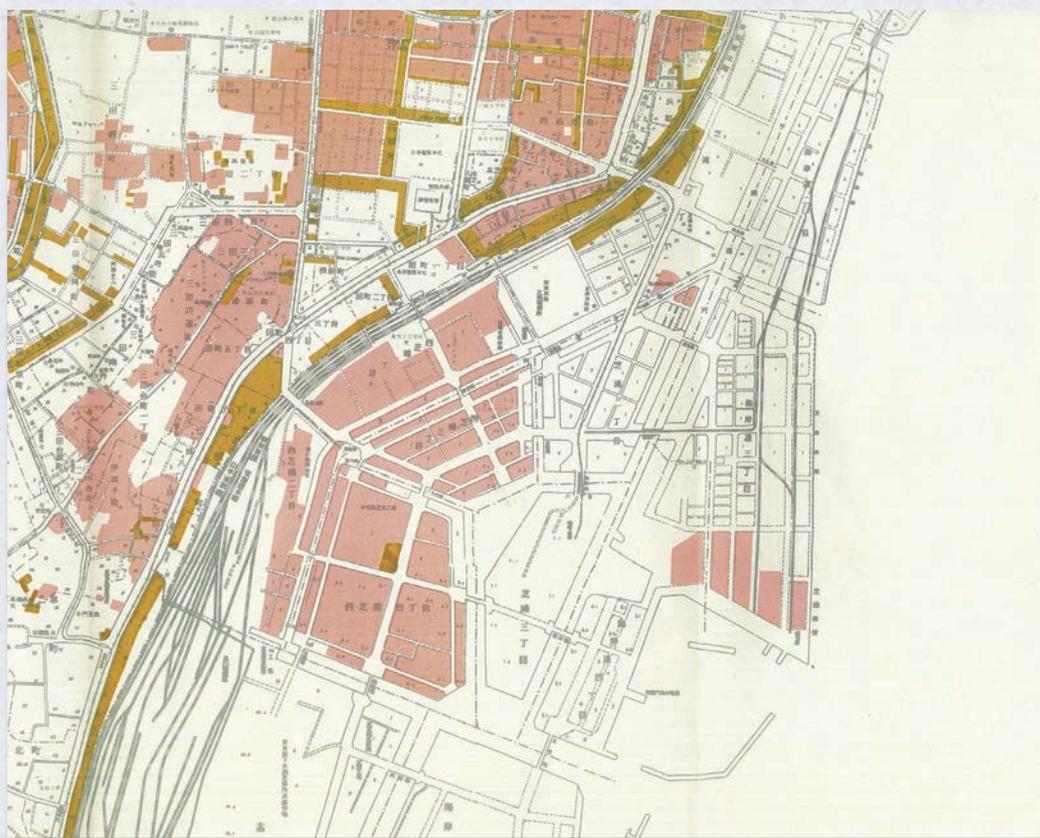
三浦元秀教授



【雑草2(補)】



空襲被害状況報告



米軍空襲による焼失区域(『東京都戦災誌』)

初代学長 松縄信太

国鉄の技術者から 芝浦の最高経営者に

1949(昭和24)年4月、戦後の学制改革により芝浦工業大学が誕生。初代の学長に就任したのが松縄信太でした。1880(明治13)年12月14日、新潟の生まれ。1905(明治38)年に東京帝国大学工学部機械工学科を卒業後、帝国鉄道庁(後の国鉄、現JR)に技師として入庁。1926(大正15)年には鉄道技術研究所の所長となりました。

芝浦との関わりは、1933(昭和8)年、芝浦工大の前身である東京高等工学校に機械工学科長として迎えられたところから始まります。戦時下の1944年から経営陣に加わるようになり、1947(昭和22)年5月、財団法人芝浦学園の理事長に就任。

その後、1951年に学校法人芝浦工業大学に組織変更が行われましたが、松縄は引き続き理事長を務め、1966(昭和41)年3月に理事長を辞任するまで19年、本学のトップとして経営手腕を振るいました。出身の国鉄とのつながりを生かした経営にも特徴が見られますが、少なからぬ国鉄出身者を本学の教職員として登用したこともその一つです。

理事長と校長や学長を兼任した時期もあります。1944(昭和19)年に設置された芝浦工業専門学校(芝浦工専)および芝浦工業学校の校長事務取扱を経て、1946(昭和21)年10月、両校の校長に就任しました。1949年4月、芝浦工専の新制大学への昇格に伴って初の学長となり、1961(昭和36)年6月まで約12年間務めました。芝浦工業大学の設置に加えて、1966(昭和41)年4月の大宮キャンパス開校も手がけ、本学の歴史に大きな足跡を残した人物です。

メートル法推進にも尽力

松縄信太には、日本におけるメートル法推進のリーダーというもう一つの顔がありました。1921(大正10)年4月11日、改正「度量衡法」が公布され、日本の長さの単位は基本的にメートル法を使用することが決まりました。この日は「メートル法公布記念日」となりますが、まだまだ尺貫法^(注)が根強く、松縄たちメートル法論者と尺貫法論者が激しく対立して、メートル法の全面的な採用には遠い現実でした。科学の基礎を確立する単位の制定となるメートル法採用を訴え、松縄は先頭に立って困難な状況を切り開いていきました。松縄がかつて芝浦の生徒・学生や教職員に渡して読むように促した自著『静かなる革命』(誠信書房、1959年)は、メートル法統一への国民運動を推進する彼の激しい情熱にあふれています。

1946(昭和21)年、松縄は日本度量衡協会(現日本計量振興協会)の会長に就任し、亡くなった1966年までの20年を通して会長を務めました。会長職最後の年の3月31日、メートル法が完成。改正「計量法」により、尺貫法による定規や升などの製造販売が禁止され、メートル法一本になったのでした。

同じ月に慶事が重なります。本学大宮キャンパスが誕生。3月30日に校舎の落成式が盛大に催されました。校地の取得に難儀し、多年を費やして漕ぎ着けた開校です。理事長として松縄が最後に成し遂げた大事業でした。

1966(昭和41)年7月6日、松縄信太は85年の生涯を終えました。力を傾注した芝浦工業大学の発展とメートル法への統一、積年の夢の結実を見届けた後の逝去でした。

(注)長さの単位を尺、質量の単位を貫とする日本古来の度量衡法。1966年にメートル法に統一された。



『芝浦工大新聞』号外(1966年7月6日付発行)



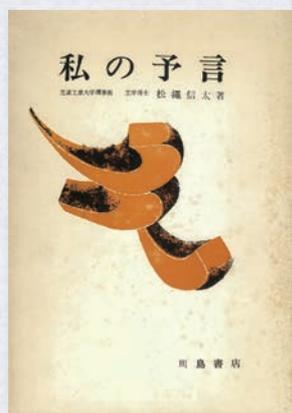
松縄信太

松縄信太年譜

1880(明治13)年12月14日	新潟県に生まれる
1905(明治38)年 7月	東京帝国大学工科大学機械科卒業
1907(明治40)年 9月	帝国鉄道庁に技師として入庁
1926(大正15)年 5月	鉄道技術研究所所長に就任
1926(大正15)年	鉄道省メートル法実行委員会委員長就任
1933(昭和 8)年 1月	東京高等工学校機械工学科長に就任
1938(昭和13)年 5月	松縄金属工業株式会社社長就任
1939(昭和14)年 1月	財団法人東邦産業研究所東京試験所所長就任
1946(昭和21)年 4月	財団法人日本度量衡協会会長に就任
1946(昭和21)年10月	芝浦工業専門学校校長に就任
1947(昭和22)年 5月	財団法人芝浦学園理事長に就任
1949(昭和24)年 4月	芝浦工業大学学長に就任
1961(昭和36)年 6月	芝浦工業大学学長退任
1966(昭和41)年 3月	学校法人芝浦工業大学理事長退任
1966(昭和41)年 7月 6日	逝去



『静かなる革命』



『私の予言』

コラム

卒業生の松縄信太追想

『芝浦工業大学—60年の軌跡—』(1991年、学校法人芝浦工業大学発行)収載の卒業生座談会で、1955年卒業のある卒業生は、松縄信太を追想して、メートル法にける松縄の思いの強さを物語る次のエピソードを紹介しています。

学長の松縄先生も運動部の指導にご熱心でしたよ。運動部の学生たちで学長を囲んで話をするということもありました。ただ、松縄先生はメートル法推進に情熱を燃やしておられたから、あの先生の前で尺貫法を使うことだけはタブーでしたね(笑)。いつだったか、ついつっかり「先生、今度野球部にいいピッチャーが入って来ます。六尺で十七、八貫目で……」と言ったらもうおしまい。「なぜメートル法で言わない」と怒ってしまって、口をきいて下さらなくなるんです(笑)。

各種学校から工専、新制大学へ

工専への改編

1943(昭和18)年11月9日、岸本綾夫理事長は、次の設立趣意書により、東京都長官に対して東京高等工学校の工業専門学校への改編を願ひ出ました。

設立趣意書：「財団法人東京高等工学校ハ、従来各種学校タル東京高等工学校ヲ経営シ来タリタルガ、今般発表ノ教育ニ関スル戦時非常措置方策ニ基キ、一層工業教育ヲ強化拡大スル為メ、前記東京高等工学校昼間部ヲ専門学校令ニ拠ル芝浦工業専門学校ニ改編シ、以テ益々国家ノ要望ニ答エントスル。サラニ夜間部ハ其儘残置シ、校名ヲ芝浦高等工学校ト変更致度ク此段及開申候也。」

同年12月、東京高等工学校は芝浦高等工学校に校名を変更します。1944(昭和19)年3月15日、この改編によって、芝浦工業専門学校とその併設校、芝浦工業学校の設置が認可されました。両校の校長事務取扱に就いたのは松縄信太でした。芝浦は念願の専門学校への昇格を果たし、正規の教育機関としての体裁を整えます。

新制大学への昇格

1945(昭和20)年8月、日本は敗戦。本学は施設設備を焼失、学生や教職員は四散して廃校寸前でしたが、松縄信太が先頭になって再生に取り組み、2か月後の10月には学校再開に漕ぎ着けたのでした。

日本が敗戦から立ち直る中、教育制度の民主化と高等教育の拡充が進みました。大学は旧制の一部の者のための特権的な学校ではなく、学びたいと願う者に広く開かれた施設として位置づけられます。基準に合致する施設は大学として認定されることになり、旧制の大学だけでなく、専門学校も競って新制大学

に移行しました。本学もその一つでした。

1948(昭和23)年には千葉工業大学との合併による大学昇格案が急浮上しましたが、理事会はこの案を否決。単独で大学設置の申請をします。そして、1949年、芝浦工業大学が設置され、初代学長には松縄信太が就任しました。

新制大学の認可は、初年度(1948年度)は12校でしたが、翌1949年度は大幅に増え、国立68、公立17、私立81の計166校が認可されました。本学の認可は1949年3月25日。施設設備の不足が原因と言われていますが、保留が度重なって、年度が改まる直前、ぎりぎりのタイミングで下りた認可でした。

この時点で工専から大学への切替許可を受けたのは、機械と土木の2学科のみ。以外の電気・建築・化学工業(後の工業化学科)の3学科は大学の認可を得るのにさらに数年を要しました。

三浦元秀元理事長は当時を振り返って回顧録『雑草2(補)』で次のように語っています。

顧るに私の在任中本学の難関であったというか、危機であったとでもいうべきことが三、四件あった。(中略)第三は新制大学の認可がなかなかきまらず、保留に保留を重ねて審議未了にでもなろうものなら翌年廻しという事になる。保留のたびに新聞に報道され、最後は本学だけだったので不評は後までもつよく尾を引いていたこと。

第四は当時大学といえば6大学であり、6大学でなければ大学でないようにとられていた。保留を重ねた不評から、芝浦工業専門学校第一回の入学志願者は3000名以上だったのに五年後の大学受験者は32名だったのである。6大学及びその工学部、理工学部と比較さるべくもない本学が果たして存続出来るかという危機であったこと。

極めて厳しい出発でした。本学教職員は学生数確保のために奔走しました。

芝浦工業専門学校規則

学年	第一学年	第二学年	第三学年
定時制	1-12	13-24	25-36
夜間制	1-12	13-24	25-36
特別制	1-12	13-24	25-36

電 気 科

学年	第一学年	第二学年	第三学年
定時制	1-12	13-24	25-36
夜間制	1-12	13-24	25-36
特別制	1-12	13-24	25-36

化 学 工 業 科

学年	第一学年	第二学年	第三学年
定時制	1-12	13-24	25-36
夜間制	1-12	13-24	25-36
特別制	1-12	13-24	25-36

第一章 総 則

第一条 本校は専門学校令（昭和二十一年法律第二十号）及び同令施行令（昭和二十一年勅令第百九号）に基づき設置せられたるものである。

第二条 本校の目的は、工業の発展に資する技術者を養成することである。

第三条 本校の教育課程は、工業の発展に資する技術者の養成に必要とする知識及び技能を授け、その修業年限は三年とする。

第四条 本校の教育課程は、工業の発展に資する技術者の養成に必要とする知識及び技能を授け、その修業年限は三年とする。

第五条 各科目の教科書及び参考書は、左の如きものを使用する。

芝浦工業専門学校規則

昭和二十三年七月二十九日

財団法人 芝浦学園

芝浦工業大学設置委員会の答申に基づき次の

一 位置 東京都港区芝浦三丁目一番地

二 学部 工学部 機械工学科 土木工学科

三 開設時期 昭和二十四年四月

四 略す

五 施設に關する 設置條件に附し

文部大臣 高瀬 莊太郎

芝浦工業専門学校規則

工学教育の礎石

製図の芝浦

1949(昭和24)年に設置された新制芝浦工業大学の草創期、教学面の立ち上げは、建築学科の三浦元秀、電気工学科の岩竹松之助、機械工学科の弓削政隆、齋藤雄三といった教員たちが中心となって進められました。新しい学校づくりの気概に燃えていた彼らは精力的に学外の研究者や教員を呼び集め、陣容を固めていきます。

大学の知名度が低かったので学生を集めるために授業料は低く抑えられていました。その分、教員たちの給料は少なかったのですが、ないない尽くしの学校だからこそ良いものを生み出そうとして、仕事はやり甲斐がありました。設備の貧弱さを補うためにも、教員たちは自らの教育手腕を頼りにして学生の指導に力を入れます。

なかでも特に製図教育は徹底され、機械工学科を始め、当時の学生たちは「朝から晩まで缶詰で製図を勉強した」と言われるほどに製図技術の習得に励みました。やがて大学を卒業した彼らは企業の中でその能力を遺憾なく発揮し、「製図の芝浦」の評価が社会に浸透していくこととなります。本学が大学として歩みを始めた当時、どの学科でも見られた教員と学生の努力が今日の芝浦工大の礎になっています。

後に、この製図教育をめぐる、いわゆる大学紛争の時代、1969(昭和44)年3月に「機械科騒動」と言われた争いが持ち上がります。製図教育に徹しようとする教員と、旧態依然とした職業教育はもはや時代遅れだとする学生たちの間で激しい論争になり、結着がなかなかつかず、機械工学科の教室団交だけがいつまでも続くという時期がありました。新聞各紙でも報道されましたが、この「機械科騒動」に対する評価は二つに分かれます。真の大学教育を求める学生

の主張は一理ありましたが、その一方で、製図の力を身に付けた芝浦の卒業生が社会で安定した評価を得ていることも現実でした。「機械科騒動」は工業専門学校と新制大学のはざままで揺れた芝浦工大を象徴する出来事だったと言えます。

技術者育成に執念燃やした二人の教授

芝浦工大草創期の教育を中心になって牽引した教員のうち、前出の弓削、齋藤両教授の名前は今も、「弓削政隆賞」(機械工学科)、「齋藤雄三記念賞」(機械機能工学科)として優れた卒業生に対する顕彰の機会に登場します。

弓削教授の学生の幸せを願う思いは強烈でした。将来、技術者として生きていくために、知識の不足は頑張りで克服するという実践教育を施し、弓削教授はこれを「根と馬力の教育!」と名づけ、何があっても絶対に音を上げない根性の涵養に努めました。試験時間の長さは、短くて2・3限、長い時は朝から夕方に及ぶこともあったと言われます。これは、学生に対して学問探求の真剣な時間を体験させようとした弓削教授の教育方針からでした。

齋藤教授は、所属した機械工学科の学生数が過多になるなどして教育環境が悪化したため、改善を図るために新しい学科(機械工学第二学科、現在の機械機能工学科)の設置に尽力しました。国内初のドラフター導入により製図教育を一変させ、予習とスピードを要求し、実験・実習に力を入れる実践的教育を徹底。学生たちを4年次は研究主体の卒業論文に集中させました。晩年、私財9億円を寄付しましたが、それを基に1990(平成2)年、大宮キャンパスに齋藤記念館が建てられました。



追悼集「弓削政隆先生の思い出」(1997年刊行)



在りし日の齋藤先生
(1969年3月 卒業生謝恩会にて)

追悼集「齋藤雄三先生の想い出」
(1997年刊 題字「青苔」は、先生の令夫人、齋藤トシさんによる揮毫)

短期大学

短期大学の移り変わり

芝浦工業短期大学は、1950(昭和25)年に機械科と電気科2学科の夜間の短期大学として、大学と同じ敷地内に開設(福田為造学長)されました。1952(昭和27)年には交通科(営業専攻・輸送専攻)を増設して校名を芝浦短期大学と改称します。1963(昭和38)年の大学院設置に伴い、学校法人芝浦工業大学の有する校地校舎等建物面積狭隘のため、1964(昭和39)年に一旦は廃止されました。しかし、1966(昭和41)年、大宮キャンパスの開校に伴って短期大学の専有校地校舎面積が確保できることになり、同年、芝浦工業短期大学(機械科・電気科)として再設置(岩竹松之助学長)されました。夜間開講、各学科35名定員の小規模の大学でしたが、芝浦工業短期大学と芝浦短期大学を合わせて、卒業生は2,074名を数えるに至りました。

修学意欲ある勤労学生の受け入れ

2年制(夜間)の短期大学は、専門職業に重きを置く大学教育を施し、良き社会人を育成することを目的に、大学教育の普及と成人教育の充実とを使命として開学。夜間大学のため年齢幅の大きい勤労学生を受け入れました。向学心旺盛で勤勉な学生たちは毎日午後5時50分から午後9時まで、工業専門科目のみならず、一般教養科目も学び、授業後にスポーツで汗を流したり友と人生を語りあったりして、学生生活を謳歌しました。卒業後は、工業界を中心に、技術者、個人経営者、公務員として、また、中学校技術科の教員として社会に貢献しました。

特徴的なのは、短期大学でありながら、希望者は中学校技術科の教員免許状(二種)を取得できたこと

です。約50名の卒業生が技術科の教員になりました。当初は教職教科として中学校職業科(二種)教員免許の課程認定を受けていましたが、社会変化から選択科目である職業科を置く中学校が数えるほどしかなくなり、教員になる者は皆無と言ってよい状態でした。これを何とか改善したいと切望した教職員が、中学校必修科目「技術科」教員養成の課程認定を受けるために尽力。工業大学で中学校技術科の課程認定を受けることは相当に難しい問題でしたが、壁であった「木工」の集中実習を都立職業訓練所に、「栽培」は東京農業大学に集中講義と実習とを依頼することを条件に、芝浦工業短期大学に中学校技術科教員養成課程が認可されました。

当時、中学校技術科の教員が大変に不足していたため、認定が下りるや、東京都から担当課長がわざわざ挨拶に短期大学を訪れたほどでした。短大卒ではありましたが、技術科の免許を持つ学生は次々と教員に採用されていきました。

芝浦工業短期大学の終焉

その短期大学も時代の流れから終焉を迎えます。一つの大学に5年制二部と夜間の短期大学を置く意味がないと見なされるようになり、短期大学教授会も2年間では学生に対して満足な教育を施すことは難しいとして、1976(昭和51)年度から学生募集停止を決定。1983(昭和58)年3月、芝浦工業短期大学は廃止となり、短い使命を終えました。

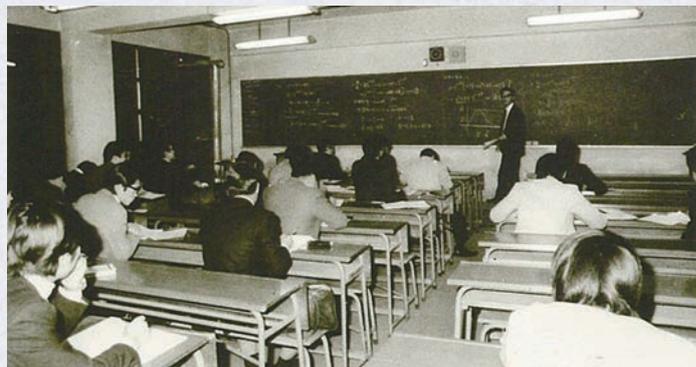
時代の要請に応えようとした短期大学は、有為の卒業生を輩出し続けてきました。小さな規模の大学だけに、学生同士、学生と教職員間のコミュニケーションが密で、学生たちは2年間という短い修学期間でしたが、心の通った学園生活を享受しました。



機械科 たわみ実験(1970年ごろ)



電気科 変調回路実験(1970年ごろ)



機械科授業(1970年ごろ)

コラム

あら かわ ゆう こ
荒川 祐子

(1972年 芝浦工業短期大学電気科卒業) 『歴史における芝浦工業大学』より抜粋して転載

上京し、入学式前に事務室を訪ねたところ女は私一人だけ、その上今までいなかったという話を聞き夢の話かと思った。募集要項によると男女共学と記してあったので、そういう事態はさらさら考えてもいなかったのである。当時は学園紛争が続き、「新執行部を選出せよ！」等と看板や大きな張り紙があって、学校は異様な雰囲気に包まれていて、一日も早く授業を受けたいと思っても一向に始まる気配がなく、どうなるか不安に思う日が続きました。ようやく入学式を迎え、本当に女生徒は一人でした。(中略)授業は初めての科目が多く、実習や実験もあり、先生方も工夫なされていたので、何事も興味津々で楽しいものでした。(以下略)

工学部二部

社会人のための工学教育

1956(昭和31)年4月、本学は工学部二部(5年制)を開設し、機械工学科および電気工学科の2学科、各40名定員としてスタートしました。既設の芝浦工業短期大学(2年制)の修業年限不足による工学教育の不満を解消し、さらに昼間部と同質の教育を夜間部で行うというシステム(5年制・12期)を導入。5年制、12期教育とは、夏季・春季休業期間を大幅に削減し、1年間をフルに活用することで15週を1期として5年間で12期に区切るもので、昼間部並みの工学教育を目指しました。

当時の日本は「神武景気」の好況のただ中で、とりわけ工業界の発展は目覚ましいものでしたが、そのころの企業は社員に対して企業内教育による技術者養成を行うには未熟な環境でした。新制の義務教育を受け、目的意識を持つ知識欲旺盛な若者にとって本学の二部は魅力的な学びの場となりました。二部の学生は有職者が多数を占めていましたが、時間を有効利用して二部学友会、二部クラブ連合を発足させ、各種の課外活動も盛んに行いました。

1970年代の大学はいわゆる大学紛争の波にさらされました。二部にあっても自治会組織の「クラブ連合」が中心になり、二部が軽視されているとして問題視、二部学生の教育環境改善の要求を出しました。それを受けて学長室直属の「二部検討委員会」が置かれ、カリキュラムから運営組織に至るまで多岐にわたる改革がなされました。

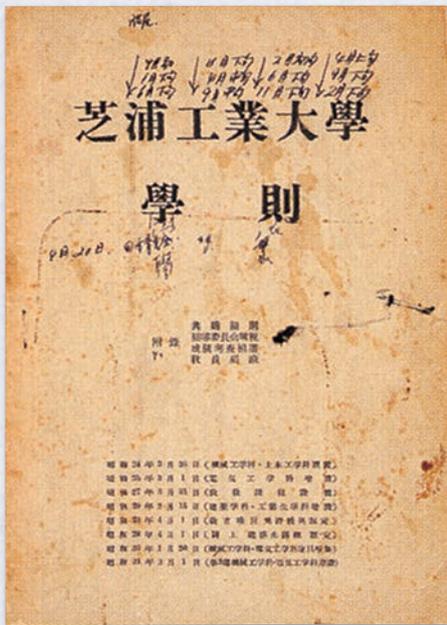
勤労学生減少から始まった二部の衰退

1970年代後半、二部学生に変化が表れてきました。有職者の割合が減少し、一部(昼間部)に入れな

かったため二部に入学する職を持たない学生者が増えてきます。入学当初から一部への編入学を希望する学生も二部に入学してきました。かつては学生気質にも一部との違いが見られたのですが、二部の独自性は薄れていきます。一方で大学院への進学者も現れ始めました。

働きながらも学ぼうとする意欲が社会的に低下する中、二部の入学者が減少し、学力の低下も深刻化してきました。両学科の卒業生が100名に達しない状況が続くようになります。こうした問題の解決に二部の教職員はまさに昼夜を問わず奮闘してきました。5年制から4年制へのカリキュラム改編や、有職者の入学制度の検討、そして教員組織の変更にまで及ぶ改革となりました。電気工学科では教員の二部専任の交替制が採られます。小論文や面接による入試も実施に移されていきます。低迷期ではありましたが、教職員の地道な努力により、二部の廃止は免れました。

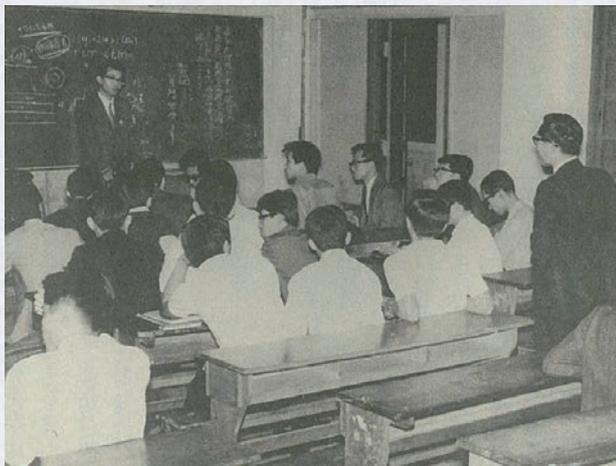
しかし、社会変化の大きな流れに抗することはできず、1995(平成7)年4月、二部は4年制に移行。同時に、電気設備技術の高度化、複雑化に対応して、建設系と電気系、二つのカリキュラムをコース制とした電気設備学科が増設されて3学科体制となり、二部教育の充実が図られました。しかし、2000(平成12)年を境に急激に志願者が減少していき、2008(平成20年)年3月、二部は最後の卒業生を送り出して半世紀の歴史の幕を閉じました。工学部二部が送り出した卒業生は7,502名(機械工学科3,837名、電気工学科3,207名、電気設備学科458名)に上ります。



芝浦工業大学学則(1956年度)
 (上部に12期の試験実施スケジュールの
 書き込みがある)



二部5年制開設を伝える
 「芝浦工大新聞」第16号(1956年6月18日刊)



1965年ごろの二部の授業風景



芝浦校舎(2005年)

鐵中・育英と連なる芝浦の史脈

もう一つの源、東京鐵道中学

1953(昭和28)年10月1日付の挨拶状があります。差出人は連名、学校法人芝浦学園理事長、松縄信太および学校法人鐵道育英会理事長、山本頼雄です。鐵道育英会の経営する東京育英高等学校が芝浦学園に合併することになり、芝浦学園がその事業の一切を継承したという挨拶文をしたためたものです。

東京育英高等学校は芝浦工業大学中学高等学校の前身、その源は東京鐵道中学(鐵中)です。鐵中が東京・麴町の鐵道省教習所内に開校したのは1922(大正11)年。有元史郎が東京高等工商学校を創設したのは1927(昭和2)年、その5年前になります。

鐵道創業50周年の1921(大正10)年、記念する事業の一つとして財団法人鐵道育英会(1951年、学校法人に組織変更)が設立されました。その開設した学校が鐵中です。国鉄(現JR)職員とその子弟を主な生徒対象にしていました。鐵中の修業年限は5年。当時、東京では珍しかった夜間授業の中等学校、一流の教授陣、少人数教育、熱心な生徒と高い学力水準を特徴とする学校でした。

1938(昭和13)年、池袋にあった東京鐵道局教習所内に校舎を移転。1942(昭和17)年には、鐵道職員養成学校と見られ、誤解されるのを避けるため、経営する鐵道育英会にちなんで鐵中は東京育英中学と改称しました。その後、中学校令の適用を受けた東京育英中学校、新制高校定時制の東京育英高等学校と変遷し、芝浦学園に吸収合併後は昼間と夜間を併用した学校に衣替えしました。

1954(昭和29)年には芝浦工業大学高等学校と校名変更。さらに1982(昭和57)年、校舎が池袋から板橋へ移転した時に中学校を新設し、芝浦工業大学中学高等学校と改称して今日に至っています。

鐵中の教育の成果

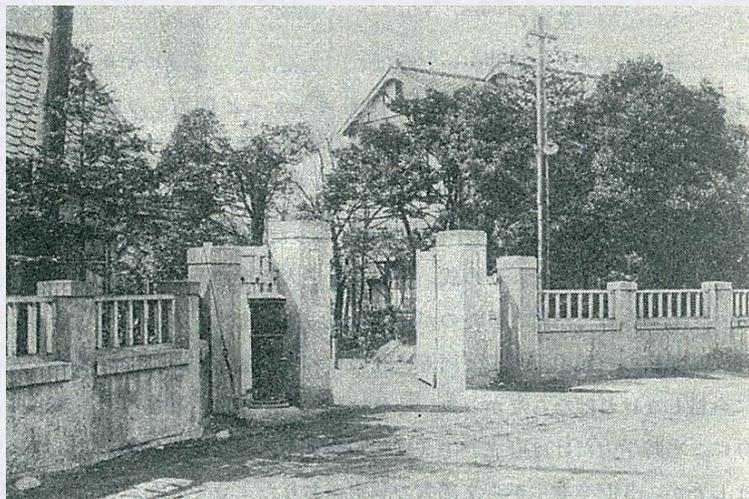
鐵中創立の発案者であった十河信二^{そごう}鐵道省經理局會計課長(後の国鉄総裁)は、個性尊重の自由主義的な高等普通教育を追求しました。国鉄という企業の制約がありながら、こうした教育の場が構想され実現していったことも本学の歴史に組み入れられます。

鐵中1期生は1927(昭和2)年に卒業しましたが、当時の文部省は夜間中学を認定していなかったので上級学校の受験資格はありませんでした。このため、鐵中の進学希望者は「専門学校入学資格検定試験」に合格するために懸命に勉強しました。

既に鬼籍に入った方ですが、1期生の一人、榊田光さんは、同窓会の席上、在学時代を偲んで次のように語っています。(記念誌『鐵中・育英・芝浦工業大学中学高等学校八十周年[1922-2003]』より抜粋)

鐵中は夜間授業ですが、教授陣は立派な一流の方々で、向学心に燃える生徒が集まった特殊な中学でした。私どもは、昼は国鉄の職員として勤務し、夜は鐵中に通って勉学に勤しみました。授業は、優秀な先生方が熱心に講義されるので、我々も昼の疲れを忘れ、必死で耳を傾けて謹聴しつつ、しつこく質問もしました。

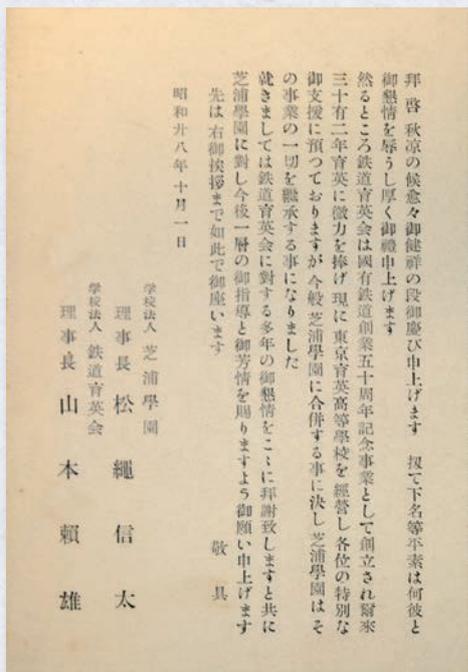
榊田さんは鐵中卒業後、第一高等学校、東京帝国大学法学部に進み、社会に出ては裁判官、弁護士として活躍した方です。鐵中の卒業生には医師や教師になった人も少なくありません。確かに多くは国鉄に残って幹部職員になりましたが、各界で活躍する人材を輩出しました。卒業生が多様な進路を選択したことにも鐵中の教育の成果がうかがえます。



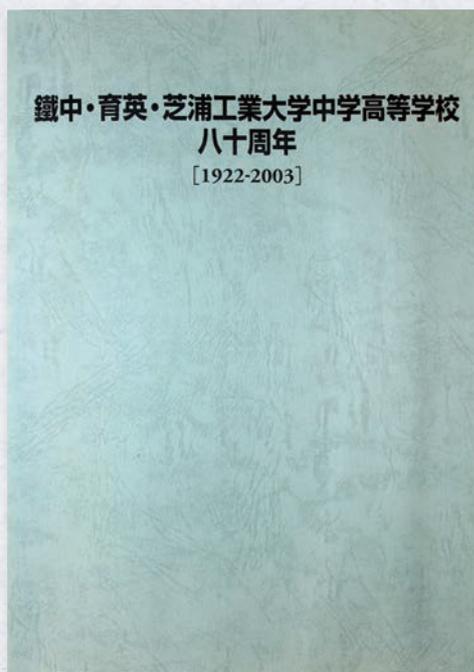
鐵道中学正門



故・十河信二元国鉄総裁(正面)



合併の挨拶状



八十周年誌

大宮キャンパス開校

新天地を求めて

1962(昭和37)年当時、芝浦キャンパスには、大学、大学院、短期大学、そして付属工業高校の学生・生徒がひしめき合っていました。さらに、1965(昭和40)年12月には、大学一部に4学科(機械工学第二学科・通信工学科・建築工学科・工業経営学科)増設の認可が下ります。狭い芝浦キャンパスだけで教育できる学生・生徒数では到底ありませんでした。

第二キャンパスを求めて、池袋の陸軍火薬廠跡地から始まり、八王子、川口、と校地探しを続けた結果、1963(昭和38)年、埼玉県大宮市(現さいたま市)に約14万3千㎡の土地を購入して実現したのが大宮キャンパスです。

キャンパス開校から飛躍へ

開校したのは1966(昭和41)年4月のことでした。設計監理は鉄道会館一級建築士事務所、施工は大林組で、1965(昭和40)年6月に着工、突貫工事とも言える異例の速さで1期工事が行われ、1966年3月15日に竣工。同月30日には盛大な落成式が挙行されました。

開校当時の様子は、「周辺に建物はほとんどなく、東大宮駅のホームから校舎が見えた。駅から校舎までの道は舗装されておらず、駅の階段を降りたところには、芝浦工大専用の長グツを入れる下駄箱が、校舎の入り口にはクツの泥を落とす特製の流しがあった」(『芝浦工業大学—60年の軌跡—』)と伝えられています。

大宮キャンパスには、工学部一部の1・2年生、そして機械工学第二学科と工業経営学科の1~4年生が通うことになりました。

当初の大宮キャンパスは、2号館(事務棟)、3号館(教室棟)、体育館、大学会館、クラブ棟、学生寮、そして守衛所から成り、現在の学生食堂棟の位置がキャンパスの正面入口でした。大学会館の向かい側(現在の齋藤記念館の場所)に1号館(管理棟)を建設する予定だったという説もありますが、定かではありません。

特筆すべきは体育館。地上2階、延べ面積2,035㎡の建物は当時、日本の大学の体育館で2番目の大きさだったそうです。しかし、その他の教育施設が未整備で、その一つ、図書館は独立した建物ではなく、1教室分の図書室があったに過ぎませんでした。

その後、1970(昭和45)年に4号館が竣工。1971年11月に図書館が開館、1978(昭和53)年9月にはクラブハウスが竣工しました。図書館は本学の学生と教職員、クラブハウスは在学生と卒業生を対象にして、いずれも設計コンペが行われ、多数の応募の中から選ばれた設計を基に実現した建物です。そして1990(平成2)年9月には故・齋藤雄三教授(機械工学第二学科)の遺族の寄付により齋藤記念館が誕生。同館は埼玉県の景観賞を受賞しました。そして1991年のシステム工学部(現システム理工学部)の新設に伴い、システム工学部棟(現5号館)が建設されました。大宮キャンパスに大学として風情が備わっていきます。

一方、同キャンパスで学ぶ学生数が増加し、既存の建物の老朽化が進んできたことから、施設の新増設や改修が行われることになりました。2号館は解体され、その跡に2011(平成23)年1月、地上4階地下1階建の新2号館が竣工。白の堂々たる外観の建物が齋藤記念館と対をなして並び立ち、大宮キャンパス発展の象徴ともなっています。



開校時の大宮キャンパス



大宮キャンパス建設工事



大宮キャンパス建設工事(完成時)

スポーツ隆盛

東都大学野球一部リーグ初優勝

1961(昭和36)年11月9日、神宮球場三塁側スタンドに大歓声があわぎ、五色のテープや紙吹雪が乱舞しました。東都大学野球秋季リーグ戦の最終日、芝浦工業大学が駒澤大学を破って一部リーグ初優勝を遂げた瞬間です。

その年の春季リーグ、本学は日本大学と覇を争い、雌雄を決する一戦で惜しくも敗れました。捲土重来の秋季リーグ、優勝決定は最終戦にもつれ込みます。敗れると再び涙を飲むことになり、どうしても負けれない試合でした。

試合は土壇場まで劇的に展開しました。3対2で芝浦工大がリードして迎えた9回表、駒澤の攻撃は2死満塁、バッターのカウントは2-3。息詰まる空気の中、最後の打球となった強いゴロをピッチャーが捕球、一塁へ送って試合終了。芝浦工大は宿願の優勝を果たしました。

1961年度秋季リーグ10勝3敗、勝ち点5の完全優勝。東都大学野球史上、専修大学、日本大学、中央大学の3大学以外から優勝チームが出たのは、1958(昭和33)年秋の学習院大学に次いで2度目。芝浦工大はリーグに旋風を起こしました。

1950(昭和25)年、新制芝浦工業大学誕生の翌年に野球部の歴史は始まります。野球好きの学生11人が集まって部を立ち上げました。野球部部長は、当時の芝浦短期大学の岩竹松之助学長。1951年春、本学は東都大学リーグ三部に加盟、1年後に二部に昇格しましたが、そこで足踏み。何度も優勝しながら一部との入れ替え戦で敗退を繰り返し、まる5年、10シーズンを二部で過ごしました。

停滞から脱却し、一部に昇格して優勝を成し遂げるために、岩竹部長は「しっかりした監督を置くこと

が第一」と考え、1956(昭和31)年末、田部輝男氏(立教大学OB、元プロ野球西鉄選手)を本学に迎えます。そして、翌1957年春季は二部優勝、リーグ加盟以来13シーズンぶりにして一部昇格を果たしました。

しかし、道は平坦ではありませんでした。一部の他のチームと力に差があり、1957年の秋季は二部に転落。再出発を期して学校側も奮起、田部監督は全国を回って有望な選手を集め、チームの土台を固めました。1958年秋季、一部に復帰して、ようやく勝ち取った優勝。リーグ加盟から11年、22シーズン目にしてたどり着いた頂点でした。

初優勝決定の試合後、神宮球場から芝浦キャンパスまで祝賀パレードが行われました。監督、ナインを乗せたバスを先頭に、約3千人の学生が手に手に提灯を持って球場を出発。午後7時過ぎ、芝浦の地元の人たちも迎える中、本学校舎玄関前に到着。全員で校歌を合唱して解散しました。

芝浦の勇名はせた運動部の活躍

この当時、野球以外にも多くの運動部が活躍しましたが、その一つ、ハンドボール部も数々の輝かしい戦績を残しています。1959(昭和34)年の4大タイトル(全日本学生選手権大会、全日本総合選手権大会、全日本学生王座決定戦、全日本室内総合選手権大会)の独占獲得や47連勝など、枚挙にいとまありません。春秋のリーグ戦を始め、ハンドボールの主要な大会の優勝は計39回、準優勝は22回、「芝浦工大ハンドボール部」の名は全国に広まります。その他、スキー部も、何人ものオリンピック選手を輩出するなどの活躍をしました。こうした運動部のめざましい活躍が本学の知名度を上げた時代がありました。



「芝浦工大新聞」(1961年12月1日付)



野球優勝決定の瞬間、歓声にわく芝浦工大応援席



優勝を祝う提灯行列

スポーツの記録

野球：東都大学1部リーグ	1961(昭和36)年秋＝初優勝
	1962(昭和37)年春＝2位
	1963(昭和38)年春＝2位
	1968(昭和43)年春＝2位
	1968(昭和43)年秋＝優勝
ハンドボール	1970(昭和45)年春＝優勝
	1956(昭和31)年度＝王座決定戦初優勝
	1957(昭和32)年度＝王座決定戦二連勝
	1959(昭和34)年度＝4大タイトル制覇 全日本総合選手権優勝
スキー	1961(昭和36)年度＝47連勝達成
	1961(昭和36)年～1976(昭和51)年オリンピック冬季大会日本代表
	アルペン種目＝野戸恒男、柏木正義、古川年正、鈴木謙二
	ノルディック＝田中英一、佐々木信孝
	1961(昭和36)年1月＝全日本学生スキー選手権(2部)総合優勝
1969(昭和44)年1月＝全日本学生スキー選手権(1部)総合優勝	

大学闘争

第1次闘争

1960年代後半、日本大学や東京大学をはじめ、全国の大学でいわゆる大学紛争が起こり、激化しました。他大学で学生による学費値上げ反対運動が頻発している中、1968(昭和43)年1月、芝浦工大の昼間部学費の値上げが発表されました。これに大宮キャンパスの1、2年生を中心にした学生たちが反対の声を上げ、1月末には自主的に学生大会を開催して学費値上げ白紙撤回要求を決議。学生の要求の根底にあったのは大宮キャンパスの教育環境の不備をそのままにしての学費値上げに対する疑問でした。

その学生たちが芝浦キャンパスへ出向き、当時の服部定一^{さだいち}学長との会見を求めて学園は混乱します。入試の実施日が迫る中、業を煮やして事態收拾に乗り出してきたのが助教授や講師を中心にした若手教員でした。1968年2月19日、入試前日の夕方、若手教員の仲介による学長会見が芝浦キャンパスの体育館で始まりしました。2千名もの学生で膨れ上がった会場は騒然となり、学生の要求、学費値上げの白紙撤回と民主化15項目(次ページ参照)の実現について話し合いは紛糾するばかり。そのうち学長が倒れて会見は中断、解決は残された教員たちに委ねられることになりました。

日付は2月20日が変わって入試当日を迎えています。教員たちは学生の要求にどう対応するか討議を重ね、結果、「民主化15項目を実現し、学費値上げは不問に付す」という調停案にまとめて、学生に提示しました。これを受けて学生たちは激論の末にクラス単位の採決を行い、教員の調停案を可決。土壇場で入試実施に漕ぎ着けることができ、芝浦工大の歴史の中で「第1次闘争」と呼ばれた紛争は収束したのでした。

第2次闘争

第1次闘争後、学生の問題提起を受けた教員たちが学内の民主化に積極的に取り組み、民主化15項目が一つずつ現実化していく中、最難問の項目、経理公開が争点に浮かび上がってきました。1968年11月22日に開かれた大衆団交で、学生たちは経理不信から理事会と衝突し、団交は決裂します。学生たちは直ちに全学闘争委員会(全学闘)を結成し、芝浦、大宮と続けてキャンパスをバリケード封鎖。「第2次闘争」が始まりました。

事態が急展開したのは、同年12月の理事会総辞職を受けて、1969年1月に理事代行会議が発足してからでした。1月29日、理事代行と学生の大衆団交が芝浦キャンパスの体育館で開かれ、学生の掲げた民主化11項目(次ページ参照)の要求はすべて通り、確約書に調印して取り交わし、全学闘も自主的にバリケードを解除するという異例の解決となりました。しかし、これには「学生に迎合した芝浦工大」といった論調の新聞各紙の報道など、批判が相次ぎました。

その後、芝浦工大では、全国的に反対運動が広がった「大学の運営に関する臨時設置法案(大学立法)」に対して1969年6月、教授会が抗議の休講を決定したり、7月には全学闘が芝浦キャンパスのバリケード封鎖に入ったりする政治的な動きもありました。しかし、8月、大学立法は成立。学内に挫折感と疲労感が広がり、学生、教職員いずれの側にも早く平穏な日常に戻りたいとする意識が強くなっていきました。9月、大宮キャンパスで新左翼党派の学生同士の抗争から他大学の学生が亡くなるという痛ましい事故が起こって、バリケードは次々に解除され、大学闘争は衰退していったのでした。



第1次闘争時の学生大会(1968年)



大衆団交で民主化11項目が確約された(1969年1月29日)



大学立法反対デモ(1969年)



第2次闘争時のバリケード封鎖された芝浦キャンパス(1969年)

民主化15項目(1968年2月19日)

1.	教育環境の改善
2.	図書館の建設
3.	学長公選
4.	理事長・学長の兼任廃止
5.	三者(教員・理事・学生)協議会の設置
6.	教授会の確立
7.	事務と教育の完全分離
8.	学内学生団体の整理
9.	学友会(体連と文連)の分離
10.	応援団のクラブへの格下げ
11.	掲示・立て看板・ビラ・集会の自由
12.	寮の民主化
13.	1月31日(学生大会)の暴力事件に関する(学生部長の)責任追及
14.	奨学金の民主的配分
15.	経理公開

民主化11項目(1969年1月29日)

1.	寮の管理とその他について
2.	学生会館の建設
3.	図書館の建設
4.	学生定員一過剰な水増し教育の解消
5.	スクールバスについて
6.	奨学金について
7.	守衛心得撤廃
8.	カリキュラムの編成について
9.	二部授業軽視の撤回
10.	個人ロッカーの設置
11.	教員給与の引上げ(団交では省かれた)

学生4つの拒否権(1969年1月29日)

1.	予算・決算等に対する拒否権
2.	教育上の決定に対する拒否権
3.	人事の決定に対する拒否権
4.	管理介入権

* 民主化11項目を具体的に保障する4つの拒否権が学生にあることを確認

学園の民主化

若手教員による大学改革

1968(昭和43)年1、2月に芝浦工大で起こった第1次闘争で、学生たちから問題提起を受け、大学改革の必要性に目覚めた若手教員たちは学内改革に乗り出します。その中でも特に大きな仕事が、学内に話し合いの場を設けたこと、教授会を確立したこと、教職員組合を結成したことの三つでした。

若手教員たちは先ずは同年3月、「助講助会」を結成。学内の助教授、講師、助手によって構成された組織で、それまで研究室単位のつながりしかなかった芝浦工大にとって画期的な組織形態でした。この助講助会が中心となって4月には理事会・教員・学生の三者の話し合いの場である「全学協議会」が発足。そこでは学生の要求である「民主化15項目」の具体的な実現方法について話し合われましたが、次第に理事会と学生との溝が深くなって全学協議会は機能しなくなりました。

一方、それまで教授のみで構成されていた教授会も大きく変わります。新しい規程に基づいて正式に発足した新生教授会は議決権を持つことになり、構成員に助教授も含まれるようになりました。また、9月には加入教職員127名による結成大会が開かれ、芝浦工大で初めての本格的な教職員組合が誕生しました。

こうして民主化15項目が一つずつ現実化していく中、最も難問とされた経理の公開が争点の中心に浮かび上がってきました。1968年11月22日、未処分金をめぐる大衆団交が決裂。学生たちがキャンパスをバリケード封鎖して、第2次闘争が始まりました。

「黒本尊」での話し合い

当時の教職員の動きとして伝えられているのが「芝浦工大の黒本尊時代」です。バリケード封鎖によってキャンパスから締め出された教職員は学外に居場所を求め、やがて黒本尊(阿彌陀如来像)が祀られている港区芝の増上寺に落ち着いたのでした。その時から翌年、1969(昭和44)年2月、バリケード解除までの約2か月間、多くの教職員が大学ではなく、増上寺の黒本尊堂へ通う生活を送りました。

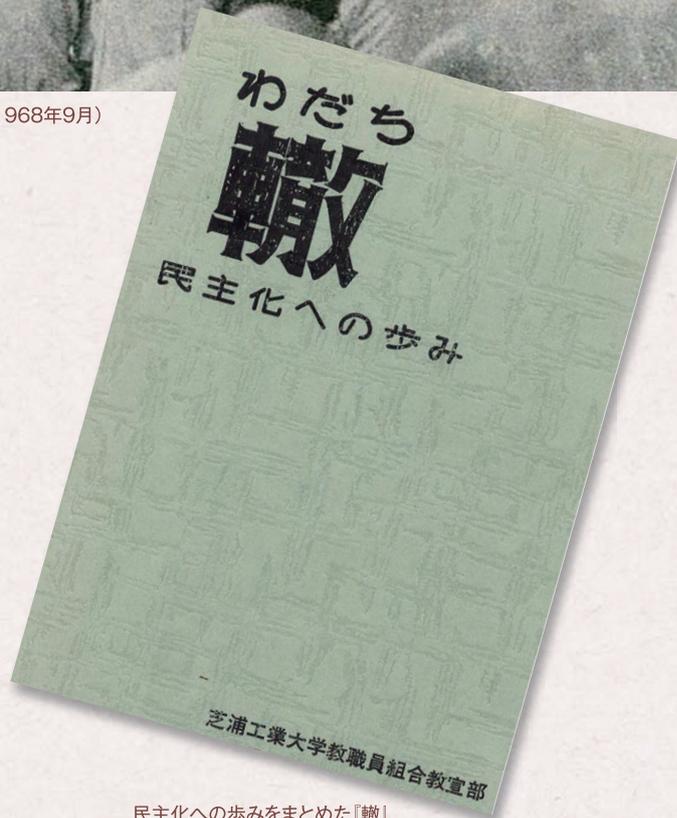
畳111畳敷きの堂内は150人を超える教職員でいっぱいになり、吹き抜ける寒風にもかかわらず、人いぎれでむんむんしていたと言われます。集まった教職員は、この仮住まいで研究室や事務室といった壁を越えて語り合い、じっくりと意見の交換をしました。当初は学生の乱暴なやり方に対する非難に論議は集中しましたが、やがて話し合いの焦点は、芝浦工大の民主化・近代化をいかに推し進めるかに移っていきます。

このような空気が下地となって1968年11月26日、教員と職員の両方で構成される組織「教職員連絡協議会(教職協)」が黒本尊で発足。第1次闘争以来、各学科の教員がばらばらに動き、教員と職員の足並みもそろわなかったのですが、教職員を束ねる画期的な全学組織ができました。

教職協の動きが活発になる中、それまでの服部理事会の理事が総辞職したことにより、12月25日、寄附行為に基づく理事選挙に代えて理事代行選挙が黒本尊で行われました。年明けて1969(昭和44)年1月4日、藤田栄理事長代行を中心とする「理事代行会議」が正式に発足。その後、1月29日に開かれた大衆団交で理事代行会議は学生の掲げる要求をすべて受け入れ、確約書に調印するという異例の紛争解決を行いました。



組合結成大会(1968年9月)



民主化への歩みをまとめた「轍」

コラム

そのだ ひろし

園田 紘史

元専任講師（土木工学科）、元教職員組合委員長（1968年 土木工学科卒業）

1968年に始まった学生による第1次闘争の結果、それまでの経営陣の学園経営が破綻し、急きょ執行部となった藤田理事代行会議と新生の教職員組合との間で「事前協議」制という労働協約が結ばれた。その協約が、次の理事会、橋本理事会が行おうとする機構改変や人事異動に対して、組合の異議申立の根拠となり、橋本理事会は協約を破棄してきた。組合は協約破棄に反対し、3次にわたってストライキを行った。入試直前であり、組合員の意見が対立し、分裂したためストライキは何の成果もなく終了した。——当時の教職員の手で作った諸制度が今、教職員で自主運営されているのを見る時、「事前協議」制は幻ではなく、今も生きているのだと思う。

大学存亡の淵から

存続の危機

1968(昭和43)年からおよそ2年にわたった学園紛争を通して本学の民主化は急速に進みました。その一つの成果である新しい寄附行為(基本規定)に基づいて、1969年12月から1970年2月にかけて本学初の全教職員参加による学長選挙、評議員選挙が行われ、その結果、橋本富寿^{とみじゆ}理事長、鳥山武雄学長を代表とする新しい運営体制が発足しました。

新理事会はその前の執行部の急激な改革路線とは異なる施策を推し進めます。しかし、それには反発も強く、教職員は二手に分かれ、対立を深めていきました。そうした中で迎えた1971(昭和46)年2月の入試は、理事会に対する教職員や学生の反対行動が強まったため、大学構内にガードマンを配置する厳戒態勢下で実施されました。

同年4月、その新入生の中に195人の不正入学者が含まれていることが発覚。教授会は入試調査委員会を立ち上げ、不正入学事件の調査・解明に乗り出しましたが、間もなく大学経理に多額の使途不明金があることも明るみに出るなどして、学内は紛糾します。

混乱に拍車をかけたのは、同月、鳥山学長が教授会に無期停会命令を言い渡し、学長に協力的な「正教授会」と称する新しい教授会を発足させたことでした。二つの教授会が並立するという異常な体制は翌年の1972(昭和47)年5月まで続き、理事者側の「正教授会」と従来の「教授会」による深刻な対立という不幸な事態を招くに至りました。

事態はさらに悪化の一途をたどります。同年6月、団交要求の学生集会において学生と大学当局が配置したガードマンが激突、機動隊が導入されて学生96人が逮捕されました。同じ頃、「教授会」議長の古田晋吾教授に対して、出勤停止命令や辞職勧告が出さ

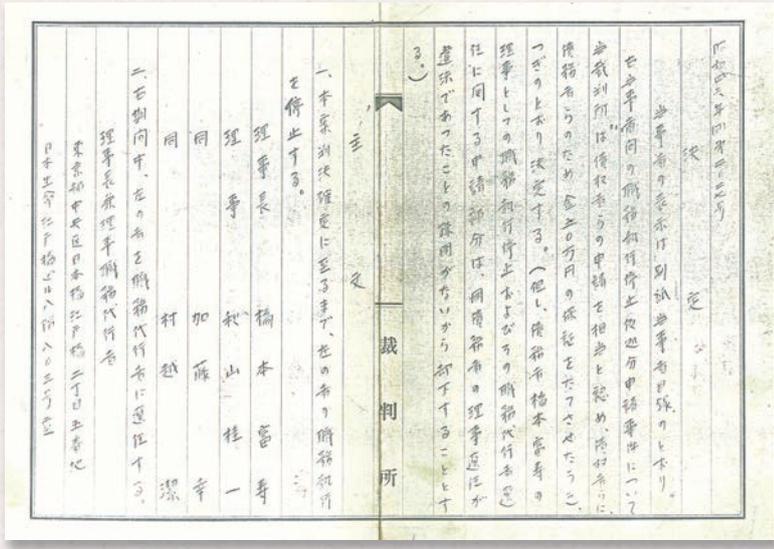
れます。本学には大学の自治を守り抜く気概に燃えた教職員が多くいましたが、もはや自主解決は絶望的で、解決の道を司法の場に求めざるを得ない状況に立ち至りました。この時、本学はまさに危急存亡^{とき}の秋にあったと言えます。

裁判による収拾

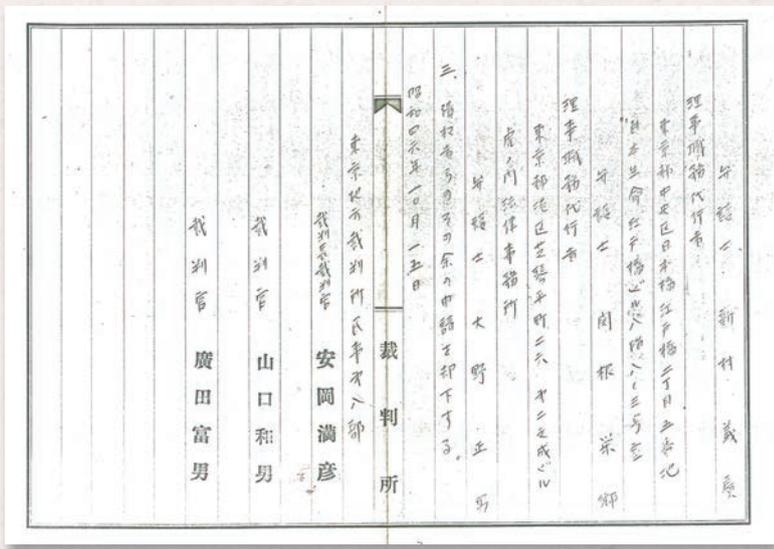
1971(昭和46)年6月25日、評議員の吉田秀雄教授をはじめとする計8人から出された「理事長ら4人の幹部の職務執行停止仮処分申請」について、同年10月15日、東京地方裁判所民事第八部(安岡満彦裁判長)は橋本理事長と秋山桂一(財務)、加藤幸(総務)、村越潔(渉外)の3常務理事に本訴が確定するまで職務執行停止の仮処分を決定。加えて、理事長の職務代行者として新村義廣^{にいむら}元名古屋高等裁判所長官、常務理事代行として関根栄郷^{ひでさと}、大野正男の合計3人の弁護士を任命しました。この前代未聞の出来事は、「倒産した会社に破産管財人が送り込まれたようなもの」(「毎日新聞」1971年10月16日付)などと大きく報道され、世間の耳目を集めました。

その後、代行理事は本学の正常化に忍耐強く取り組めます。彼らの基本姿勢は、外部者である自分たちの職務はあくまでも日常業務を正常に継続させることであり、大学の改革は当事者である教職員が取り組むべきであるというものでした。

本学は紛争校としては異例の速さで立ち直ります。雇用に多額を要したガードマンによる検問体制の撤廃を皮切りに、1972(昭和47)年5月に二つの教授会が和解、次いで6月には制度委員会が発足して財務・機構再建案が出され、10月、三浦元秀教授が理事長となる新理事会の発足を見ます。務めを果たし終えた3人の代行理事は退任し、再生の緒に就いた芝浦工大を後にしました。



職務執行停止仮処分決定書



職務執行停止仮処分決定書(続)

略年表

1969(昭和44)年12月~ 1970(昭和45)年 2月	新寄付行為による学長選挙、評議員選挙が行われ、新理事会(橋本理事長)発足
1971(昭和46)年 2月	学内ロックアウト、ガードマン配置による入試実施
1971(昭和46)年 4月	不正入学事件、大学経理に用途不明金発覚。教授会に停会命令、「正教授会」発足
1971(昭和46)年 6月	団交要求学生集会で学生、ガードマンと衝突。機動隊導入、学生多数逮捕。
1971(昭和46)年10月	東京地裁、3理事の職務執行停止の仮処分を決定。理事長・理事職務代行に3弁護士が任命される。ガードマン検問体制廃止
1972(昭和47)年 5月	二つの教授会和解
1972(昭和47)年 6月	制度委員会発足。財務・機構再建案が示される
1972(昭和47)年10月	新理事会(三浦理事長)発足

コラム
こきたかんじ
小木田 寛治

元職員、評議員、総務担当理事代行 (1963年 二部電気工学科卒業)

大学紛争の混乱を経て芝浦工大は民主化されましたが、一部理事の多額の用途不明金が発覚。批判学生を押さえるためのガードマン雇用により大金が浪費されていると東京地裁は判断し、3理事の職務執行を停止、職務代行者を任命しました。

短期間でしたが、3人の先生のご努力で本学は更生できました。新村理事長代行は通勤にハイヤーも使わず、寒い田町駅ホームにたたずむ毎日だったという弔辞を、後に最高裁判事をされた大野先生が新村先生のご葬儀で読まれました。その大野先生も鬼籍に入りました。財務担当の関根先生は後年、筑摩書房の管財人を務め、見事再建されました。

芝浦工大が今日あるのはこの方々のお陰。歴史が逆行してはならないと考えます。

学生寮

芝浦寮

芝浦キャンパスの近く、校舎から歩いて数分の距離にかつて芝浦工大の学生寮がありました。地方出身の学生やバスケットボール部などの運動部員が暮らしていた芝浦寮です。木造2階建ての寮は和室が19室、収容人数は53名。1部屋に2~6人が入って起居を共にしました。

人間関係を表現するのに「同じ釜の飯を食う」といった言葉がありますが、寮生は大学食堂や近くの店を利用して食事をしました。寮は、全国各地から集まった学生たちが先輩後輩の付き合い方を学び、同期生同士が親睦を深めていった人間形成、青春の交流の場でもありました。

1970年代、多くの大学の学生寮がそうであったように、芝浦寮もいわゆる大学紛争の影響を受け、寮自治会と大学との間で寮の管理運営をめぐる交渉が白熱した時期があります。政治的な活動の場ともなつて芝浦寮が警察の捜索を受けたこともありました。混乱はありましたが、交渉を進める中で学生と大学側担当者が信頼関係を結び、紳士的な話し合いの末に、1985(昭和60)年、学生が寮を明け渡して芝浦寮は廃止されました。

大宮学内寮

大宮キャンパスの中にも学生寮がありました。1966(昭和41)年4月に大宮キャンパスは開校しましたが、学内寮の開寮は寮生の受け入れ整備が遅れたため、約2か月後になりました。寮棟は南、北、中の3つあり、いずれもモルタル2階建て、廊下でつながっていました。1室に2段ベッドが2つ、4人部屋が基本でした。開寮当初の在寮期間は1年間。地方出身の新

入生が入学の早期に住まいを確保し、大学生活を安心して送れるように配慮されていたと思われます。

キャンパス最寄りの東大宮駅から未整備の道を長い距離歩いて通学に苦勞した学生とは異なり、寮生は至近の校舎と寮を行き来する日々、時間を気にすることなく勉学に励み、スポーツに熱中し、仲間と麻雀を楽しんだりして学生生活を謳歌しました。

他にも、大宮には学外第1・2・3寮や木造2階建て私宅の2階を賃借した教職員の寮もありました。また、野球部などの運動部の寮(合宿所)もキャンパス近辺に点在していました。野球部は横浜の大倉山、ハンドボール部は世田谷といった具合に、以前は別の場所にあった寮が大宮に移ってきたのです。

そして、当時、本学は首都圏のあちこちにアパートなどを借り上げ、それを寮と称して地方出身学生の住まい確保に便宜を供していました。すべての寮は判明していませんが、横浜の師岡寮(港北区師岡町)や曉雲寮(港北区太尾町)、東京の杉並寮(杉並区高円寺)などの記録が残っています。

大宮学内寮の建物については、1942(昭和17)年、戦時体制下の技術者不足を見込んで千葉に開設され、1951(昭和26)年に閉学した東京大学第二工学部の校舎であったという逸話があります。その建物がめぐりめぐって本学で学生寮として再生しました。その大宮学内寮も、芝浦寮同様、1985年に廃寮が決まり、解体されました。その他の寮も今はありません。

2013(平成25)年4月、大宮キャンパスに留学生と日本人学生との交流も図れる寮、RC造5階建ての「SITグローバルcommons」が開寮する運びになりました。国際交流推進にも配慮された場です。異なる環境で育まれた多様な個性が今再び本学で交わることになります。



芝浦寮玄関風景



開校当時の大宮キャンパス 手前の3棟が大宮学内寮



大宮学内寮



大宮学内寮

コラム

こぐれ こういち
小暮 剛一

前理事長（芝浦寮廃寮時の学生センター事務室課長）

学生寮での集団生活は何物にも代えがたい経験として記憶される。寮生であった者は諸々の出来事や人間関係が自らを育む上で貴重な、そして大きな役割を果たしている事を人生の折々に自覚させられるという。芝浦寮もそうした学生寮の一つだった。バスケットボール部など、部活動のための寮、また、働きながら学ぶ学生にとっては田町駅の至近距離にある職・住・学に恵まれた寮として。

しかし、残念ながら自治寮故か寮は荒廃し、70年代に入って廃寮の止むなきに至り、そのための交渉が紳士的に行われた。当時としては珍しく、多くの大学関係者から称賛されたものである。カギを私に手渡し、寮を明け渡した最後の寮長、大島義邦君は2011年8月、肺がんのため永眠した。享年49。ご冥福をお祈り申し上げます。

芝浦人の望郷の屋舎

湯の丸高原寮

長野県の浅間連峰の西に位置する湯の丸高原。春から秋にかけては百花繚乱、「花高原」として親しまれています。初夏、国の天然記念物であるレンゲツツジが一斉に開花すると、湯の丸山の山肌は鮮やかな朱に塗られます。また、冬の降雪期、上質のパウダースノーに恵まれるゲレンデは滑りやすく、多くのスキー客でにぎわいます。その標高1725.75mの地に、芝浦工大で初めての研修・保養施設として建てられたのが湯の丸高原寮でした。

1964(昭和39)年10月に落成。構造は1階ブロック造、2階木造の2階建。初めて利用者を迎え入れたのは同年12月でした。

湯の丸高原寮の建築設計は、学生のコンペで当選した案を基に、建築の若手教員が設計図作りを担当して完成させました。本学学生の心の拠り所となる建物を造ろうとしたことが教員たちの取り組みの根底にありました。

星霜45年、多くの学生・生徒、卒業生、教職員が利用して思い出を残し、芝浦人の望郷の念誘う寮となります。大学や併設校の正課・課外のさまざまな活動の場として利用されました。当初は暖房設備も不十分で、厳寒期の利用者は大変苦労しましたが、そのことを懐かしく思い起こす卒業生は少なくありません。1990年ごろ、寮の廃止が提案されましたが、学内で強い反対の声が上がり、存続することになるという一幕もありました。

その湯の丸高原寮も、施設の老朽化が進んだこと、利用対象者の嗜好の変化もあって利用する人の数が大きく減少したこと、そして、利用者の世話をしてきた柳沢勝興・加奈子^{かつおき}夫妻の定年退職が理由となって廃寮が決定。2009(平成21)年3月末に閉鎖され、

同年5月10日の閉寮式で幕を下ろしました。土地は国有地を借りたもの。廃寮後は建物を解体、撤去し、跡地に植林をして国有林野に返しました。

保田海岸寮から高杖セミナーハウスまで

1965(昭和40)年8月、海の寮として内房に開設されたのが保田海岸寮。波静かな内湾は砂浜から磯まで変化に富んで美しく、観光・保養地として古くから知られた所がありました。木造瓦葺の平屋建、和室4室、20名収容の建物は海水浴をはじめ、レクリエーションにも最適の施設でしたが、1999(平成11)年3月、利用者数減少などの理由から保田海岸寮は閉鎖。建物を解体し、土地を売却しました。

1995(平成7)年7月、神奈川の葉山マリーナの前に開設された研修・保養の施設が葉山セミナーハウスです。近年は本学学生を対象にした課外英会話講座の受講生が集中合宿する場としても活用されています。

また、1998(平成10)年4月、福島猪苗代町に猪苗代教育合宿センターが開設されました。中学高等学校の合宿教育施設としてコンピュータや英語の教育に成果を上げましたが、施設運用面の難点などから2008(平成20)年3月、同センターは閉鎖されました。

そして、1998(平成10)年11月、本学創立70周年を記念し、募金参加者協同の賜として福島県南会津郡舘岩村高杖原に開設されたのが会津高原高杖セミナーハウスです。RC造地上6階地下1階建ての、天然温泉もある120名収容の本格的施設で、本学に関わる人たちの交流の場として利用されています。



高杖セミナーハウス



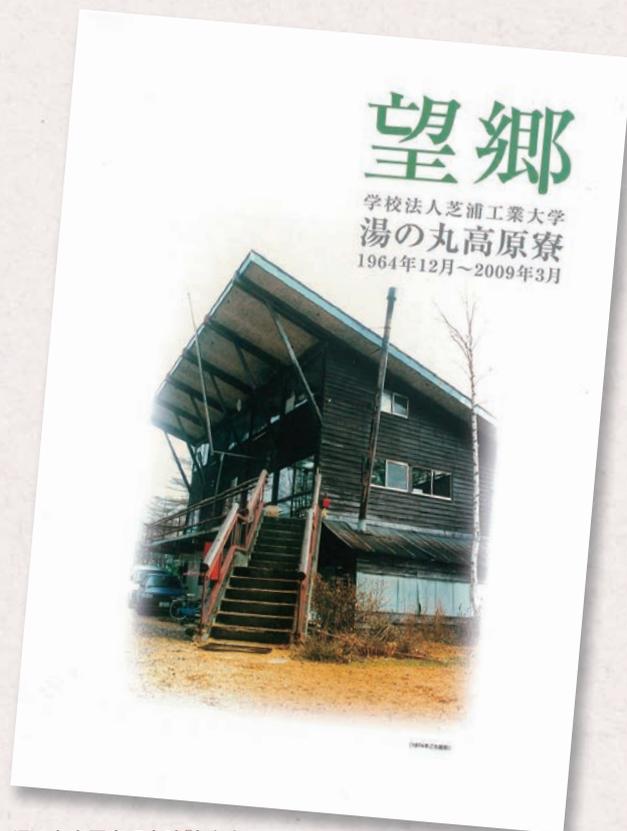
猪苗代教育合宿センター



保田海岸寮



葉山セミナーハウス



湯の丸高原寮記念誌「望郷」

望郷

学校法人芝浦工業大学
湯の丸高原寮
1964年12月～2009年3月

コラム

なかざわ しげお
中澤 重夫

名誉教授（土木工学科）（1955年土木工学科卒業）

30年近い歳月、学生と一緒に測量実習や卒業研究のために何度も湯の丸高原へ出掛けた。学生たちは大学の授業とは全く異なる世界を身をもって経験した。山野を相手に新しい測量技術の実測に取り組み、共同作業で地形のすべてを把握、解析し、数値や図面に表した。結果、この用途の豊かさを知った学生たちの喜びは計り知れない。これを使って何をやろうか、夢が大きくふくらんだ。

周辺は自然環境保護指定の官有地が多かった。なかなか入山を許されなかったが、大学の教育研究の一環という立場にも恵まれ、条件付きで官有地の入山許可がもたらえた。

早朝から夕闇ギリギリまで頑張り、真っ暗な道をたどって帰ってきた寮に管理人の柳沢さんご夫妻の「ご苦労さん」の声と笑顔があった。皆どれほど救われたことか。温かくおいしい夕食のありがたさは生涯忘れ得ぬものと思う。

豊洲キャンパス開校

キャンパス移転の胎動

昭和50年代、施設の老朽化とキャンパスの狭隘化に伴い、芝浦キャンパスの整備計画が大きな課題として浮かび上がりました。局面が動く契機となったのが、1987(昭和62)年7月に港区長から梅村魁理事長宛に送付された一通の文書です。「芝浦港南地域の街づくりについて」と題した文書は、港区が進めている芝浦港南地域整備計画への協力を要請するものでした。本学理事会は、積極的に協力する意思を表明し、芝浦校地を街づくりのために提供する代わりに至近距離にある都有地(現芝浦アイランドの一部)に新キャンパス用地を得ることを強く要望しました。本学は、キャンパス移転計画を広報誌「CI'88/NOV」(1988年11月発行)で公表し、翌年7月24日には港南計画担当理事名で「『港南計画』に関するご提案依頼の件」と題する文書を発し、教職員を対象に移転後の新事業アイデアを募集しました。約50件にも及ぶさまざまな提案が寄せられましたが、この港南計画は港区長の交代による計画の変更となり頓挫の運命をたどることになりました。

伝統の地から新天地へ

影を潜めていたキャンパス移転問題が再び動いたのは、1999(平成11)年のことです。同年11月22日付、石川洋美理事長名の文書で移転の第一候補地が決定したことが全教職員に周知され、さらに同年12月2日付、同理事長名で「キャンパス計画始動—21世紀の新しい芝浦工大づくりに向けて」と題した文書が全教職員宛に配付されました。候補地として挙げられたのは、東京臨海副都心の一画である豊洲埠頭南端でした。

しかし、この移転案には賛否両論あり、特に芝浦キャンパスに研究室を持つ工学部は、教授会で芝浦キャンパス建替案や他の候補地への代替案等を示し、複数回にわたり激しい議論が行われました。その後、移転先交渉は、候補地を豊洲埠頭南端から2転、3転しましたが、同じ豊洲3丁目地区である石川島播磨重工業株式会社(現IHI)造船所跡地に移して進められ、成約を見ることになりました。本学の理事会ならびに評議員会で豊洲キャンパスの土地取得が承認されたのは2003(平成15)年5月21日。同年、取得しました。

生まれた豊洲、生まれ変わった芝浦

豊洲校地を取得する一方で沸き起こったのが、芝浦校地跡地の扱いをめぐる問題でした。すべて売却するか、一部残すかの意見対立が議論を沸騰させることになったのです。豊洲校地取得後の2003(平成15)年6月に体制を刷新した新理事会は、芝浦校地の価値最大化を目指し、コンサルタント会社を入れ、プロポーザル方式で事業パートナーを募集、2005(平成17)8月に事業パートナーを決定し、同年10月に芝浦校地の約3分の1を残し、残りの土地を売却しました。

豊洲校地は旧芝浦校地の約4倍の30,000㎡となり、移転を機に豊洲キャンパスでは工学部11学科すべての3・4年生と大学院生が学ぶことになりました。再開発が進む東京湾臨海地区・豊洲の地に、2006(平成18)年4月、多くの人たちの熱い議論を経て、そしてさまざまな思いの詰まった豊洲キャンパスがこうして誕生しました。豊洲キャンパスの開校、芝浦キャンパスの再生は芝浦工業大学にとって百年に一度の大事業でした。



港南計画に関する諸提言



建設中の豊洲キャンパス



豊洲キャンパス建設記録

芝浦新キャンパス開校

伝統の地、芝浦キャンパスの存続

本学伝統の地として多くの学生、卒業生、教職員に愛されてきた芝浦キャンパスは、学生数の増加による狭隘化^{きょうあい}や校舎の老朽化に伴う耐震性などの問題が年を追うごとに深刻になり、その解決が焦眉の課題となっていました。度重なる検討、議論を経て、2003(平成15)年5月、江東区の豊洲に土地を取得し、新しいキャンパスを開校することが決定しました。豊洲校地の取得は芝浦校地の売却を前提にしていたが、その決定を見ないまま、同年6月に理事会は新しい体制に変わります。豊洲校地の取得と校舎建設には莫大な費用がかかるため、芝浦校地を全面売却することも考えられました。しかし、本学伝統の地である芝浦校地の全面売却には異論も根強く、新理事会の検討結果は、芝浦校地の一部について再整備をするという形に結着しました。

校地の活用をめぐる

芝浦校地の整備については、少しでも広く土地を残し、かつ少しでも高く売却するという相矛盾する課題を解決して、プロポーザル方式で整備事業のパートナーを募集することになりました。2005(平成17)年6月にその事業パートナーが決定(新日鐵都市開発・日本土地建物・戸田建設)。芝浦校地をA・B・C3つの街区(右ページ参照)に分けて、A街区の土地建物を本学が完全所有し、独自開発することが決まりました。

その活用方法については2005年10月末、理事会による「芝浦校地利活用にかかる説明会」が開かれ、教職員に対して芝浦校地活用事業への提案の募集も行われました。また、提案募集と並行して、事業計画の具体案策定に取り組む「まちづくり協議会^(注1)」と「事業

計画委員会^(注2)」が発足しました。しかし、事業計画具体化の取り組みは、建物面積の容積率や住民に対する環境問題といった難問が浮上して混迷し、新たな教育・研究体制構築という結実にはなかなか至りませんでした。

解体から再生へ

一方で、2006(平成18)年3月31日、旧校舎を解体して新しい校舎を建設するため、芝浦キャンパスは一旦閉鎖。当夜、これを聞きつけた多くの卒業生や教職員も集まって、懐かしい「芝浦校舎」との別れを惜しまました。7月、解体工事が始まり、風雪をしのいだ校舎は姿を消して一帯は更地と化します。2007年8月、A街区で新校舎の建設が着工。伝統のキャンパスの衣替えが始まりました。

校舎建設は進行しますが、芝浦校地の一部売却決定後3年間の理事会体制の中でも校地の活用方法は決定を見ないまま、2006年6月に新しい理事会が発足します。そして、同年8月、事業計画委員会が検討を進めてきた芝浦キャンパス整備計画案について、工学部・システム工学部合同臨時教授会で意見交換が行われました。それを受けて同じ月に開かれた臨時理事会で、芝浦キャンパス整備計画の基本的な考え方が「学部教育研究(大学院を含む)と社会人教育の場とし、併せて地域・社会貢献を推進する」と決定されます。

こうして2003年から棚上げされてきた芝浦校地の再整備は、学生が学ぶ教育研究施設の建設の方向に進められることになりました。その後、理事会サイド、教学サイドからさまざまな検討が加えられ、2009(平成21)年4月新設のデザイン工学部の学舎を中心とする新校舎が同年1月に竣工し、芝浦キャンパスが再生したのでした。

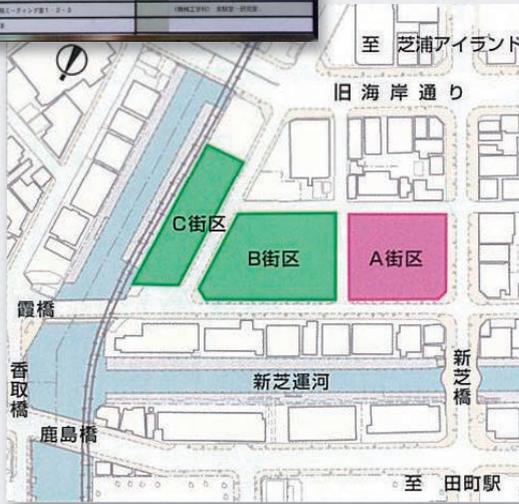
校舎案内図

別館2号館		校舎案内図	別館1号館	
4F	建築工学科 建築学 建築学		5F	電子工学部 電子工学部 工学部 工学部
3F	建築工学科 建築学 建築学		4F	電子工学部 電子工学部 工学部 工学部
2F	建築工学科 建築学 建築学		3F	電子工学部 電子工学部 工学部 工学部
1F	建築工学科 建築学 建築学		2F	電子工学部 電子工学部 工学部 工学部
東校舎		南東校舎		
5F	建築学	6F	電子工学部	
4F	建築工学科 建築学 建築学	5F	電子工学部 電子工学部 工学部 工学部	
3F	建築工学科 建築学 建築学	4F	電子工学部 電子工学部 工学部 工学部	
2F	建築工学科 建築学 建築学	3F	電子工学部 電子工学部 工学部 工学部	
1F	建築工学科 建築学 建築学	2F	電子工学部 電子工学部 工学部 工学部	
B1F	建築工学科 建築学 建築学	B1F	電子工学部 電子工学部 工学部 工学部	
北校舎		南西校舎		
5F	電子工学部	6F	電子工学部	
4F	電子工学部 電子工学部 工学部 工学部	5F	電子工学部 電子工学部 工学部 工学部	
3F	電子工学部 電子工学部 工学部 工学部	4F	電子工学部 電子工学部 工学部 工学部	
2F	電子工学部 電子工学部 工学部 工学部	3F	電子工学部 電子工学部 工学部 工学部	
1F	電子工学部 電子工学部 工学部 工学部	2F	電子工学部 電子工学部 工学部 工学部	
B1F	電子工学部 電子工学部 工学部 工学部	B1F	電子工学部 電子工学部 工学部 工学部	
本館(北)		本館(西)		
5F	工学部 工学部 工学部 工学部	4F	工学部 工学部 工学部 工学部	
4F	工学部 工学部 工学部 工学部	3F	工学部 工学部 工学部 工学部	
3F	工学部 工学部 工学部 工学部	2F	工学部 工学部 工学部 工学部	
2F	工学部 工学部 工学部 工学部	1F	工学部 工学部 工学部 工学部	
1F	工学部 工学部 工学部 工学部	B1F	工学部 工学部 工学部 工学部	



旧芝浦校舎階段

旧芝浦校舎構内案内板



「芝浦ルネサイト」図



芝浦新校舎1階にある有元史郎胸像(戸田建設(株)より寄贈)



芝浦校舎最後の日(2006年3月31日)

(注1)大前提としてA・B・C街区を一体の開発として捉え、「芝浦ルネサイト」と称し、大学・オフィス・ホテルによる地域再開発をする。そのために大学と事業パートナー3社が相互に協力しながら事業に取り組むための協議会

(注2)芝浦校地利用について事業計画を検討するための大学内の組織。常勤理事、学長室、両学部より教員1名、MOT、事務関連部長などにより構成

工業高校、付属一高、そして柏高校へ

東京高等工学校附属普通部から変遷

1930(昭和5)年、本学発祥の地、大森に東京高等工学校の併設校として東京高等工学校附属普通部が開設されました。学校は移り変わり、東京高等工学校附属工科学校、芝浦高等工学校附属工科学校、芝浦工業学校、芝浦中学校、芝浦高等学校、と校名変更も度重なって、1954(昭和29)年に芝浦工業大学工業高等学校(工業高校)となりました。その工業高校も時代の流れから1974(昭和49)年4月、工業科の生徒募集を停止して普通科を設置。翌1975年には校名を変更、普通科の高校、芝浦工業大学付属第一高等学校(付一高)が誕生しました。

かけ橋となった付属第一高校

当時、芝浦の狭い校地には大学、短大、高校の3つの学校がひしめき、折り重なるように存在していました。付一高の教室のすぐ隣が大学の教室や研究室といった校舎構造、グラウンドもない窮屈な生活空間、「朽ち果て行く博物館」と評されたこともある老朽化した建物の中で生徒たちは多感な高校生時代を過ごしました。

芝浦キャンパスの環境整備にも関連する付一高の処遇の問題だけではありません。もう一つの併設校、芝浦工大高校の池袋校地に対する国鉄(現JR)からの返還申し入れを受けて、その移転対策をどうするか、学校法人の抱える難問に立ち向かうために、1978(昭和53)年、付属高校総合計画本部が設置されました。

折しも、高校増設の必要から、私立高校の誘致に積極的な千葉県が補助金を交付するという朗報が届きます。しかし、補助金交付の対象は千葉県内の新設の学校に限られていました。理事会は、検討の結果、

移転ではなく、「新しい高校教育の創造という観点からの新設」ということで決断し、高校の新設を決定しました。

芝浦工業大学柏高等学校(柏高校)の開設に向けた取り組みが本格化します。1979年2月、千葉県知事から柏高校の設置計画の承認が下り、同年7月には開設準備事務局が設置されました。所長に就任したのは佐々木勘次郎付一高校長。生徒募集などの業務で奔走した所員の多くは付一高の教諭と兼務していました。翌年1980(昭和55)年4月、柏高校が開校しました。初代校長には佐々木先生が就任。初年度の専任教員14名のうち10名が元付一高教員でした。

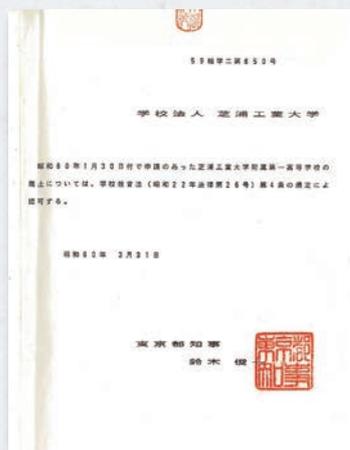
学校の灯消えるまで

段階的に縮小し、付一高が閉校したのは1985(昭和60)年3月。短かった付一高10年の歴史ですが、卒業生は1,880名を数えます。生徒会誌『躍雲』や付一高の教員によって刊行された研修誌『^{じつご}実語』に目を通すと、劣悪な教育環境の中、^{あらが}流れに抗うように生きた人たちの営みがうかがい知れます。

付一高ではユニークな授業が行われていました。「工学基礎」と「ロシア語」です。前者は、実習や実験を中心にした体験学習を通して工学の基礎を修得させるもの。工業大学の付属高校として「高大連携」の萌芽的な取り組みでした。後者は、英語に次ぐ第二外国語としてロシア語を採択したもので、他校にほとんど例を見ない外国語教育が行われていました。それらは、工業科から普通科に舵を切った学校で教育の実践をする者として、風前の灯となった職場で働く自分たちの存在意義を確かめ、独自性を発揮しようとした教員たちのささやかな試みであったようにも思われます。



工業高校教職員(1971年)



付属一高廃止認可



付属一高生徒会誌「躍雲」

芝浦工業大学工業高等学校歴代校長

松縄信太	1948(昭和23)年3月10日～
藤田三郎	1966(昭和41)年3月26日～
大北忠男	1969(昭和44)年4月1日～
東 博	1969(昭和44)年6月13日～
中村貴義	1971(昭和46)年10月1日～
鴨井光夫	1973(昭和48)年10月25日～ 1976(昭和51)年3月31日

芝浦工業大学付属第一高等学校歴代校長

佐々木勲次郎	1976(昭和51)年4月1日～
榊原秋策	1980(昭和55)年3月22日～ 1985(昭和60)年3月31日

中学高等学校

芝浦工業大学併設校としてのスタート

芝浦工業大学中学高等学校の創立は、1922(大正11)年に設立された東京鐵道中学にさかのぼりますが、芝浦工業大学の併設校としての歴史は、1953(昭和28)年に校名を「芝浦工業大学高等学校」に改名した時から始まります。その後、1982(昭和57)年に校舎移転と中高一貫教育の方針により中学校を開校し、現在の「芝浦工業大学中学高等学校」に至っています。

池袋校舎から板橋校舎へ

創立時の東京鐵道中学の校舎は麴町区永楽町(現在の千代田区丸の内)にありましたが、関東大震災による校舎焼失などを経て、1924(大正13)年に東京府北豊島郡西巢鴨字池袋(現在の池袋駅南口)に移転します。以後、58年間にわたり池袋の地で過ごすことになった同校は、“池校”の愛称で親しまれました。

池袋校舎は池袋駅から徒歩2分という通学には至便の立地条件でしたが、校地は旧国鉄からの借地という大きな制約がありました。校地払い下げの希望はかなわず、また池袋西口の再開発に伴う豊島区からの移転要請、さらに校舎の老朽化なども加わり、昭和40年代半ばから新たな校地探しが始まりました。移転が決まる頃の池袋校舎は繁華街の真ん中で、その立地は「お世辞にも学校にはふさわしいとは言えないものであった」と、当時の卒業生の回顧談に残されています。また、老朽化の進んだ池袋校舎の外観はほんとうにボロボロだったそうです。しかし、校舎内は手入れが行き届いており、生徒と教職員により朽ちた箇所は修繕され、また、いたるところがピカピカに見事に磨き上げられていたそうです。廊下を歩いて床板がきしむ音も、生徒と教職員の池袋校舎への愛情、そして

同校の人間教育のすばらしさが感じられたと、当時、池袋校舎を訪れた大学の教員が話しておりました。

校地探しは困難を極めました。15年に及ぶ紆余曲折を経て板橋区坂下への移転が決まり、現在の板橋校舎が開校したのは1982年のことです。新築された板橋校舎は、木造モルタル塗りの池袋校舎とは大きく異なり、ユニークな耐震設計の施された教室棟、全天候型のグラウンド、プール棟には空気膜構造と呼ばれる内部の空気圧を外部より高くして膨らませる屋根(東京ドームと同様の方式)を採用するなど、当時の最先端をいく建築技術がふんだんに導入され、工業大学の併設校にふさわしいハイテク校舎として注目を集めました。

中高大一貫教育による 人間形成を目指して

芝浦工業大学中学高等学校は創立から90年を迎えます。同校は生い立ちこそ芝浦工業大学と異なる歴史を持ちますが、学校法人芝浦学園への合併から既に60年に及ぶ歴史を刻み、併設校としての新たな役割が期待されています。同校で実施されている中学生を対象とし教科書の枠にとらわれない斬新な実験・自然観察を行うサイエンス・テクノロジーアワー、高校生対象の理系講座(大学教員が授業を行う)、および芝浦工業大学の講義を履修することができる先取り授業は、理系大学進学への動機付けを行う併設校ならではの試みと言って良いでしょう。

勉学のみならず、スポーツにも力を入れ、野球・水泳・弓道・ゴルフなどで数々の実績を残してきました。現在、中学・高校合わせて約1000人の生徒が、大学進学を目指し、また日本の将来を支える人間となるべく、板橋の校舎で日々勉学に励んでいます。



池袋校舎全景と運動場



池袋時代の校舎(1975年ごろ)



正面入口から見た池袋校舎



大学との連携授業の様子

芝浦工業大学中学高等学校歴代校長

中山民生	1922(大正11)年5月～1923(大正12)年3月
大江武男	1923(大正12)年4月～1924(大正13)年3月
影近清毅	1924(大正13)年4月～1925(大正14)年3月
和田 弘	1925(大正14)年4月～1931(昭和 6)年3月
広田直三郎	1931(昭和 6)年4月～1934(昭和 9)年3月
和田 弘	1934(昭和 9)年4月～1946(昭和21)年3月
山本頼雄	1946(昭和21)年4月～1969(昭和44)年3月
大北忠男(代行)	1969(昭和44)年4月～1969(昭和44)年6月
渋谷大輔	1969(昭和44)年6月～1974(昭和49)年6月
沖 種郎	1974(昭和49)年7月～1975(昭和50)年9月
伊尻政一	1975(昭和50)年9月～1992(平成 4)年3月
鈴木 涉	1992(平成 4)年4月～2004(平成16)年5月
江藤浩一(代行)	2004(平成16)年5月～2004(平成16)年6月
江藤浩一	2004(平成16)年6月～2009(平成21)年3月
西山 淳	2009(平成21)年4月～2012(平成24)年3月

柏中学高等学校

建学の精神に基づいた学校づくり

1980(昭和55)年に創立された芝浦工業大学柏高等学校は、中堅の男子校としてスタートを切りました。折しも団塊ジュニアが高校進学期を迎え、周囲の高校では特進クラスやコースなどを設置して大学進学率や偏差値の向上を意識した改革が進められた時期でした。多くの高校が大学受験の“予備校化”の傾斜を強める中、「おらかな進学校」というスローガンを打ち出したのが柏高校でした。このスローガンは、建学の精神「創造性の開発と個性の発揮」に基づいたもので、それを具現化した授業が、当時目新しかった「総合学習」です。総合学習では、自分史の作成や落語、陶芸などの多岐にわたる授業を展開し、多様な個性を引き出す教育が行われました。これらの広角的で自由度の高い教育は、卒業後の進路の選択肢を広げ、他大学や文系への進学実績を年々高めていくことにつながりました。

男子校から共学校に

進学実績の向上とともに、学外から大いに高まったのが男女共学への期待でした。これを受けて1990(平成2)年4月、満を持して共学化に踏み切るようになります。当時、新設校でもない、理工系大学併設高校の共学化は異例のことだったと言って良いでしょう。これが成し遂げられたのも、建学の精神を貫いた結果でした。共学化に伴い地域での人気と評価は揺るぎないものとなり、千葉県内でも有数の進学校としての今日を築き上げるに至ります。

さらに、共学化のうねりは校歌の制定にも、連なります。柏高校校歌は、共学化の1年前1989(平成元)年に制定されました。それまで柏高校に校歌はなく、

入学式や卒業式では芝浦工業大学学園歌が歌われていました。校歌の作詞に当たっては柏高校の在校生や卒業生を対象にアンケートを実施して、同校のイメージを探りました。寄せられたイメージはシンガーソングライターの小椋桂氏によって紡がれ、芝浦工業大学柏高等学校校歌「毎日が喜び」として誕生しました。「毎日が喜び」の歌詞には、自由と個性、夢へと向かう同校の生徒が描かれています。

併設中学校の新設

共学の実績は、併設中学校の開設という新たなステージを生み出します。共学化から9年後の1999(平成11)年4月のことで、これにより、現在の芝浦工業大学柏中学高等学校となりました。高校創立以来の教育方針は併設中学校においても踏襲され、多様な学習体験を通じた個々の能力向上が図られています。この中高一貫による教育は確実に成果を上げており、文部科学省から先進的な科学技術系人材の育成プログラムであるスーパーサイエンスハイスクール研究開発校の指定を受けたのをはじめ、Web教材開発コンテストであるThink Quest@Japanにおいて最優秀賞、プラチナ賞、金賞を受賞するなど、外部からの評価もますます高まっています。

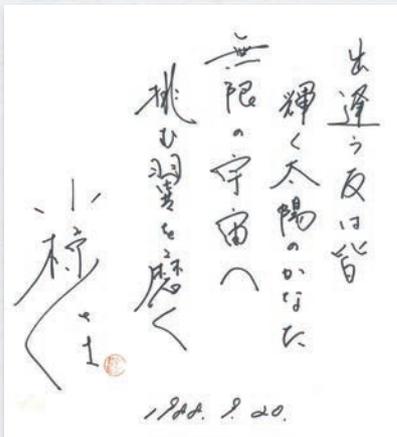
柏中学高校は創立から30年を経て、卒業生はプロ野球選手やオリンピック選手など多岐にわたる分野で活躍しています。これからも建学の精神を礎に、柏中学高校は発展を続け、校歌「毎日が喜び」の一節にある“新しい道を拓くものたち”を多く輩出していくことでしょう。



柏高校(1988年)



1991(平成3)年の学校案内



小椋桂氏のサイン色紙



「総合学習」で作成した自分史



Think Quest@JAPAN2007において文部科学大臣賞を受賞した作品

芝浦工業大学柏中学高等学校の歴代校長

佐々木 勸次郎	1980(昭和55)年4月～1986(昭和61)年3月
森 良多	1986(昭和61)年4月～1991(平成3)年3月
大山 徳高	1991(平成3)年4月～1997(平成9)年3月
中平 浩司	1997(平成9)年4月～2002(平成14)年3月
佐藤 正行	2002(平成14)年4月～2008(平成20)年3月
菅沢 茂	2008(平成20)年4月～

システム工学部の開設

難産の末に日本初のカタカナ学部誕生

1991(平成3)年、大宮キャンパスにシステム工学部が開設されるまでの道のりは平たんではありませんでした。1981(昭和56)年から工学部教授会と理事会が新学部開設の検討に着手、1985年には建築系新学部構想の検討も始まっています。1986年、本学は静岡県裾野市から大学誘致の要請を受け、新学部構想が現実味を帯びましたが、県知事改選によりこの誘致計画が中止になるという出来事もありました。

従来の解析主導型工学とは異なる統合主導型工学の教育・研究を目指す新学部設置の検討が始まったのは1986年。埼玉県行田市から提出された誘致要望書を受けて、1987(昭和62)年7月、本学は行田市に対して新学部「システム工学部」の設置を公式に表明しました。同年11月、新学部開設準備室が設置され、新しい学部の立ち上げに踏み出しました。しかし、大学設置予定地の土地取得が難航し、1989(平成元)年3月、理事会は行田での新学部開設を断念します。

この事態を受け、行田に替わって大宮キャンパスに新学部を設置する案が急浮上。同年4月、評議員会は新学部を1991年4月に大宮に開設することを可決しました。文部省との折衝の末、1989年7月31日にシステム工学部設置認可申請書の提出を果たし、翌年の1990(平成2)年12月、設置認可が下ります。1991年2月にはシステム工学部棟(現在の5号館)が竣工し、同年4月、電子情報システム学科、機械制御システム学科、環境システム学科の3学科から成る日本初の「システム工学部」が誕生しました。日本の大学の学部名称にカタカナが使われたのは、本学のシステム工学部が初めて、カタカナ学部の嚆矢として注目されました。

特色ある教育

システム工学部の教育では異領域についての理解と知識、そして学際的思考が重視されます。そのために、個々の科学技術や学問を総合的に関連づけ、具体的なテーマを取り上げて課題の設定、問題解決、技術集約などに取り組み、システム思考の大切さを修得する総合科目が設けられました。

その一つ、動詞を科目名にした「創る」は、1年次前期に開講され、学生が自ら学ぶことの大切さ、楽しさを動機づけるためにワークショップ形式により行われています。学生たちは取り組みを通して知的好奇心や遊び心を育み、システム原理を学び、表現発表技術を習得します。学生と教授陣のコミュニケーション、学生の学科を越えた仲間意識づくりなどにも配慮された科目です。

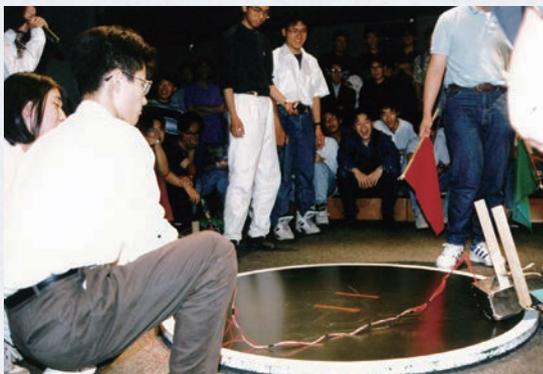
拡充、発展の途へ

1994(平成6)年12月、翌春のシステム工学部1期生の卒業を記念して「ニュートンの林檎の木植樹祭」が開催され、ニュートンが万有引力を発見したとされる林檎の木を5号館のそばに植樹しました。学部の科目「創る」の授業の中で3期生が接木して育てたものです。記念碑の題字は小口泰平初代学部長が揮毫。記念写真は学部の前途を祝う笑顔であふれています。

その後、システム工学部は2008(平成20)年に生命科学科、2009年に数理科学科を増設して同年から学部の名称を「システム理工学部」に変更しました。2011年4月には大学院に「システム理工学専攻」を開設し、学部のシステム工学教育を大学院まで拡張しました。1994年度の学部完成時に913名であった学生総数は、2012年度に数理科学科が4学年の学生がそろって完成すると2,000名を超える見込みです。



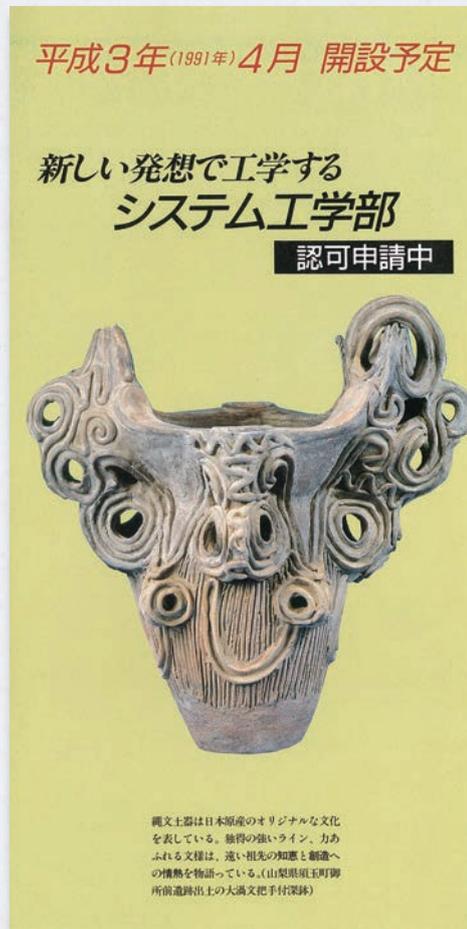
システム工学部ニュートンの林檎の木植樹祭(1994年12月17日)



システム工学部「創る」発表会(1993年6月26日)



行田キャンパス計画案



システム工学部開設案内

デザイン工学部の誕生

工科系総合大学として拡充

工科系単科大学として1949(昭和24)年に機械工学科と土木工学科の2学科でスタートした芝浦工業大学ですが、工学部の学科を順次増設したり、短期大学や工学部二部を設置したりして、社会の多様な要請に応じてきました。1991(平成3)年に開設されたシステム工学部(現システム理工学部)は、これまでの工学教育に新たな視点を持ち込み、本学が工科系単科大学から工科系総合大学へと歩みを進める第一歩となりました。

システム工学部設置のころから学部・学科の再編が検討されてきましたが、2006(平成18)年度教学部門研修会^(注)における討議を機に、学長室を中心に各学部などで学部・学科再編が本格的に検討されるようになりました。この動きと重なるように、2005年に一部校地を残すことが決まった芝浦キャンパスの利活用についても検討が進められてきました。理事会のもとに設置された芝浦キャンパス事業計画委員会での検討や、学長室および各学部から提案のあった事業計画案をもとに2006年8月、芝浦校舎を学部教育研究(大学院を含む)の場とすることが決定されました。

デザイン系の新学部設置

芝浦キャンパスの立地、社会情勢などを勘案して候補に挙がってきたのはデザイン系や情報系の学部でした。他方、2005年頃より日本金型工業会などと連携し、ものづくりの基幹産業である金型技術の教育についても検討が加えられてきました。既存学部・学科との競合、すみ分けなど課題の多い中、導き出されたのは分野横断型の新学部の設置でした。意匠力、

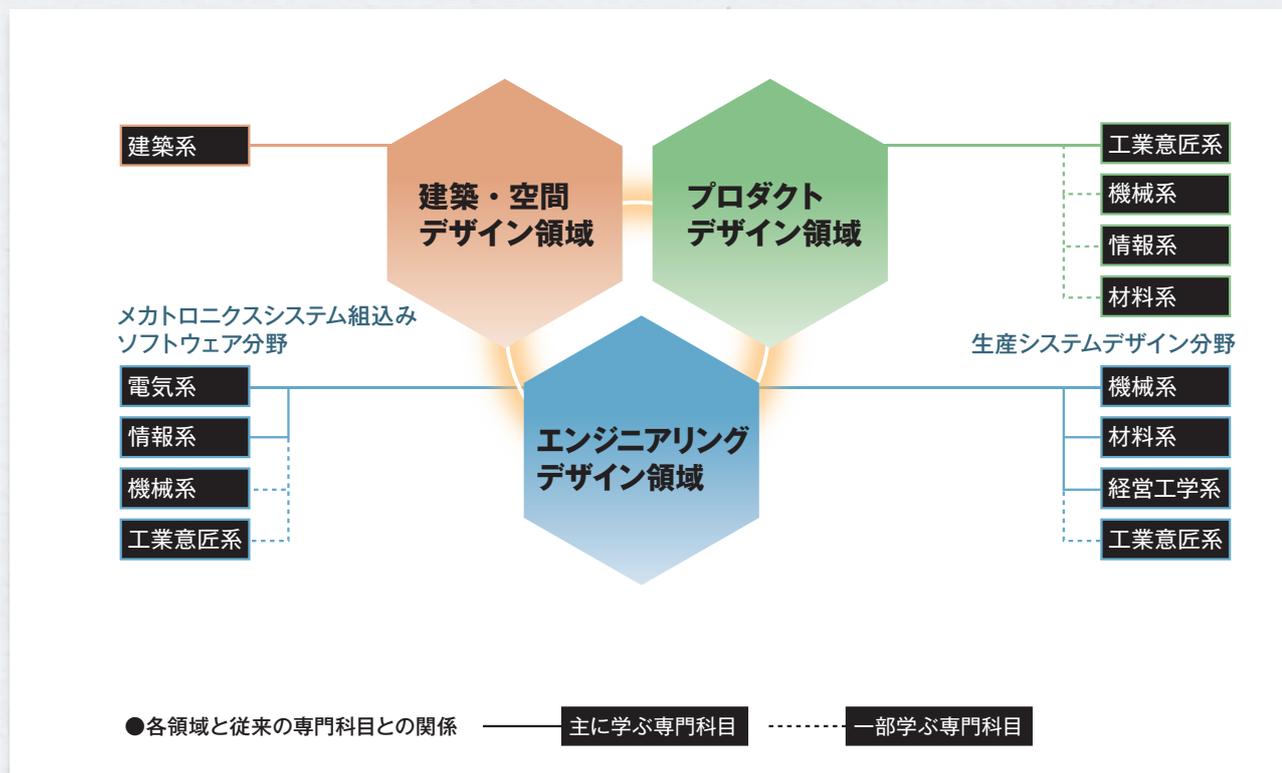
構想力、計画力、設計力といったデザイン能力に富み、人の心に響く魅力あふれたものづくりを志す人材を養成するデザイン工学部の登場です。

「建築・空間デザイン領域」、「プロダクトデザイン領域」、そして、メカトロニクスシステム・組込みソフトウェア分野と生産システムデザイン分野から構成される「エンジニアリングデザイン領域」の3領域4分野の一体的な教育を行います。3領域共通の科目を置き、広範囲の知識を横断して学ぶことができるようカリキュラムが組まれており、感性を重視したデザインを追究する演習や実習、地域や企業とも密接に連携した体験学習などが特長となっています。

伝統の地に新しい息吹

2009(平成21)年4月、芝浦新キャンパス開校と同時にデザイン工学部デザイン工学科はスタートし、第1期生を迎え入れました。学生は1・2年が大宮キャンパス、3・4年が芝浦キャンパスで学ぶことになっていますが、2010(平成22)年度入学の第2期生までは4年間通して芝浦キャンパスで学びます。開拓者である第1期生はキャンパスライフの充実を目指して2009年5月、S★E★C(Shibaura Enjoyable Community)を設立。イベントの企画やサークルの活動がメインですが、毎年12月には校舎周辺を色とりどりのイルミネーションで飾る「シバウライルミ」を企画するなど、地域との交流にも積極的に取り組んでいます。上級生の指導に代わる教職員の支援も受けながら、学生たちは学年の進行につれて正課、課外ともに取り組みの質を向上させてきています。完成年度に向けて、教育・研究の取り組みが順調に進んでいます。

(注)毎年夏に行われ、学長、各研究科長、各学部長をはじめとする教学部門の研修会



デザイン工学部3領域4分野



デザイン工学部演習風景

大学院

専門性を育む修士課程

1963(昭和38)年4月、本学は大学院工学研究科修士課程を開設。電気工学、金属工学、工業化学の3専攻で歩みを始めました。広い視野に基づく精深な学識、専門分野における研究能力、高い専門性を要する職業などに必要な能力を養うことが目的です。1976(昭和51)年には機械工学、建設工学専攻を増設。教育・研究内容の実態に即して専攻名の変更も行われました。1996(平成8)年には金属工学専攻が材料工学専攻に、2001(平成13)年には工業化学専攻が応用化学専攻に、2004(平成16)年には電気工学専攻が電気電子情報工学専攻にそれぞれ改称しました。さらに、2011(平成23)年には、学部・学科の増設に伴って工学研究科から理工学研究科に名称を改め、システム理工学専攻の開設を行って、私立理工系大学の雄として高度な専門技術者の育成に努めています。

修士課程設置以来、各学部からの進学は順調に伸びています。大学院生は専門知識と研究開発能力を修得、柔軟な思考による課題発掘や問題解決を自ら探り、教授陣と共に研究テーマに真剣に取り組んでいます。

精深な学術を拓く博士(後期)課程

工学研究科博士(後期)課程は、1995(平成7)年4月に地域環境システム専攻、機能制御システム専攻を開設しました。高度な科学技術の発展と国際化の中で、文化や価値観に関わる課題を学際的に統合し、新たな原理を導く目的指向の学術が期待されています。

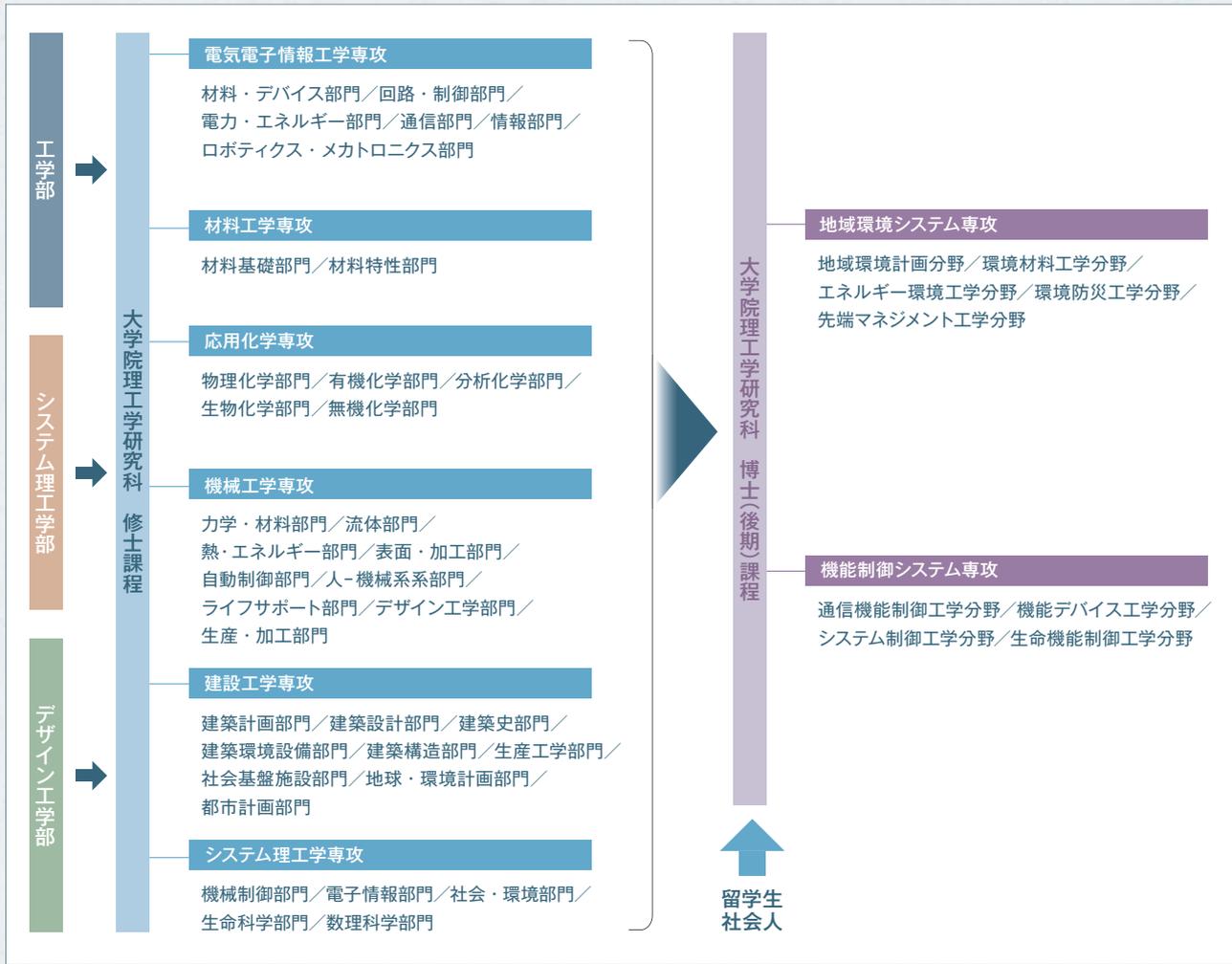
博士(後期)課程の設置は修士課程とは異なり難産

でした。教授会はその是非と認可の見通しについて激しい議論を約20年の長きにわたって展開しました。1997(平成9)年の本学創立70周年を目前にして、この機を逃すべきではないとされ、理事会に博士課程設立準備委員会を設置。少数精鋭の2専攻、環境・地域・機能・制御・システム思考・学際をキーワードとして精深な学術を拓く設置理念を策定し、不転の決意で設立申請が行われました。今日、博士(後期)課程には学内進学者もさることながら、先進的な指導教員のもとに海外からの留学生や社会人の入学者も多く、本学の博士(後期)課程に対する評価の表れとなっています。

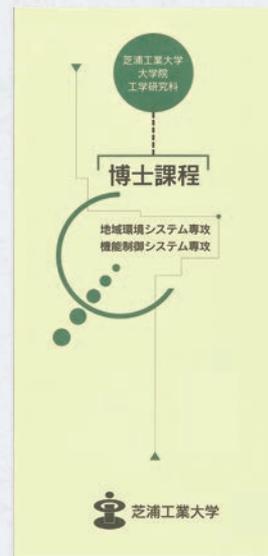
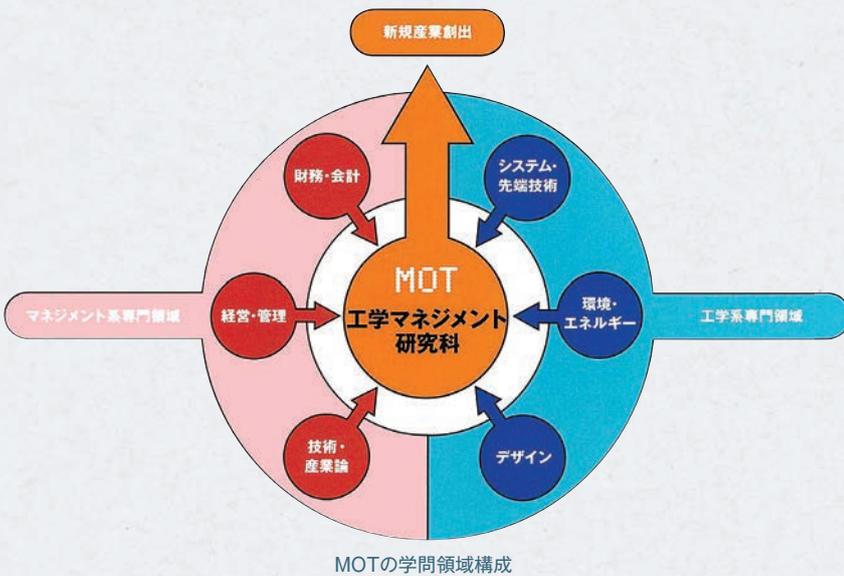
修士課程と同様、指導に当たっては、主担当および副担当の複数教員による体制を採っており、客観性・厳格性を確保するために学位審査基準を定めています。また、学位論文審査では、当該論文の分野に詳しい他の研究機関・大学に所属する学外審査委員を加えることを義務づけ、学位授与の最終試験は公聴会形式にすることにより客観性の向上に努めています。

工学と経営を融合するMOT

専門職大学院の工学マネジメント研究科(MOT)は、2003(平成15)年4月に工学と経営学を融合させたMOT(Management of Technology: 技術経営)として開設しました。「経営のわかる技術幹部」「技術のわかる経営幹部」の育成を旨としています。専門領域は工学系専門領域とマネジメント系専門領域から成り、「実理融合」を掲げて、新たな「知と技と心」の創造、産業の再構築、新規産業創出のための起業家育成にもつながる教育が行われています。



理工学研究科各専攻の内容



校友会

校友会の成り立ち

今日の「芝浦工業大学校友会」の歴史は、本学の前身である東京高等工商学校が大森に開校した翌年の1928(昭和3)年11月4日、「東京高等工商学校校友会」が発足したことに始まります。後に定められた本学の創立記念日は、この日にちなむと伝えられています。

当初の校友会は、卒業生だけでなく、広く在学生、現旧教職員、維持員、評議員を会員とし、「会員相互の親睦を厚くし会員と東京高等工商学校との関係を密にし併せて、学芸、事業、運動、その他の方法によりて会員の心身を練磨し、あまねく一般校友の品性および趣味の向上発達を図る」(校友会規則第1章総則第2条)ことを目的としました。後年、在学生の体育・文化活動の運営団体である学友会が設立されたことにより、校友会は卒業生対象の同窓会組織として位置づけられるようになりました。

初代会長には校長の瀧本誠一が就任。その後、第3代・有元史郎まで校長が会長職に就きましたが、第4代・古橋賢良会長以降は卒業生が会長職を承継して今日に至ります。

会運営の改革

第7代・横山修二会長の時、今日につながる校友会の改革が行われました。母校に関する情報を卒業生向けに発信する団体だった校友会は、改革により、会則にうたう目的を達成するための事業団体の性格を強めていきます。盛時には総会に2,000名を超える卒業生が集まったのもこの時期のことです。また、校友会は慢性的な資金不足に悩まされてきましたが、横山会長はこれを打開して安定収入を確保するため、

理事会および大学と協議を重ね、1993(平成5)年度入学生から、校友会費の徴収を大学が行う「代理徴収制度」が開始されました。以降、卒業生は全員、大学卒業と同時に校友会に入会し、卒業年度の学費と一括して終身会費を全納する形が取られています。

活動の充実

2001(平成13)年6月3日に施行された校友会会則は、会の目的を「卒業生を中核とする(略)会員相互の交流と親睦を深め、会員の地域及び職域等における社会活動の増進に寄与すると共に、母校の教職員及び学生との交流と親睦を深め、母校の発展に寄与する」と規定しています(校友会会則第1章総則第3条)。

2011(平成23)年現在、校友会は、地域支部45(うち海外2)、職域支部23、同好支部9の合計77支部を擁します。2009(平成21)年に完成した新芝浦キャンパスには校友会事務局が設置され、卒業生の親交の場である「校友倶楽部」も設けられて、組織としての充実度を高めてきました。

2010(平成22)年6月、第11代・五十嵐久也会長が校友会会長として初めて学校法人芝浦工業大学の理事長に就任し、翌2011年5月には大学の総務部に校友課が新設されました。在学生の父母等によって組織される後援会などとも連携し、大学と校友会の結びつきを深める役割を担う部署です。校友会とその関連組織の協同した取り組みを通して、母校愛の涵養、帰属心の醸成が期待されています。

東京高等工商学校校友会規則

校友会規則

第一章 總則

- 第一條 本會ハ東京高等工商学校校友会ト稱ス
- 第二條 本會ハ會員相互ノ親睦ヲ厚クシ會員ト東京高等工商学校トノ關係ヲ密ニシ併セテ、學藝、事業、運動、其他ノ方法ニ依リテ會員ノ心身ヲ磨磨シ汎ク一般校友ノ品性及趣味ノ向上ヲ謀ルヲ以テ目的トス
- 第三條 本會ノ事務所ハ之ヲ東京高等工商学校々内ニ置ク

- 第十四條 本會ハ左ノ會員ヲ以テ組織ス
 - 一、東京高等工商学校卒業生
 - 二、同校在學生
 - 三、同校現職教職員
 - 四、同維持員 評議員
- 第十五條 會員ハ本校規則ニ定ムル所ノ會費ヲ納ムル事ヲ要ス
- 第十六條 會員ニシテ本會ノ体面ヲ汚ス行爲アリタル者ハ理事會ノ決議ニ於テ之ヲ除名スル事ヲ得
- 第十七條 地方在任ノ本會々員多キ場所ニハ別ニ地方校友會ヲ組織スル事ヲ得

第二章 會員

- 第十八條 理事會ハ大會及理事會ノ二種トス
 - 一、大會 本會ハ毎年四月ノ間半事務會計ノ報告ヲ爲シ及必要ノ事項ヲ議定ス
 - 二、理事會 臨時大會ハ理事會ニ於テ必要ト認メタルキニ二週間以内ニ之ヲ開ク
- 第十九條 大會召集ノ通知ハ郵便其他ノ方法並ニ校内掲示場ニ掲示スルヲ以テ之ヲナス
- 第二十條 理事會ハ理事一八名以上ニ於テ必要ト認メタルキニ之ヲ開ク
- 第二十一條 理事會ハ理事一八名以上出席シ出席者ノ三分ノ一以上ノ同意ヲ得ニテ之ヲ決議スル事ヲ得
- 第二十二條 大會及理事會ノ議長ハ會長之ニ任ス會長事故アル時ハ副會長之ヲ代理ス

第三章 會議

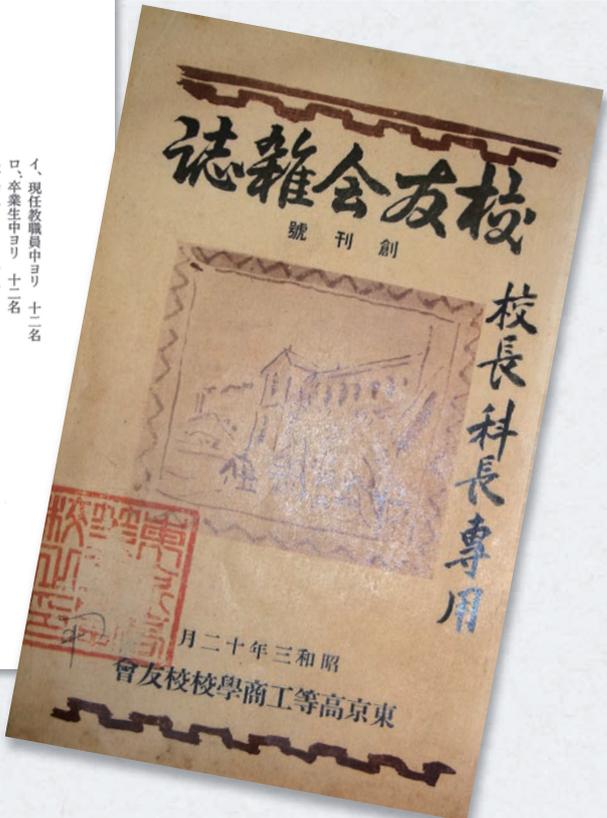
- 第二十三條 本會ニ會長副會長各一名、理事二十六名、幹事若干名ヲ置ク
- 第二十四條 理事會ハ理事一八名以上出席シ出席者ノ三分ノ一以上ノ同意ヲ得ニテ之ヲ決議スル事ヲ得
- 第二十五條 本會ニ屬スル學藝部、事業部、運動部ノ規則ハ別ニ之ヲ定ム
- 第二十六條 本規則ハ昭和二年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

第四章 役員

- 第二十七條 本會ハ理事會ハ理事一八名以上出席シ出席者ノ三分ノ一以上ノ同意ヲ得ニテ之ヲ決議スル事ヲ得
- 第二十八條 本會ニ會長副會長各一名、理事二十六名、幹事若干名ヲ置ク
- 第二十九條 理事會ハ理事一八名以上出席シ出席者ノ三分ノ一以上ノ同意ヲ得ニテ之ヲ決議スル事ヲ得
- 第三十條 本規則ハ昭和二年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

第五章 會計

- 第三十一條 正會員ハ入會ノトキ基金トシテ金壹圓、維持費トシテ在學生ハ毎月八月ヲ除ク金五十錢、卒業生ハ毎年二月以上ヲ離出ス可シ校外者ハ基金歸便其他適當ノ方法ニ依リ、但一時二十五圓以上若クハ繼續二年十圓以上離出シタルトキハ、爾後前項ノ維持費出ツ要セズ
- 第三十二條 本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ヨリ始マリ翌年三月三十一日終ルモノトス
- 第三十三條 本會ハ其基本金及維持費トシテ會員其他ノ寄附ヲ受ク
- 第三十四條 維持費ニ對シテシタルトキハ理事會ノ決議ヲ經テ之ヲ基本金ニ編入スルコトヲ得
- 第三十五條 本會ニ屬スル學藝部、事業部、運動部ノ規則ハ別ニ之ヲ定ム
- 第三十六條 本規則ハ昭和二年一月一日ヨリ之ヲ施行ス



『校友会雜誌』創刊号(1928年12月発行)

校友会歴代会長

初代	瀧本 誠一	1927(昭和 2)年12月~1929(昭和 4)年12月
2代	名井 九介	1929(昭和 4)年12月~1937(昭和12)年12月
3代	有元 史郎	1937(昭和12)年12月~1959(昭和34)年11月
4代	古橋 賢良	1959(昭和34)年11月~1973(昭和48)年 5月
5代	新甫 八郎	1973(昭和48)年 5月~1978(昭和53)年 8月
6代	馬場 弘長	1978(昭和53)年 8月~1985(昭和60)年12月
7代	横山 修二	1985(昭和60)年12月~1999(平成11)年 9月

8代	野崎 充	1999(平成11)年 9月~2001(平成13)年 4月
9代	馬場 洋治	2001(平成13)年 4月~2002(平成14)年 6月
10代	佐藤 和夫	2002(平成14)年 6月~2002(平成14)年11月
代行	金井 昭三	2002(平成14)年11月~2003(平成15)年 9月
11代	五十嵐久也	2003(平成15)年 9月~2010(平成22)年 6月
12代	鈴見 健夫	2010(平成22)年 6月~現在

※1938年 有元史郎没後、1959年までの記録が失く、校友会では現在、古橋賢良氏を第4代会長と定めている。

後援会

後援会の発足

大学にもPTA活動があるのか、と意外に思う人もいるかもしれませんが、大学を取り巻くステークホルダーの中で重要な存在であるのが学生の父母です。学生を教育していく大学にとって、学費の支弁者である父母に説明責任を果たすことは当然の責務と言えます。

大学の父母に対するサービスと父母自らの活動が、早くから始まり充実しているのが本学です。後援会(大学学部生・大学院生の父母の会)は、1992(平成4)年に産声を上げました。この年1月18日に設立準備会および設立総会が開催され、会則の審議・決定ならびに会長・役員を選出が行われ、同年6月27日には第1回定期総会が開催されました。

後援会は「学生生活の向上、教育の充実、研究の発展への支援、ならびに会員相互の親睦と情報交換」を目的としています。とりわけ奨学金事業では、語学研修希望者や地方出身学生への支援を行うなど、後援会発足当時から特色ある取り組みが注目を浴びてきました。

先行した父母懇談会

後援会の発足からさかのぼること9年、1983(昭和58)年に大学による父母へのサービスが一足先にスタートしました。第1回父母懇談会が、この年7月30日に静岡県で191名、8月6日に広島地区(広島・岡山・山口県)で119名の父母を集めて開催されました。当初は会場数も少なく、対象地域や学科を絞って平日に開催し、約4年かけて開催地が全国を巡る形をとりました。4年というのは、学生の在学中に最低1回は父母に面談の機会を提供するという配慮か

らでした。その後、後援会の発足に伴い、父母懇談会の開催数を増やしてほしいとの声が高まり、また後援会からの援助により、父母懇談会の開催は一気に拡大されました。

父母懇談会は、大学の動向や経営状況、就職状況を伝えるにとどまらず、普段、学生が授業を受けている学科の教員と父母が直接面談をして学修状況に対する理解を深めることが最大の目的です。他大学では事務職員が全国各地を回るといった形式が多い中、本学では全学科の教員が各地の会場に必ず出向くところに特徴があります。

現在は全国15会場で開催し、参加者も毎年2,000名近くになります。相談内容も留学や語学研修、大学院進学や大学院生の研究活動など多岐にわたるようになりました。情報公開ならびに父母同士の交流、開催地域の卒業生(校友会員)に参加してもらうことで各地方の就職状況などに対する情報交換を促進することにも取り組んでいます。

後援会創立20周年を越えて

2011(平成23)年、後援会は創立20周年を迎えました。大学の規模拡大とともに後援会の活動も幅を広げています。学園祭やクラブ・サークル活動の支援、キャリア教育や生涯学習・国際交流の推進に対する支援、メンタルヘルス相談サポートなど、その支援は多岐に及んでいます。また、本部の他に6つの地方支部(北海道、東北、東海、中国、四国、九州・沖縄)も組織し、年1回、本部・支部役員合同の合宿勉強会を開くなど、後援会活動の充実に努めており、卒業生組織である校友会と連携しながら大学の充実・発展のための支援活動を進めています。

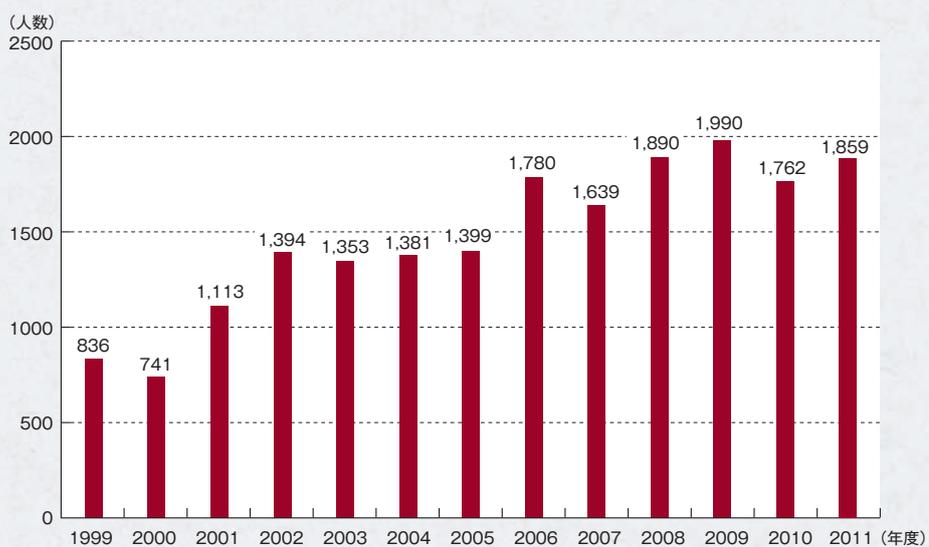
芝浦工業大学後援会



第1回後援会定期総会

後援会歴代会長

年度	氏名
1992~1995	川野 富夫
1996~1997	佐々木 隆一
1998~2000	武者 完四郎
2001	大杉 誠
2002	増田 好男
2003~2005	植月 輝道
2006~2007	中村 恵太郎
2008	今井 祥一
2009~2010	川合 功
2011	島崎 進



父母懇談会参加者数推移



父母懇談会全体説明会風景



父母懇談会学科別面談風景

事務処理の電算化と職員意識の変革

事務電算化の経緯

1970年代後半、激しかった学園紛争も収束を控え、学内に落ち着きが広がるとともに、大学の再建に向けたさまざまな取り組みが開始されました。事務処理面における取り組みの目玉となったのが、電子計算機による事務電算化の推進です。1977(昭和52)年7月、全職員が外部の事務処理プログラム講習会へ参加し、10月には、職員の意見を幅広く吸い上げる窓口として「事務改善委員会」が組織されました。

電算化推進の先陣を切って発足したのが「入試プロジェクト」。1978(昭和53)年7月のことです。1979(昭和54)年4月、プロジェクトは理事会に学生を鍵とした「学籍情報システム」を提案し承認を得、これに伴い同年7月、入試プロジェクトは「学内電算処理プロジェクト」へと改称、「学籍情報システム」構築に向けた本格的な動きが始まりました。

プロジェクトの手始めは各部署における日常業務の聞き取り調査でしたが、必ずしも順調に進捗しませんでした。電算化に消極的な職員が少なくなかったからです。しかし、「自学処理を目指してやり遂げよう」という意識が徐々に広がるにつれて作業は軌道に乗り、およそ4年を経た1981(昭和56)年、「学籍情報システム」はついに日の目を見ることになりました。完成したのは、当時としては画期的な漢字を使用したデータベースシステムで、他大学から数多くの見学者が訪れるなど、大いに注目を集めたものです。自力でやり遂げた達成感と、学園紛争による約10年の遅れを幾分か取り戻せたという安堵感でした。

職員意識の変革

一連の電算化自学処理の取り組みは、事務処理を合理化しただけでなく、職員の意識変革という大きな果実をもたらしました。学園紛争前の事務職員は、縁故者が多く、家族的でしたが、それゆえに事務処理の改善や組織の活性化などの動きに対しては警戒心をもって構える保守的傾向が否めませんでした。特に、学園紛争の契機となった立看板の撤去以降続いた「事務と教育の分離」(教育に関することに職員は関与しない)の原則は、職員の意識をいっそう現状維持へと硬化させたといつて良いでしょう。

転機となったのは、学園紛争後の事務改革でした。とはいえ、職員の意識変革が一朝一夕になったわけではありません。事務処理プログラム講習会に参加した当初は、業務命令の下での消極的参加が多くの職員の実態でした。ところが、この取り組みを境に事務改革に目を輝かせる職員が少数ながら出てきたことは事実で、そのわずかな輝きがやがて全体に広がっていったことは、「学籍情報システム」が職員の自発的提案によって始まり、完成に至ったことをもって明らかです。

同システムによる各種データは、教授会や各種委員会をはじめ学生指導上にも不可欠なものとなりました。教授会や各種委員会への職員の出席も「ただ聞いてくるだけ」から、提案を含んだ積極的な出席へと変わっていきました。理事会や評議員会などの法人運営においても、各種データに基づく職員からの提案はより重みをもって扱われるようになりました。意識変革の成果は学内だけにとどまりません。他大学との交流や外部研修会等へ積極的に参加し、そこで得られた情報や資料を自らの資質向上や組織の活性化に役立てるというように、活性化がさらなる活性化を呼び込む好循環の流れは今日へと確実につながっています。

事務機械化自学処理への歩み

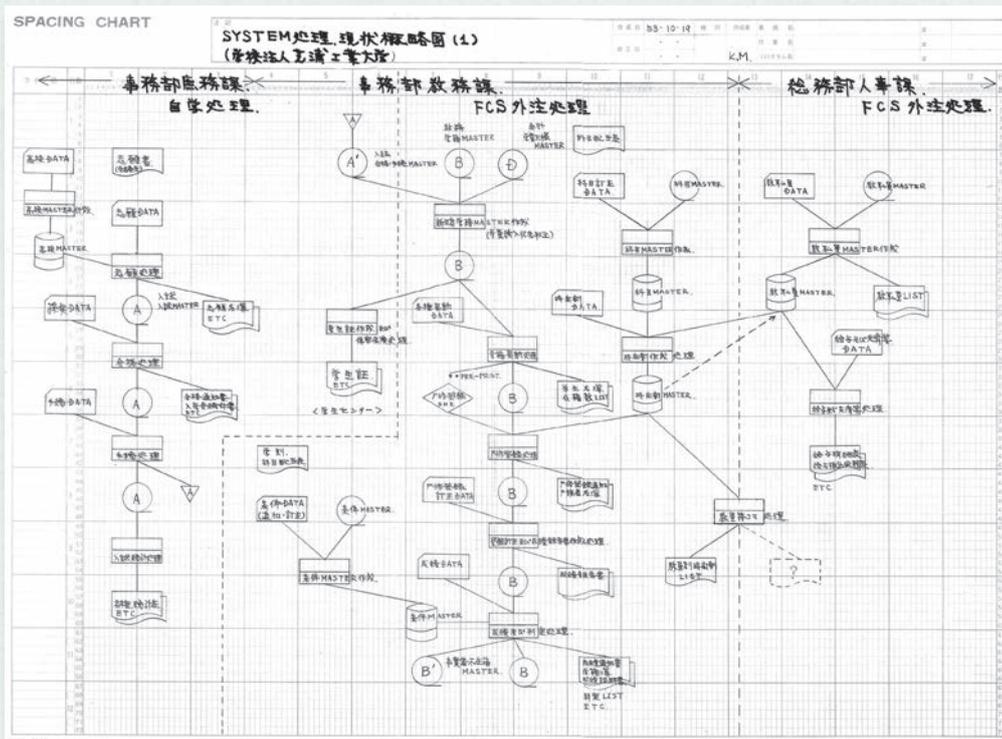
No. 68-5-A9

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
52年度	組織	事務電算部設置の導入決定 目的: 証券研究・申請・債権EのE化 ・事務処理の自動化の方向性決定										
53年度	組織	事務電算部設置の決定(52年度)										
54年度	組織											
55年度	組織											

事務機械化自学処理への歩み



MELCOM-COSMO 700II 計算機室(1979年ごろ)



SYSTEM処理、現状概略図

環境活動への取り組み ‘ISO14001’の認証取得

本学の環境への取り組みに “国際的お墨付き”

1980年代に始まり90年代に加速したグローバリゼーションは、国際的な市場統合を進め、世界諸国・諸地域の相互依存を著しく深化させ、各分野で国際的な標準化の規格が求められてきました。ISO(国際標準化機構)^(注1)が定める「ISO14001」と呼ばれる国際規格は、組織の事業活動が環境に与える影響を持続的に改善するための「環境マネジメントシステム(EMS)」^(注2)に関する規格であり、1996(平成8)年に制定されました。この規格の認証を取得するには、外部機関である審査登録機関の審査によって適合の「認証」を受けることが必要となります。本学の「ISO14001:1996」の認証取得は、本学の構築したEMSが国際レベルに達しているという“お墨付き”を得たことを意味しています。

認証取得への足取りと環境方針

国際標準化機構によるISO14001の制定後、欧米を中心とした企業間の取引条件として「認証」を要求し合うことが一般化されました。日本企業も競って認証取得に向かい、この流れは、産業界にとどまらず、環境教育を重視する大学にも広がっていきました。

本学での認証取得の動きは、1997(平成9)年3月、生涯学習センター主催の「ISO14001セミナー」公開講座から始まり、1999(平成11)年11月、大宮キャンパスでの認証取得を目指してISO準備委員会(委員長:木邑隆保教授)が発足し、EMS文書作成、学内導入体制、学生の組織化等、「認証」審査を受ける準備に入り、2001(平成13)年3月に審査登録機関(LRQA: Lloyd's Register Quality Assurance Limited.)

から全国の高等教育機関として6番目に認証を取得しました。

大宮キャンパスは、「グリーンキャンパスを目指して」
商標登録:「グリーンキャンパス」(商標2001-45325;特許庁)
というスローガンを掲げ、マイナスの環境側面である環境汚染防止に努めるとともに、プラスの環境側面として大学の社会的使命である「教育・研究」活動の中で高い環境意識を持った学生を育てていくことを環境方針の一つに掲げ、関係構成員が一体となって活動を展開しています。

EMS組織と活動

EMSによるPDCAサイクル活動は、3年ごとの適合認証の更新をワンステージとし、3年間の環境目的と1年単位の環境目標を見直しながら継続されており、大学運営の一環として大きく寄与しています。

EMS規格ISO14001は、経営システムの一面があり、多くの大学では、理事長などをEMS組織のトップとしていますが、本学では大宮キャンパスに在籍する教職員・学生が一体となった自発的な環境活動を重視し、「あまり力まず、できるところから」活動を推進していこうという構えから、大宮キャンパス長を環境管理総括者として発足しました。

その後、ISO活動が経営や日常業務と関連しており、持続性のある環境側面の改善・維持は法人全体の問題であるということが認識され、EMS組織は2006(平成18)年4月、理事長を環境総括者とする組織に改正されました。なお、ISO14001は、2004(平成16)年に改正され、2007(平成19)年3月の更新時に「ISO14001:2004」として変更された規格で認証を更新し、2010(平成22)年3月から第4ステージがスタートしています。



ISO14001 登録証



「大宮キャンパス」環境報告書2010

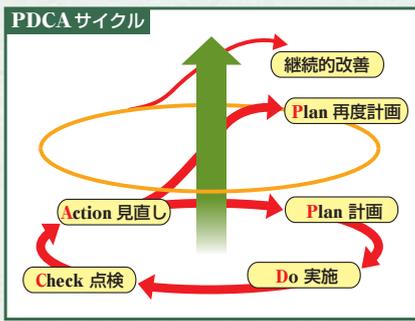


(注1)ISO

International Organization for Standardizationの略称。非政府機関の国際的組織として、工業分野の規格や標準を制定し、その関連活動の促進、発展を図っている団体で、1947(昭和22)年設立され、現在147か国が参加している。(本部：スイスのジュネーブ)

(注2)環境マネジメントシステム(EMS)

EMS(Environmental Management System)は、組織が自ら環境改善の方針、目的、目標を計画(Plan)、実施(Do)し、結果を点検および是正(Check)して、全体的に見直し(Action)、再度計画を立てるシステム(「PDCAサイクル」と称されている)を構築し、このシステムを継続的に実施することによって、環境負荷の低減と環境改善を図っていく。



2001年3月 大宮キャンパス
ISO14001 認証取得

教員倫理綱領

プロフェSSIONALに求められる倫理

大学の教員は学生の資質を発見し、能力を引き出し、それぞれが社会で生き甲斐と誇りを持って活動できるように支援することと、自己の学問分野での研鑽を根拠に学生を触発し、次代に引き継ぐべき糧を与え続けることを使命としています。そのために「最善を尽くす」プロフェSSIONALです。

社会はそのような大学教員に対して最高の学識と倫理観を求め、その行動を厳しく見守っていますが、現実には倫理にもとる行為は皆無ではありません。本学でもアカデミック・ハラスメントや研究費の用途疑惑の問題が発生し、倫理に関する状況に厳しい眼が向けられた時期がありました。

1999(平成11)年初頭、教員倫理委員会(委員長橋本邦雄教授)から教員倫理綱領に関する答申が出されます。綱領として提起されたのは次の5項目でした。

1. 教育職の能力の高揚と研鑽につとめる
2. 自由と独立の立場を保持する
3. 依頼者(学生と父母)と社会への対応をあやまらない
4. 責任を果たし、権利を守る
5. 倫理規定を守るための組織を持つ

1～4は、プロフェSSIONとしての特質から導き出される原則の確認。5は、その原則に忠実であろうとする者が連帯するために、教授会はプロフェSSIONALの団体組織として「教員倫理綱領」を採択するという意志表明です。教員のプロフェSSION性を中心に据えた自律性の高いもので、働く場を共にする者同士が綱領を遵守し、それぞれの自助努力を支え合うための指針でした。

先進的な取り組み

上記の答申に基づき、1999年2月から4月にかけて工学部およびシステム工学部(当時)の両教授会で倫理綱領制定に関する審議が行われました。その結果、共に満場一致で議決、承認を受けて同年4月15日付で「芝浦工業大学教員倫理綱領」が制定されました。

構成員の倫理に関する規程や綱領を作る動きとして、アメリカでは2000年前後に学会などで倫理規程が相次いで作られました。日本でも、例えば芝浦工大も加盟している日本私立大学連盟では「私立大学教員倫理綱領」を2003(平成15)年3月に制定しています。本学の取り組みは、その先進性からも高く評価されるものでした。



教員倫理委員会答申書「倫理綱領」冊子表紙

コラム

橋本 邦雄 はしもと くに お 名誉教授(建築学科)

大学の教授会がEthical Codeをもつのは、日本で初めての事だったと思います。規則や規程のように所属する者を拘束するルールとは別に、教員自らが己のプロフェSSION性を認めて自律性を明確にし、学究の自由と独立を守ることを自らに課す事が必要だと考えました。

幸い芝浦工大は講座制ではなく学科目制ですから教員の自主性は担保されやすく、責任も明確です。教授会のサポートも期待できます。当時、他大学の学長からコピーを求められ、教授会での議決方法を尋ねられました。我が教授会は両学部共真剣討議で決しました。その後、大学教員に就任される方には、この倫理綱領に同意をいただくことと定めましたが、守られていると信じています。

大学基準の適合認定と JABEEの認定

大学基準の適合認定

これまでの日本の大学は、新設時に行われる文部科学省の審査を受けるだけで、設置後の各活動(教育研究等)についての義務的な審査はありませんでした。しかし、教育研究水準の向上、教育研究等の質を継続的に保証していくためのシステムとして、2004(平成16)年の学校教育法の改正により日本のすべての大学は、文部科学大臣の認証する評価機関において定期的な大学評価『認証評価』を受審することが義務化されました。

本学の大学部門(学部・研究科)では、本制度が制定された2004年度に、そして専門職大学院では2008年度にそれぞれ認証評価機関である(財)大学基準協会において受審し、適合認定を受けました。

【大学基準協会における大学評価概要】

1. 本協会が定める大学基準に基づき大学の諸側面を包括的に評価することを通じて、大学の教育研究活動等の質を社会に対し保証すること。
2. 大学評価結果に対する改善報告書の検討というアフターケアを通じて、当該大学に設置される学部・研究科等を含む大学全体の改善を継続的に支援すること。

なお、2010年度より第2期の大学評価『認証評価』の適合認定を受けるべく準備を開始し、2011年度に受審しました。また、大学の自己点検として、自らの



大学基準の適合認定章



専門職大学院の適合認定章

判断と責任において評価結果を改革、改善につなげるために点検評価を法人、大学、各機関で実施しています。

JABEEの認定

本学は2006(平成18)年度より工学部4学科、機械工学科：総合機械工学コース、機械機能工学科(機械工学第二学科)：応用コース、応用化学科：応用化学コース、電気工学科：総合電気工学コースがJABEE (Japan Accreditation Board for Engineering Education：日本技術者教育認定機構)の審査を受け、2007年5月14日付でJABEEから認定の審査結果を受け取りました。

JABEEは、学士の単位を与えられる高等教育機関を対象に、日本の技術者教育プログラムの認定と審査を行う団体です。受審して認定されれば、そのプログラムは国際水準にあり、修了生は質の高い技術者教育を受けたことが客観的に証明されると同時に、技術士の国家試験の一次試験を免除されて技術士補となる資格が与えられます。

工学部ではJABEE 推進委員会が取り組みを進めており、認定4学科は2011年度に継続審査を受審し、2010年度から電子工学科が、2011年度から土木工学科がJABEE申請に向けて正式に活動を開始しました



4学科のJABEE認定証

入試・学生募集

入試の今昔

今日では数学、理科、外国語(英語)の3教科入試が基本ですが、1955(昭和30)年度の本学の「入学志願要項」を見ると、国語、社会、数学、理科、外国語(英語)の5教科で実施していたことがわかります。当時、既に多くの私立大学が3~4教科入試を実施していました。競合する工科系単科大学の中でも本学の5教科入試は異色でした。本学が5教科から3教科の入試に切り替えたのは1958(昭和33)年度からです。

試験の実施日も変わりました。本学は例年3月上旬に実施していましたが、いわゆる団塊の世代が大学に進学するようになった1967(昭和42)年ごろから、多くの私立大学が国立大学に先立って2月に入試を実施するようになります。本学は、1966年は3月6、7日に実施しましたが、1967年は2月21、22日に日程を早めました。

学生募集

1949(昭和24)年、新制芝浦工業大学設置後、学生確保の困難な時期が長く続きましたが、1970年代、いわゆる大学紛争の後も本学は学生募集に苦労しました。紛争校のマイナスイメージが尾を引く中、入試・学生募集を担当する教員たちは手分けして全国の高校を訪問し、芝浦工大の教育の特長を伝え、高校と大学の連携を深めようとして地道な努力を続けました。

1980年代に入り、国は、18歳人口が1992(平成4)年にピークに達し、以降に急減することを踏まえて臨時的定員増(期間を限った定員増)を1986(昭和61)年度から実施しました。この施策は大学大衆化の時代に、とりわけ私立大学の学生募集に大きな影響を及ぼしました。

こうした社会状況の下、本学の入試広報の改革が、1991(平成3)年、システム工学部(現システム理工学部)開設の頃から本格化します。受験生向けに1992(平成4)年に新パンフレット『HUMAN TECHNOLOGY』を発行。環境が社会問題化する中、「人間主義の工学」というメッセージを打ち出し、多くの人たちにインパクトを与えました。従来の大学案内が学科紹介中心のモノクロであったものを全ページカラーとし、キャンパスライフ全体を伝える内容に変えました。学科紹介に加え、全研究室の研究内容を掲載した斬新な手法は、学生募集の広報の先進的なものとして、受験生だけでなく、多くの大学からも注目されました。

入試改革

入試そのものの改革にも着手し、関東の大学ではいち早く地方入試を導入しました。2012(平成24)年度入試では、前期日程・全学統一日程は13か所、後期日程は6か所に地方会場を設けています。

後期日程入試の実施は1990年度からです。また、これと時期を同じにして、日程、学科によっては2教科型の入試も実施されています。現在は実施されていませんが、工学部建築学科は1993年度から、建築工学科は1994年度から実施された英語と実技による入試は、建築分野の中でもデザイン系の素養のある学生獲得を目指して行われました。実施初年度、建築学科には募集人数5人に対し、521人の志願者が集まり、その採点は深夜にまで及びました。

こうした入試改革を経て志願者数も増加。新制大学に移行した1949年、わずか32人だった志願者は2011年度一般入試では全日程合わせて過去最高の34,321人、国公立大学全体で19番目に志願者の多い大学になりました。

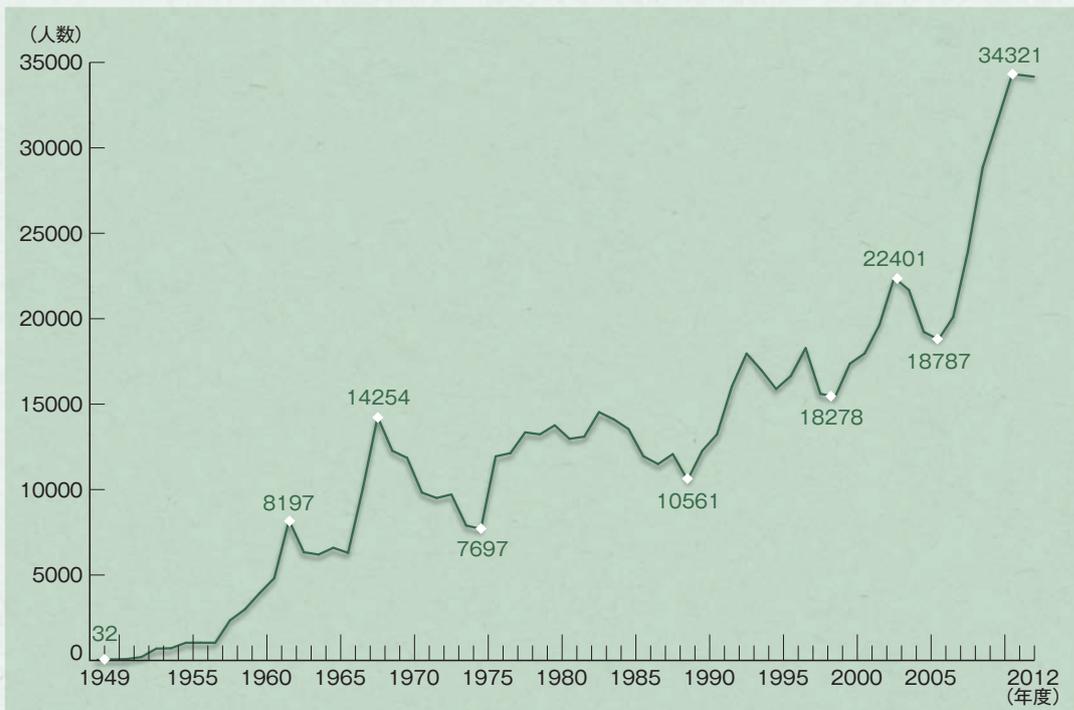


1955年度入學志願要項

コラム

きむら たか やす
木邑 隆保 名誉教授 (応用化学科)

私は、本学が苦境から立ち直っていく鍵は何よりも学生にあると考えました。学生募集の重要性を痛感し、入試・学生募集担当の教員たちと全国の高校を訪問しました。どこそこの有名高校から何人入学したということを誇るのではなく、本学の校風にマッチした学生に来てほしいと願い、さまざまなタイプの高校に本学の良さを訴えて回りました。どのような思いを抱いて教えているのか、具体的にどうい内容の教育をしているのか、大学教員が訪問して高校の先生方と話すことは大学と高校の双方にとって有意義でした。そして、一人ひとりの学生のことを、送り出した高校と引き受けた大学、双方の先生が胸襟を開いて語り合うことで信頼関係が生まれました。卒業生を本学に託した高校の先生の期待に応える教育をしようと誓ったことを思い出します。



芝浦工大一般入試志願者数推移

就職支援

就職センターの発足

1978(昭和53)年の就職センター員制度ができるまで、学生に対する就職支援業務は、事務組織では大学事務部厚生課(現 学事部学生課)が取り扱っていました。一方、教員の組織では、昼間学部(一部)1学部11学科、夜間(二部)2学科がそれぞれ独自に就職の支援業務を行っていました。窓口が一本化されていないため、統一された就職支援が行われていないことに対する改善の提案が教員と職員の両サイドから出され、全学的な就職支援組織としての就職センター員制度が発足しました。

就職センターは、センター長1名と教員のセンター員5名で構成され、この6名に新設された就職課の職員、課長を含めた3～4名が加わって積極的な就職支援活動が展開されました。就職センター員は、北海道から沖縄までの全国の企業を訪問し、好景気・不景気に左右されることなく、内定企業への御礼および実績企業訪問を継続的に地道に実施してきました。その結果、芝浦工大は誠意ある大学として全国の企業から高く評価されたのでした。1991(平成3)年に就職センター規程が制定され、遂行する業務内容が明確になります。教員と職員が相互に協力して就職支援活動をする必要性がうたわれ、1996年から職員が就職センター員として加わるようになりました。本学の就職支援活動はそこから本格化していきます。

就職支援の環境の変化

就職支援業務も時勢に応じて変化します。2002(平成14)年から開催されるようになった就職センター主催の企業懇談会には、産業界の第一線で活躍している本学卒業の会社役員および内定をもらった

大手有力企業の人事関係の要職者が招かれました。大学と企業がより交流を深める機会とすることはもちろん、大学のアピールの場としても重要でした。また、学生数の増加により求人情報などのデータ量が膨大化、整理し切れない状況が生じ、本学でもコンピューターの利用が不可欠になりました。

学生の主体的な就職活動として、2001(平成13)年ごろからインターネットによる企業研究が活発化してきました。工科系での就職支援は、それまでは求人企業の人事担当者が直接各学科の教員から推薦された者を採用するのが大半の姿でした。しかし、企業側で卒業生の大学名にとらわれない採用が増え、従来のように就職担当教員を訪問して相談することが減ってきました。就職センターでは、そうした事態に対応して「就職関係教職員のための企業研究」の会合を再三開催し、特に教員の就職指導に資する機会を設けたりすることに努めました。

本学が就職支援で標語として用いた「就職に強い大学」は、今や「仕事に強い大学」に進化しています。2006(平成18)年には担当する事務組織も就職課からキャリアサポート課へと名称変更を行い、学生の生涯にわたるキャリア形成を支援する取り組み姿勢に変わりました。本学の就職支援の努力とその成果が高く評価され、2011年11月発行の『週刊ダイヤモンド』で、本学は「就職に強い大学」のランキングが全国の国公立大学中11位、私立大学第1位と高く評価されたことは、特筆に値します。



学内企業合同説明会(2011年)



就職活動対策講座(2005年)



面接対策講座(2005年)



コラム

かさ い たか お

笠井 尚雄

名誉教授(機械工学科)(1954年機械工学科卒業)

私は芝浦工大卒業と同時に、自分の学んだ機械工学科の助手となりました。多くの業務内容のうち、最高学年の就職活動について、恩師、弓削政隆先生の下で学生に助力する毎日を過ごしましたが、学生の求人採用のため学科を訪れる多くの企業の役員や人事の方々と接し、社会に対する見聞も広めることができました。物事の見方、考え方を基本から教えてくださった恩師の存在は誠にかけがえのない貴重なものであります。学生時代はもとより、卒業後に後輩たちの助育に携わってからもご指導をいただいたことが、私の人生の基盤となっています。

4年間の修学は、将来における自分の生活を確立する基礎の構築です。学生諸君にはこの基礎を大切に、就職という関門を越えていただきたいと祈っています。

国際交流

国際交流センター開設まで

本学の国際交流が本格化したのは1976(昭和51)年。それ以前も個人のつながりで教員や学生の交流が行われていましたが、教員主体のものでした。同年より外国人学生等特別入試制度を設け、正規留学生の受け入れを開始。理工系大学の中で留学生特別入試を実施する大学はほとんどなく、いち早く国際交流への取り組みを始めたと言えます。

さらに本学の国際交流を推進するために、1989年、国際交流センター準備室を設置。留学生受け入れ体制を整え、教員主体の交流を大学全体の交流に拡大し、日本人学生の海外留学に積極的に取り組むことが目的でした。国際交流センター事務課(現国際交流課)立ち上げまでの約3年間、交流協定締結校の開拓、研修プログラムの立案、先方との調整などを行って1991(平成3)年、国際交流センターを開設。アメリカのイリノイ大学の語学研修に20名の学生を派遣するパイロットプログラムでスタートを切りました。

マレーシアからの留学生受け入れ

本学国際交流の転換点は、日本の円借款資金によってマレーシア政府が実施する留学生派遣事業「マレーシア高等教育基金事業(HELP)」に幹事校として参加したことでした。マレーシアで学生を募集し、現地で日本語と理数系科目を教育した後、日本の大学に留学させる事業で、カリキュラムの作成、理数系科目担当教員の派遣など、本学は中心的役割を担ってきました。1993(平成5)年、マレーシア現地での2年間の教育がスタート、1995年4月から日本の大学での受け入れが開始され、1期から5期までに計310名(うち39名が本学^(注1))が日本留学を果たしました。

後継プログラムのHELPⅡでは現地教育の2年目を大学1年次教育に充て、修了後に日本の大学2年次に編入するという連携、ツィニング・プログラムへと進化しました。同プログラム実施に伴い、1995年、私立13大学^(注2)からなる「日本マレーシア高等教育大学連合」が結成され、カリキュラムの作成、教員派遣、学生の受け入れ、ティーチング・アシスタントとなる日本人学生の派遣など、活動の幅が広がりました。本事業は「ツィニングによる国際化への積極的取組」として、文部科学省の2003(平成15)年度「特色ある大学教育支援プログラム」に選定されました。HELPⅡでは5期までに計299名(うち37名が本学)が日本に留学しましたが、さらに現地教育を3年とし、うち2年間で大学教育に充て、日本の大学の3年次に編入させるHELPⅢが2005(平成17)年から実施されています。

大学院のハイブリッド・ツィニングプログラム

大学院では2005年より本学独自のハイブリッド・ツィニングプログラムを開始。本プログラムは、東南アジア諸国の代表的工科系大学をパートナー大学^(注3)として連携を図り、修士課程と博士課程を複合(ハイブリッド)して行う大学院国際共同教育プログラムです。パートナー大学の修士1年次修了生を本学に受け入れ、英語による教育と研究指導を行って修士課程を修了させ、本学とパートナー大学双方が修士学位を授与した後、本学の博士課程に進学させて博士の学位を授与するものです。本プログラムは文部科学省の2005年度「大学教育の国際化推進プログラム(戦略的国際連携支援)」に採択され、2011年度までに45名の学生が本プログラムで学んでいます。

ハイブリッド・ツィニングプログラムの教育システム

通常課程	学部	大学院				
		修士課程		博士課程		
		1	2	1	2	3

ハイブリッド・ツィニングプログラム (編入コース)	学部	大学院				
		修士課程		博士課程		
		1	2	1	2	3
		パートナー大学	本学	本学		

 パートナー大学等での教育
 本学での教育
 Double Degree

芝浦工業大学海外協定校(2011年9月現在)

研究協力指定校 (Green box): University of Surrey, Northeastern University, Harbin University of Science and Technology, Yonsei University, Chung-Ang University, Hanyang University, National Tsing Hua University, Southern Taiwan University, Hanoi University of Science and Technology, Ho Chi Minh City University of Technology, Universitas Gadjah Mada, Institut Teknologi Bandung, Universiti Teknologi Malaysia, Rensselaer Polytechnic Institute, McMaster University, The Pennsylvania State University, University of Virginia, Universidade Positivo.

短期語学留学プログラム (Blue box): KTH Royal Institute of Technology, VAMK, University of Applied Sciences, Moscow Architectural Institute, Donghua University, National University of Laos, AGH University of Science and Technology, University of Laquila, École Polytechnique Fédérale de Lausanne EPFL, Ecole Nationale Supérieure d'Architecture de Paris-Belleville, King Mongkut's University of Technology Thonburi, Chulalongkorn University, Thai-Nichi Institute of Technology, Suranaree University of Technology.

マレーシアプログラム (Red box): Hanoi University of Science and Technology, Ho Chi Minh City University of Technology, Universitas Gadjah Mada, Institut Teknologi Bandung, Universiti Teknologi Malaysia, Universiti Industri Selangor, Universiti Sains Malaysia.

交換留学プログラム (Green box): Harbin University of Science and Technology, Yonsei University, Chung-Ang University, Hanyang University, National Tsing Hua University, Southern Taiwan University, Hanoi University of Science and Technology, Ho Chi Minh City University of Technology, Universitas Gadjah Mada, Institut Teknologi Bandung, Universiti Teknologi Malaysia, Rensselaer Polytechnic Institute, McMaster University, The Pennsylvania State University, University of Virginia, Universidade Positivo.

建築系交換授業プログラム (Orange box): Moscow Architectural Institute, National Tsing Hua University, Southern Taiwan University, Hanoi University of Science and Technology, Ho Chi Minh City University of Technology, Universitas Gadjah Mada, Institut Teknologi Bandung, Universiti Teknologi Malaysia, Rensselaer Polytechnic Institute, McMaster University, The Pennsylvania State University, University of Virginia, Universidade Positivo.

ハイブリッド・ツィニングプログラム (Yellow box): Harbin University of Science and Technology, Yonsei University, Chung-Ang University, Hanyang University, National Tsing Hua University, Southern Taiwan University, Hanoi University of Science and Technology, Ho Chi Minh City University of Technology, Universitas Gadjah Mada, Institut Teknologi Bandung, Universiti Teknologi Malaysia, Rensselaer Polytechnic Institute, McMaster University, The Pennsylvania State University, University of Virginia, Universidade Positivo.

HELPの教育システム

●1993～/予備教育2年、日本に大学1年から入学

1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	
コース	予備教育	予備教育	大学教育	大学教育	大学教育	
年次	予備1年	予備2年	大学1年	大学2年	大学3年	大学4年
場所	マレーシア		日本			

〈学生数/5バッチ・計310名〉

●1999～/+2+3ツィニング、大学2年次編入

1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	
コース	予備教育	大学教育	大学教育	大学教育	
年次	予備1年	大学1年	大学2年	大学3年	大学4年
場所	マレーシア		日本		

〈学生数/5バッチ・計299名〉

●2005年～/+3+2ツィニング、大学3年次編入

1年目	2年目	3年目	4年目	5年目		
コース	予備教育	予備教育	大学教育	大学教育		
年次	予備1年	予備2年	大学1年	大学2年	大学3年	大学4年
場所	マレーシア		日本			

〈学生数/5バッチ・計400名(予定)〉



(注1) 受け入れ大学は本学を含め国立37大学、私立13大学
 (注2) 本学の他、岡山理科大学、近畿大学、慶應義塾大学、拓殖大学、東海大学、東京工科大学、東京電機大学、東京都市大学、東京理科大学、明治大学、立命館大学、早稲田大学
 (注3) パートナー大学は2012年3月現在、ハノイ理科大学、ホーチミン市工科大学(ベトナム)、キングモンクット工科大学トンブリ校、スラナリー工科大学、(タイ)、バンドン工科大学、ガジャマダ大学(インドネシア)、マレーシア工科大学(マレーシア)

コラム

足立 格一郎 元副学長、初代国際交流センター長 名誉教授 (土木工学科)

国際交流センターは1991年4月にスタートした。その前々年に開設された「国際交流センター準備室」から活動は始まる。私は大学院3年半をアメリカのイリノイ大学で過ごした経験があり、日本人に国際交流の重要なことを非常に強く感じていた。スタッフの諏訪さんは孤軍奮闘で活躍したが、国際交流に大変熱意があり、センター立ち上げの原動力となった。

国際交流センターの課長には小林さんになってもらった。二人のスタッフでは必要業務をまかないきれないので国連で勤務経験のある栗原さんにも参加してもらった。イリノイ大学との交流プロジェクトをセンター初年度から始めたが、参加学生から、プログラムに参加して素晴らしい体験をしたとの感想をたくさんもらった。熱心なスタッフの尽力により、芝浦工大に国際交流センターありという評価を多くの大学からいただいたことを思い出す。

産学連携・知財管理と先端研究

産学連携の歩み

1993(平成5)年7月、本学と東京産業人クラブ(日刊工業新聞社を中心とした産業人との交流会)が共同で設立する芝浦工業大学・城南地区東京産業人クラブ産学交流会(略称SIT産学交流会、現東京産学交流会)の発起人会が開かれました。これが本学にとって大学としての産学交流活動のスタートでした。同年9月にはSIT産学交流会として正式に発足。当初は本学で講演会を開催、講師は本学の教員が担当しました。

2000(平成12)年10月には学術助成室(現連携推進部)のもとに事務組織として産学連携課を設置。SIT産学交流会、埼玉県や大田区、岡谷市との産学交流など、今まで学内の事務部署ごと個別に関わってきた活動を一本化、産業界との連携体制が確立されました。2002年9月に本学と(株)IHとの間で「産学連携に関する協定書」が調印締結されたことも特筆すべき出来事でした。2004(平成16)年11月、産学連携課は産官学連携課に名称変更、組織体制の強化はさらに進みます。

2009(平成21)年度には、企業、他大学に加え、研究機関や行政機関、そして市民との活発で多面的な連携、交流を通して人材育成やイノベーション創出を図るために「複合領域産学官民連携推進本部」を設置しました。

知的財産管理の取り組み

産学連携と関連する知的財産管理の原初的な動きとしては、1998(平成11)年4月、TLO準備室の設置があります。技術移転について他の工科系大学と情報交換したり勉強会を開催したりして交流。1年後に知的資産センター設立に関する答申書を出しましたが、大きな動きには至りませんでした。

本格的な動きは、2002年、本学が「大学における知

的財産管理体制構築支援事業」に応募、採択され、特許庁から知的財産アドバイザーが2003年から3年間派遣されることになってから始まります。2005(平成17)年3月には産学連携・知的財産管理委員会が発足。知的財産ポリシーの制定、職務発明規程の改定、発明委員会設置などを行いつつ、同年7月には知財準備室を設け、知的財産管理本部を10月に発足させて知的財産管理体制を整備しました。その後、2009年度の複合領域産学官民連携推進本部の設置に伴い、知的財産管理本部はこの推進本部の一部門(知的財産管理活用部門)に包含されました。

先端工学研究機構の設立

本学の先端研究の拠点は先端工学研究機構。その原点は、1954(昭和29)年に電気工学科の委託研究が大学組織に発展した工業研究所(岩竹松之助所長)です。1970(昭和45)年に工学研究所と改称し、1990年代に入って受託研究の受け入れ窓口としての役割は果たしていたものの、研究所としては停滞していました。

工学研究所を改組し、創立70周年記念事業の一つとして1997(平成9)年に設置されたのが先端工学研究機構でした。当時の文部省のハイテクリサーチセンター整備事業による私立工科系単科大学助成の第1号となり、1998年、大宮キャンパスに機構棟が建設されました。

2011(平成23)年に設立されたSIT総合研究所の付置機関となった先端工学研究機構は、自主自立を旨とする多様な研究センターを擁し、研究ポテンシャル向上の取り組みを続けています。また、同年11月には中央区の佃に本学の研究成果を学外に発信するために「芝浦工業大学 SIT総合研究所 佃イノベーションスクエア」を開設しました。



年ごとに発行された産学交流会の活動報告書『第二の創業に挑戦』



先端工学研究機構棟



TLO準備室答申書(1999年)



佃イノベーションスクエア開所式(2011年11月29日)

地域社会に貢献する大学へ

本学は、教育・研究活動その他を通じて社会に貢献していくことが大学の社会的使命であると考え、キャンパスのある地域を中心にさまざまな貢献活動を行ってきました。

生涯学習センターの活動

1991(平成3)年3月、生涯学習センターが設置されました。目的は、「学習に対する多様な社会的要請に応えるため、すべての人々を対象とした教育活動を促進し、本法人設置の各学校との連携を図りつつ、その有している諸機能を社会に開放する」ことです。

同センターは、設置初年度から「港区民大学講座」や「大宮市民大学講座」、「上尾市民大学講座」などの大学近隣の市民講座と連携しつつ、本学教員による工学系講座や教養講座をはじめ運動系の実践講座も含めた8講座を開講しました。その後、子どもから大人までを対象に、社会のニーズに対応した多彩な公開講座を展開し、講座数は現在年間30余りになります。

また、ものづくりの楽しさを子どもたちに伝え、将来のエンジニアを目指すきっかけとなるよう2000年から始められた公開講座「少年少女ロボットセミナー」は、全国各地のみならずアジア各国、アメリカなどでも開催され、参加者は延べ1万人を超えました。

大宮キャンパスでの取り組み

1966(昭和41)年に開校した大宮キャンパスの周辺は閑静な住宅街で、多くの学生が下宿生活を送っています。そこで、近隣住民とより良い関係を築くため、生涯学習センターの公開講座のほか、年1回、下宿の管理人を大学に招いての懇談会、近隣住民を招

いたお花見、近隣のスポーツチームへの体育施設の開放などを積極的に行ってきました。

また、1997(平成9)年から始められた近隣住民参加型の学園祭「大宮祭」は、毎年多くの来場者でにぎわう恒例のイベントとして地域に定着しています。

芝浦キャンパス、豊洲キャンパスでの取り組み

旧芝浦キャンパスでは、公開講座の開講や地元商店街の祭りへの参加などのほか、学園祭である「芝浦祭」を通して、長い間、地域連携活動を実施してきました。

一方、2006(平成18)年に開校した豊洲キャンパスの周辺は、高層マンションが林立し、多くの家族が住むエリアとなりました。壁や門のない開放的な造りに設計されたキャンパスの中庭は、地域住民との交流の場、憩いの場として親しまれています。

豊洲キャンパスでは、開校当初から近隣住民に向けた各種取り組みを展開してきました。中でも「大学開放DAY!」は、大学を身近に感じてもらうことを目的に、近隣の子どもたちを対象にサイエンスショーやものづくり体験コーナーなどを催し、毎年2,000名を超える来場者でにぎわうイベントに成長しました。他にも、近隣の町会・自治会とのイベント共催や小学生を対象にした化学実験教室、保育園での紙芝居の読み聞かせ、江東区と連携して学生を中学校に派遣する理科支援事業、学生と教職員協働で行う地域清掃など、数多くの地域連携事業を推進し、江東区社会貢献ネットワークにも参加しています。

芝浦工業大学 公開講座年表

※年度後の()内は年間講座数、講座名の後の()内は共催(の場合)・会場:芝、大、大宮 登、豊洲・見沼入会人数

	(平成3年)1991 (8)	1992 (12)	1993 (12)	1994 (14)	1995 (23)	1996 (26)	1997 (23)	1998 (22)
工学系		コンピュータ基礎講座(芝・16) ASIS 設計基礎講座(芝・11)	コンピュータ基礎講座(芝・17)	コンピュータ基礎講座(芝・17) 立休機種の対応と立休カメラの製作(芝) けっこう面白いで数学で(大) 符号理論講座(芝)	ASIS 基礎講座(芝) ASIS 動向講座(芝) VLSI の基礎から実習まで(芝) 符号理論入門講座(芝)	ASIS 基礎講座(芝) わかる建築構造講座(芝)	衛星測位 (GPS) の原理と応用一測地からカーナビまで(芝)	医療・福祉と工学の視点(芝) 光通信基礎講座シリーズ「光通信」の有効利用と地球温暖化対策(芝) 衛星測位の原理と応用一測地・カーナビ・建設測量一(芝)
資格系	FA をのぞいて(大・4)			建築士構造力学講座(芝)	わかる建築構造講座(芝)	わかる建築構造講座(芝)	わかる建築構造講座(芝)	わかる建築構造講座(芝)
現代課題	交通・街・社会(大宮・大・21)	深作塾 I 埼玉県のまちづくりを考える(大・14) 未来のやさしい技術と医療機器ロボット～人にやさしい技術のために～(大宮市・大・38)	職場と人間労働(大宮市・大・35)		シニアライフのための「高齢社会と福祉工学へのアプローチ」(芝) 高齢社会における福祉機器の開発とその利用(芝) 農業と野鳥～初めてのバードウォッチング～(大宮市・大)	日本のロボットと人工衛星の開発～きく1から宇宙ステーションまで～(芝) 高齢社会における福祉機器の開発とその利用(芝) 農業と野鳥～初めてのバードウォッチング～(大宮市・大)	未知の分野を開拓する日本の宇宙開発(芝) 「自然美」の思想をめぐって(芝) 青い空の境界～建築・環境・仏教～(芝) 心と社会～高齢の時代にあはなは生き残るか～(大) 社長の空想(大宮市・大)	老化のメカニズムと健康問題を考える(大宮市・大) 船橋に立つ日本の列島の現状(芝)
教養	道徳から成る歴史一歴史観から情報伝達一(埼玉展・大・20)	パソコンワーク初級体験教室(芝・36) 深作塾 II 道徳を探そう(大・17)	高山植物観察と森林浴(湯の丸・24)	歴史と道徳(大宮市・大) 野鳥と道徳～初めてのバードウォッチング～(湯の丸)	緑のキリシタンの信仰と生活一「日本キリシタン」研究一調査の軌跡(琉球一鹿児島)から～(芝) 道徳と野鳥～初めてのバードウォッチング～(大宮市・大)	古文書に親しみながら「戦国武将の家」をめぐり(芝) 未来に伝える過去の遺産一歴史の中の美術と建築～(芝) 心の平の7777一その生成と伝説～(大) 武家社会と経済成長(大宮市・大)	中世軍用の文字をめぐり(大宮市・大) 「自然美」の思想をめぐって(芝) 青い空の境界～建築・環境・仏教～(芝) 心と社会～高齢の時代にあはなは生き残るか～(大) 社長の空想(大宮市・大)	住まいの意味を考える(芝)
語学								
運動健康系	心と体の健康セミナー「暮らしと健康」(上尾市・大・56)		初心・初級級式テニス講習会(大・30)		心とからだの動きをささぐり(大宮市・大) 初級級式テニス講座(大)	初級級式テニス講座(大) 中級級式テニス講座(大) リフレッシュと健康運動一気功を楽しみながら(大)	暮らしに活かす実用英語(大) 初級級式テニス講座(大) フィットネス講座一自己の身体を知る～(大)	たのしい基礎英語(大) 初級級式テニス講座(大) 中級級式テニス講座(大)
大学院開校他								
工学系	人間と機械と哲学(芝・21) テクノ講座: 生命と環境の調和 III ライフスタイルの新たな転換に向けて(芝・45)	テクノ講座: 自然と人間の調和(芝・37) 地球にやさしい電子工学(大宮市・大・25) デジタル信号処理入門(芝・17) 都市のコーディネーター「土木」(芝・48)	地球にやさしい電子工学(湯の丸・芝・45) 地球にやさしい電子工学(大宮市・大・37) デジタル信号処理一画像処理・無線従事者のためのフーリエ変換講座(芝・35) 自然と人間の調和 II (芝・17)	フーリエ変換講座(芝) 化学が教える暮らしのフロンティア(湯の丸) 共催(芝) 3D ワークショップ ～立体映像をつくらう～(芝湯)	フーリエ変換講座(芝) 統計的手法(芝) 材料が教えるあなただけの暮らし一材料研究が教える暮らし～(湯の丸) 芝・大宮市・大)	符号理論入門講座(芝) VLSI の基礎から実習まで(芝) 統計的手法(芝) 電気回路の基礎(芝) 社務者のためのプラスティックの基礎と使い方(芝) 入門講座材料科学(工学)(芝) 炭素とエネルギーの話を語り(湯の丸・大宮市・大)	風土と住まいの文化(芝) 統計的手法(芝) VLSI の基礎から実習まで(芝) 電気回路の基礎(芝)	先端技術解説シリーズ「材料と人と環境と」(芝) 統計的手法(芝) 住みやすさを考える(大宮市・大) VLSI の基礎から実習まで(芝)
資格系								
現代課題					いのちの哲学一今生命論に問われて(芝)	いのちの哲学一二人称の死(芝) 「19」の哲学一自然との共生をめぐり～水環境を考える～(ササノバ・大宮市・大)	いのちの哲学一道徳心をめぐる(芝) われわれはどこまで生きるか(湯の丸・大) 建築の歴史と文化一建築から考える(湯の丸)まで(芝) 高齢社会と医療福祉機器の開発一テクノロジーは高齢社会を支えるか～(大宮市・大)	いのちの哲学一生命論(芝、むかし) (芝) 東京の防災は万全か(湯の丸・大) 建築の歴史と文化一建築から考える(湯の丸)まで(芝) 人間の未来を開拓する有人宇宙ステーション一有人宇宙船の歴史から国際宇宙ステーション計画まで(芝)
教養	パソコンワーク初級体験教室(芝・15) 手作り職人形(芝・21)	パソコンワーク初級体験教室(芝・33) 手作り職人形(芝・21)	パソコンワーク初級体験教室(芝・28) 道徳を探る(大・27) 深作塾 I 宇宙空間から地球を語る(大・14)	神の心に親しむ(大宮)	神の心に学ぶ一聖書と祈り(大) 平安文化を語り(特別講座・中東)	新書の生涯から仏教的生き方を学ぶ(大) 中国語講座(芝)	近代文学に親しむ「生きる」(芝) 仏教の人間と死にかた(芝・エドケイ・大宮市・大)	
語学					英語の散歩道(大)	英語の散歩道(大)	中国語講座一正しい発音の習得と中国事情～(芝) 英語の散歩道(大)	英語の散歩道(大) 中国語講座(芝)
運動健康系	級式テニス講座中級(大・12)		初心者向けスキー教室(湯の丸)	初級級式テニス講座(大宮) 若さと美しさを求めて～あなたの心と体をほぐります～(大宮)	中級級式テニス講座(大)	ニューススポーツを楽しむ(大)	リフレッシュと健康運動一気功を楽しみながら(大)	フィジカル・フィットネス(大)
大学				2007年11月、都立大(大・17) (88)	2007年11月、都立大(大・17) (10)	2007年11月、都立大(大・17) (10)	2007年11月、都立大(大・17) (10)	2007年11月、都立大(大・17) (10)

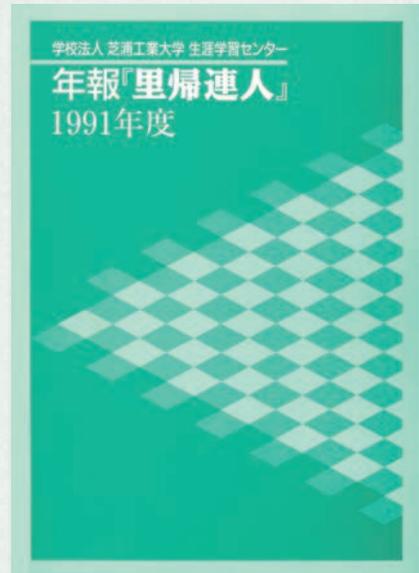
芝浦工業大学公開講座年表



化学実験教室



大宮祭の様子



年報「里帰連人」(1991年度)

ロボットセミナー

子どもたちにモノづくりの楽しさを

ロボットの製作を通して子どもたちにモノづくりの楽しさを知ってもらい、工学の基礎学習と併せて創造性を養うことを目的としている「少年少女ロボットセミナー」。芝浦工大生涯学習センター主催の公開講座です。

子どもたちは“自分で考えて自分で作る”をモットーに、芝浦工大が開発した「ボクサー」と呼ばれるロボットのキットを試行錯誤しながら製作。作り上げたロボットに参加者それぞれが創意工夫してデコレーションを施し、総仕上げに思い思いのロボットでデザインコンテストやバトル競技大会に出場して入賞を目指します。

セミナーの誕生まで

ロボットセミナーには前史があります。1984(昭和59)年、東京都港区教育委員会から小中学生向けの講座の開講依頼があり、「やさしいロボット教室」が開かれることになりました。担当したのはロボットの研究をしていた佐藤^{あきら}先生(元機械制御システム学科助教授)。佐藤先生は、当時、道具の使い方を知らない学生に接して、「モノづくりを体験する機会が減っている。小学生のうちから体験させることが必要」と考え、講師を引き受けたそうです。

1997(平成9)年には芝浦工大創立70周年記念事業の一環として「全国縦断ロボットセミナー」が、校友会の協力を得て全国13カ所で盛大に開催されました。これが布石となり、後年、ロボットセミナーをユニークな出張公開講座として各地で催すことが企画されます。

そして、2000(平成12)年の夏、全国9カ所で小中

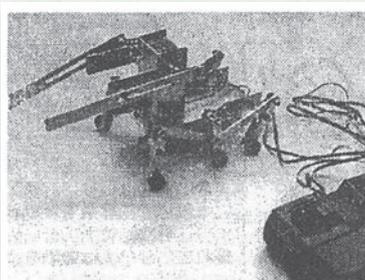
学生ロボットセミナーを開催。7月17日付の朝日新聞に掲載された記事「最強のロボを手作りしよう 芝浦工大が全国でセミナー」は大きな反響を呼び、問い合わせの電話が殺到したと言われます。

花開かせた取り組み

ロボットセミナーの歴史は、佐藤先生を始め、芝浦工大でロボットの研究に取り組む先生たちの貢献に加え、陰で盛り立ててきた人たち抜きには語れません。ロボットセミナーの実現に力を傾注したのが故・河村憲二企画部長(当時)。1998年、芝浦工大に入職したころ、大勢はロボットセミナーの実施に消極的でした。河村さんはそこに次代の科学技術を担う人材の育成という社会貢献の意義を見て取り、さらに芝浦工大のアピールにもなると考えて周囲の理解を得ることに努めました。セミナーの実施経費に充てるため、彼の人的ネットワークを総動員して外部の補助金獲得にも奔走しました。

河村さんの考えに賛同し、パートナーになったのが、芝浦工大の関連会社、(株)エスアイテックの専務であった金井貞晴さん。教材キットの製造販売、在庫管理、さらにはセミナーの実務を担う人材提供などを一手に引き受け、セミナーの全国展開の土台を固めました。

今やロボットセミナーの開催は毎年全国約30カ所、約1,200人の参加を得て、2009(平成21)年4月には受講生が延べ1万人を突破しました。日本だけでなく、シンガポールやマレーシア、アメリカのニューヨークでも開かれました。小中学生の頃にロボットセミナーに参加したことが工学の道に進むきっかけとなり、芝浦工大に入学した学生も現れています。



手作りロボット写真展でバトルしてみよう。芝浦工業大はこの夏休み中、オリジナルのキットを使った小学生ロボットセミナーを全国九カ所で開催する。工学の基礎を体験してもらい、「ものづくり」の楽しさを知ってもらおうという試み。これまでも単発で行っていたロボット教室が好

最強のロボを手作りしよう

芝浦工大が全国でセミナー

評だったため、今年度から本格的に全国展開することにした。同大によると、セミナーの対象は小学五年から中学二年生。単なる組み立てではなく、大学教員の説明を受けた後、一つひとつの部品にヤスリをかけ、ギア設定も自分でする本格的なもの。完成まで三日間かかる。最終日はバトル大会を開くが、同じキットで作っても強さは工夫次第という。参加費は会場によって三千から七千円。キットだけの販売もする。問い合わせは同大生涯学習センター（☎03・5476・29300）。

開催地は東京都大田区▽同板橋区▽同瑞穂町▽富山県庄川町▽東京都港区▽埼玉県大宮市▽富山県氷見市▽千葉県柏市▽名古屋市

朝日新聞記事(2000年7月17日付)



セミナー開催風景(2000年8月 千葉県柏市)
中央が故・河村企画部長



シンガポールで開催されたロボットセミナー(2005年)



ボクサー(教材キット)

コラム

菅野 仁悦

生涯学習事務課 (1959年 機械工学科卒業)

2000年より開催のロボットセミナーを通し、常に思うことは、セミナー受講生(小学4年生以上)のその後の動向である。受講生は年間1,000名にも及ぶ。中でも思い出に残るのは、大学生になってもセミナー指導員を引き受け活躍してくれる名古屋地区受講生、そして地区大会で受講、活躍後、芝浦工大に入学し、入学早々に指導員として活躍してくれる埼玉地区及び付属中学・高校の多数の受講生たちである。2011年度芝浦工大・入学者にもセミナー受講生がいて、セミナーの運営を手伝ってくれる。

芝浦祭の顔、芝屋

工学祭から芝浦祭へ

1973(昭和48)年11月、芝浦キャンパスで第1回「芝浦祭」が開催されました。それまでは工学を学ぶ者の学園祭として、1955(昭和30)年を初回に「工学祭」の名で開かれていたのですが、1968(昭和43)年11月開催の第13回が「工学祭」としては最後になりました。その後、1969年から1972年まで本学では学園祭は開かれませんでした。当時、全国の多くの大学はいわゆる大学紛争の渦中にありましたが、本学も混乱が著しく、その影響から学園祭を開催するには程遠い状況にありました。

学内の混乱がある程度収まってきたころ、学生たちの中から学園祭の開催を求める声が上がります。1973年11月、そうした学生たちの主体的な取り組みによって本学に学園祭が復活、「芝浦祭」と命名されました。

シバヤの誕生

毎年恒例、芝浦祭のフィナーレを飾るのが「芝屋」です。「しばや、しば〜や」、ステージの演奏に客席は大声で熱狂的に呼応します。芝浦祭の顔とも評される光景です。芝浦祭の歴史をまとめた冊子『芝浦祭史』(2005年11月発行)によると、学園祭のお祭りバンドとして「シバヤ」が誕生したのは1979(昭和54)年開催の第7回芝浦祭の時でした。その年の秋、学園祭を盛り上げるテーマ曲を作ってほしいという芝浦祭実行委員会の求めに応じて軽音楽同好会の有志が「シバヤ」を結成。総勢8人が当時、大宮キャンパスにあった学内寮のメンバーの1室に集まり、興に乗るまま、ほぼ1晩で作詞、作曲したのがファンキーな曲調の「てめえら」とサンバ風の曲「チバヤ・シバヤ」の2曲でした。後者が「シバヤ」の原曲、その逆さ読みの倒語を利用

した正体不明の歌詞は「アフリカに住む先住民『オモロ族』の言語」とした遊び心の産物でした。

当時は芝浦祭の前夜祭として大宮キャンパスで大宮祭が開催されていました。「シバヤ」の初ライブは大宮祭の野外ステージで行われ、演奏する者と観客が交歓して興奮のるつぽにありました。メンバーは出来たばかりの持ち曲の2曲を繰り返すだけ、30分以上演奏しました。今も続くかけ声の「しばや、しばや」は場を持たせるための即興でした。

その後、メンバーは交代していきます。曲を正確に伝える楽譜はなかった、というより、持たないことが当初からの方針でした。時代の変化に応じて原曲を少しずつアレンジ、折々に新曲を加えながら「シバヤ」は続いていきました。1993(平成5)年、第21回芝浦祭あたりで「シバヤ」の表記は「芝屋」に変わったと言われています。

非日常に遊ぶ場として

今では本学の学園祭は例年2回、5月に大宮キャンパスで大宮祭が、11月に豊洲キャンパスで芝浦祭が地域住民も参加して盛大に開催されます。かつての芝浦キャンパスは老朽化した建物に囲まれた狭苦しい所でしたが、芝浦祭での「シバヤ」や「芝屋」はそこで生活する学生たちに「ガス抜き」の場を提供した面もあります。今、豊洲の最新設備のビル、広くて開放的なキャンパスは当時とは大きく異なる環境ですが、そこで開催される芝浦祭でも「芝屋」は健在です。

日常の中に非日常を演出して遊ぶのが祭り。学園祭の祭りのあり方も時代・社会とともに変わっていきませんが、代々引き継がれ、生々流転、30年も続いてきた「芝屋」の曲には、私たちが非日常に誘う不思議な力が宿っているようです。



『芝浦祭史』(2005年11月発行)



「芝屋」演奏風景



「芝浦工業大学校歌 芝浦祭テーマ・ソング」CD
(1995年 芝浦工業大学学務部厚生課発行)

多彩な課外活動

体育系の部とサークル

本学の課外活動は、公認団体である体育会と文化会、準公認団体である体育系サークルと文化系サークルから構成されています。

体育会の歴史で特筆されるのは、かつて硬式野球部やハンドボール部などが活躍し、1960年代を中心にスポーツの強い芝浦工業大学として全国に名をさせたことです。今は活動をしていないが、スキー部も数多くのオリンピック選手を輩出しました(58・59ページ参照)。

新しいところでは芝浦工業大学Formula Racing。レーシングカーを設計・製作する仮想企業という設定で、ものづくりの質を競う学生フォーミュラ大会に参戦しています。アメリカでの大会にも出場するなど活躍しています。

体育系サークルで活躍著しいのはサンタ競技スキー同好会。アルペン競技を中心に他大学の体育会と伍して団体優勝するなどの実績を残しています。

文化系の部とサークル

このところ本学の名を轟かせる活躍をしているのは文化会に所属するTeam Birdman Trial(T.B.T.)。夏に琵琶湖で行われる「鳥人間コンテスト」への出場、長距離飛行の実現を目指し、ユニークな2人乗り機体の設計から製作までを部員自ら手がけ、機体の軽量化と強度を維持するという難題に挑んでいます。これまでの最長飛行は2008年(第32回大会)に記録した3044m(人力プロペラ機ディスタンス部門2位)。念願の初優勝に向けて活動に励んでいます。このように空を飛ぶことに特別な思いを抱いた学生たちは戦前から本学にいました。物珍しい存在で

あったグライダー部で活動した部員たちの空への憧れと、T.B.T.のメンバーの思いには通じるものがありそうです。

工学系ならではの部活動としては、二足歩行ロボットの設計・製作を行う S. R. D. C. (Shibaura Robotics Development Circle)とロボット技術研究サークル。全国大会で好成績を収めています。同じロボット製作系団体でも独自の活動を展開しているのは「ロボット遊交部からくり」。ロボット競技大会へ出場するだけでなく、子供たちにもものづくりの楽しさを伝える工作教室の開催にも力を入れています。

この他、入学式や学位記授与式での校歌斉唱に欠かせないメンネルコールは1953(昭和28)年に発足し、息の長い活動を続けています。アマチュア無線の全国コンテストで数多くの優勝実績がある無線研究部、英語部E.S.S.や軽音楽部なども由緒ある部です。1955(昭和30)年に発足、『芝浦工大新聞』を発行して舌鋒鋭い時事報道を続けた新聞会や、学内外の弁論大会で堂々たる論陣を張った弁論部は今では存在しませんが、工科系の学校のユニークな言論活動として歴史に名を留めます。

文化系サークルには、長い歴史を有する鉄道研究会、漫画研究会、電子計算機研究会などが所属しています。各団体とも学園祭を主な発表の場としており、中でも鉄道研究会の巨大ジオラマは毎年子供たちの人気を集めています。

2011年5月末現在の所属団体数は、文化会21、体育会30、文化系サークル32、体育系サークル28、全学生の約7割が何らかの団体に所属し、学業と両立させながら、キャンパスライフを謳歌しています。



グライダー部(1938年)



「鳥人間コンテスト」に初めて参加したTeam Birdman Trial(1995年)



第三回東都三大合唱連盟定期合同演奏会(1959年、芝浦工大メンネルコールと杉野女子短期大学女声合唱団の合唱)



「ロボット遊交部からくり」開催の工作教室

コラム

しいなひろとし

椎名 博俊

総務部校友課課長 (1975年芝浦工業大学高校・1979年工業化学科卒業) 音楽部前顧問

音楽部は1928年から、メンネルコールは1953年に創立し、他大学との定期合同演奏会(今のジョイントコンサート)、工学祭(今の芝浦祭)で地道に活動していたが、大学の学科が増えるに伴って部員も増え、1961年5月に第1回定期演奏会を開催した。

創立時代から白のブレザーで通してきたが、部員数が安定してきた1969年に新調したスクールカラーである緑のブレザーで卒業式や入学式に出演することにより「緑のブレザーはメンネル」と言われるまでになった。

「校歌を聴くなら芝浦工大」といわれるほど、作詞(1941.10)：北原白秋・作曲(1941.11)：山田耕筰・編曲(1961.8)：福永陽一郎という超一流の本学校歌はメンネルの演奏会と入学式や学位記授与式でしか聴けない。

校史編纂の取り組み

幻の50年史

本学の歴史を記録し、校史として編むことに法人として本格的に取り組んだのは50年史です。『50年史編纂ニュース』(B5判、4頁)はその取り組みを伝える貴重な史料ですが、創刊号は1977(昭和52)年1月31日、第4号が1978年7月10日に出版しましたが、後に続く号はありません。発行は「学校法人芝浦工業大学校史編纂委員会」の手になりました。校史編纂委員には10名が1976年6月1日付で発令されました。実務の主要な担い手だった芝浦工業短期大学の故・内藤英夫助教授(当時)は、後に芝浦工業大学柏高等学校の創設にも尽力しましたが、その創立10周年記念誌『十年の歩み』で次のように述べています。

昭和51年の暮れに近いころだったろうか。(中略)当時、校史編纂委員として「芝浦五十年の歩み」を担当していたのだが、半世紀を経た学園の創立者が誰なのかを知る者は少なかったのである。

創立者 有元史郎のことが知られていなかっただけでなく、本学の歴史そのものに認識が乏しかった時代、校史編纂委員会は暗中模索を強いられました。委員会の試みたことは、史資料の収集と年表の作成、さらに卒業生の座談会や聴き取りの実施、創立者の伝記の入手、公文書の発掘など、多種多様でした。が、校史の制作には10年の歴史に対して1年の時間を要すると言われます。

1977年11月4日、創立50周年の記念式典に間に合わせることはできたのは年表『50年のあゆみ』(B5判、32ページ)でした。残念ながら50年史の発行は叶わず、「幻の50年史」となりました。ただ、その後、60周年、70周年の折に発行された年表は50周年の

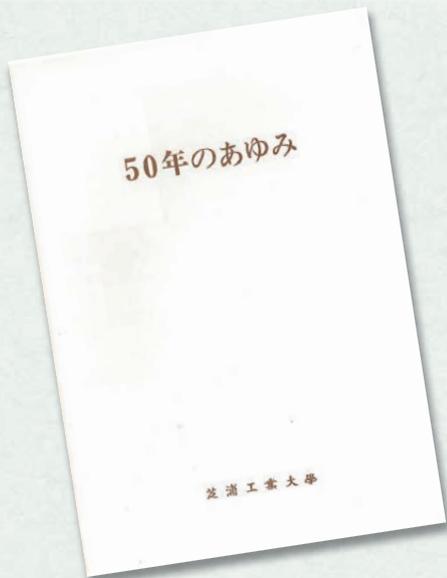
それを継承しました。周年ごとに刊行された記念誌の制作でも拠り所となったのがこの年表でした。

校史編纂をめぐる動き

本学の歴史を記録した印刷物は、本書の資料編の「参考文献」(134ページ)で紹介していますが、多様な立場から作られました。大きな発行部数だっただけに多くの人の目に触れた本を二つ挙げます。一つは、システム工学部の開設を記念して1991(平成3)年に発行された『芝浦工業大学—60年の軌跡—』(A5判、180ページ)。外部ライターが精力的に取材して書いた読み物で、力作です。もう一つは、創立70周年記念誌として1997(平成9)年に発行された『歴史における芝浦工業大学』(A4判、128ページ)。故・中平浩司芝浦工業大学柏中学高等学校校長(当時)が主力となって制作しました。本学の歴史を日本の教育や社会世相のそれと並べて概観したもので、ビジュアルな仕立ての本です。

この二つ以外にも本学の歴史を後代に伝えていこうとした取り組みは決して少なくありません。悔やまれるのは、それぞれの取り組みで収集された歴史的な資料の多くが年月を経て散逸したことです。創立80周年を機に史料の収集を急ぎ、保管体制を整えることが課題となって、2006(平成18)年、広報課に発令された校史編纂担当者を中心にして新たな取り組みが始まりました。

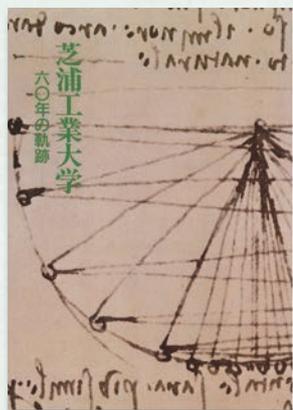
2010(平成22)年春、校史編纂の環境が整備されます。校史編纂準備委員会が発足、併せて豊洲キャンパス内に校史編纂室として史料保管の場所が設けられました。2011年4月には校史編纂委員会が正式に発足して、史料の収集・保管と校史の制作を進めています。



『50年のあゆみ』(年表)



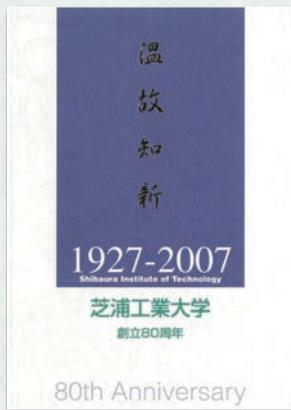
『50年史編纂ニュース』(創刊号~第4号)



『芝浦工業大学—60年の軌跡—』



『歴史における芝浦工業大』



『温故知新 1927-2007』



『芝浦工業大学保存歴史資料目録』

学校法人 芝浦工業大学 《沿革年表》

西暦（和暦）年	月	芝浦工業大学の歩み	社会の出来事
1927（昭和 2）年	5月 9月	東京高等工商学校を設立（創立者有元史郎）、東京府荏原郡大森町（現大田区）に大森校舎開校（商業学科、土木工学科、建築工学科を開設） 芝区（現港区）の旧アメリカンスクール校舎を借用し第二校舎（芝浦校舎）として開校	金融恐慌勃発 地下鉄開通（上野↔浅草間）
1928（昭和 3）年	11月	東京高等工商学校校友会発会式举行（11月4日 後にこの日を本学の創立記念日にしたといわれる）	第1回衆議院議員普通選挙
1929（昭和 4）年	7月	商業学科を廃止し、東京高等工学校に校名変更して電気工学科を増設 一部の教員、学生が離脱し、武蔵高等工学校設立	ニューヨーク株式市場大暴落 世界恐慌始まる
1930（昭和 5）年	4月	東京高等工学校附属普通部を設置（大森校舎で開校）	
1931（昭和 6）年	4月	東京高等工学校に機械工学科増設	満州事変起る
1933（昭和 8）年	3月 4月	東京高等工学校附属普通部を東京高等工学校附属工科学校と校名変更し、芝浦校舎に移転 大森校舎閉鎖	日本、国際連盟脱退
1934（昭和 9）年	4月	東京高等工学校に応用化学科増設	二・二六事件
1939（昭和14）年	2月	東京高等工学校附属工科学校に高等科を増設	第二次世界大戦勃発
1941（昭和16）年			太平洋戦争勃発
1943（昭和18）年	3月 10月 12月	財団法人東京高等工学校を設立 財団法人東京高等工学校を財団法人芝浦学園と名称変更 東京高等工学校を芝浦高等工学校と校名変更	学徒出陣開始
1944（昭和19）年	4月	芝浦工業専門学校および芝浦工業学校を設置	
1945（昭和20）年	5月	東京大空襲により木造3階建て校舎焼失	広島、長崎に原爆投下 第二次世界大戦終戦
1946（昭和21）年	10月	芝浦高等工学校附属工科学校を廃止	日本国憲法公布
1947（昭和22）年	3月 4月	芝浦高等工学校を廃止 芝浦中学校（旧制）を設置	教育基本法・学校教育法公布
1948（昭和23）年	4月	芝浦高等学校（新制）を設置 理事会、千葉工業大学との合併による大学設置案を否決し、単独申請を議決	



西暦（和暦）年	月	芝浦工業大学の歩み	社会の出来事
1949（昭和24）年	3月 4月 4月	芝浦中学校を廃止、芝浦工業学校を廃止 芝浦工業大学設置（機械工学科、土木工学科を開設）入学志願者 32 名 松縄信太、芝浦工業大学初代学長に就任 芝浦高等学校に定時制課程を増設	私立学校法公布
1950（昭和25）年	4月 4月	芝浦工業大学に電気工学科を増設 芝浦工業短期大学設置（機械科、電気科を開設）	
1951（昭和26）年	2月	財団法人芝浦学園を学校法人芝浦学園に組織変更	
1952（昭和27）年	4月	芝浦工業短期大学を芝浦短期大学と校名変更（交通科を増設）	
1953（昭和28）年	7月	学校法人芝浦学園は学校法人鉄道育英会を吸収合併、 東京育英高等学校（定時制）の経営を継承	
1954（昭和29）年	2月 3月 4月 4月 8月	芝浦高等学校の普通科を廃止、芝浦工業大学工業高等学校と校名変更 工業研究所設置 芝浦工業大学に建築学科、工業化学科を増設 東京育英高等学校に全日制課程を増設 東京育英高等学校を芝浦工業大学高等学校と校名変更認可（1954年4月から）	
1955（昭和30）年	3月	芝浦工業専門学校を廃止 第一回工学祭（大学）開催	
1956（昭和31）年	4月	芝浦工業大学工学部二部（5年制）を設置（機械工学科、電気工学科を開設） ハンドボール部、全日本室内総合選手権大会で初優勝	日本、国際連合加盟
1959（昭和34）年	4月	工学部一部に金属工学科、電子工学科を増設	
1960（昭和35）年			安保闘争
1961（昭和36）年		硬式野球部、東都大学野球一部リーグで初優勝	
1962（昭和37）年	4月	学校法人芝浦学園を学校法人芝浦工業大学と名称変更	
1963（昭和38）年	4月	芝浦工業大学大学院工学研究科修士課程を設置（電気工学専攻、金属 工学専攻、工業化学専攻を開設）	
1964（昭和39）年	3月 11月	芝浦短期大学を廃止 私立大学連盟に加盟	東京オリンピック開催
1965（昭和40）年		大型電子計算機（TOSBAC3400）導入	

学校法人 芝浦工業大学 《沿革年表》

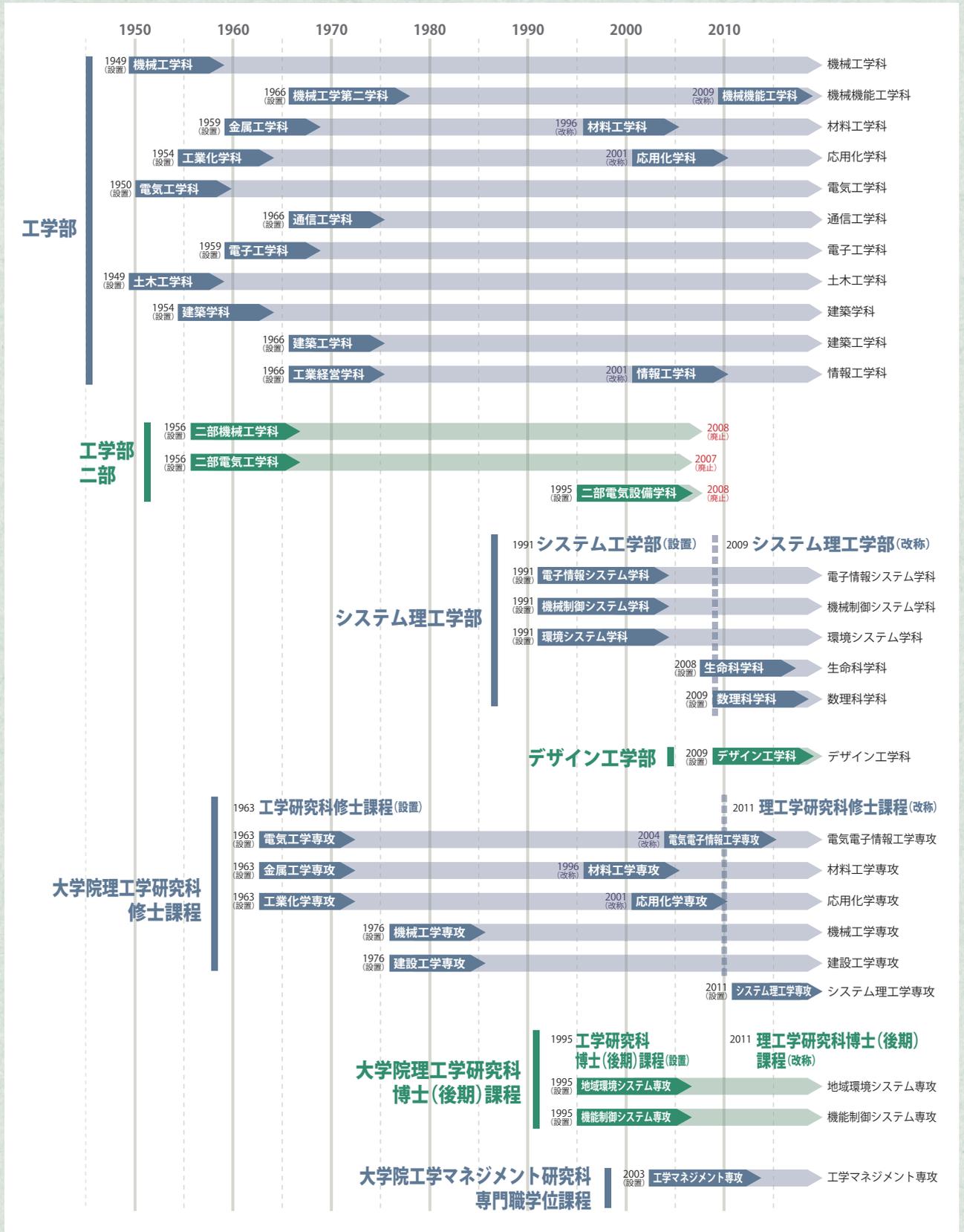
西暦(和暦)年	月	芝浦工業大学の歩み	社会の出来事
1966(昭和41)年	4月	工学部一部に機械工学第二学科、通信工学科、建築工学科、工業経営学科を増設	全国的に大学紛争激化
	4月	埼玉県大宮市(現さいたま市)に大宮キャンパス開校	
	4月	芝浦工業短期大学を設置	
1968(昭和43)年	2月	学生と学長会見、民主化15項目要求を確約	
	9月	教職員組合発足	
1969(昭和44)年	1月	理事代行会議、学生との民主化11項目要求を承認	
1970(昭和45)年	4月	工業研究所を工学研究所に改称 学生の告訴をめぐり教授会と学長(執行部)の対立激化(教授会二分裂へ)	
1971(昭和46)年	3月	芝浦工業大学高等学校定時制課程を廃止	沖縄返還協定締結
	10月	東京地裁、理事長・理事職務代行として3人の弁護士を任命	
1972(昭和47)年		2つの教授会の和解	日中国交回復
1973(昭和48)年	3月	芝浦工業大学工業高等学校定時制課程を廃止	オイルショック
	11月	第一回芝浦祭(大学)開催	
1975(昭和50)年	4月	芝浦工業大学工業高等学校を芝浦工業大学付属第一高等学校と校名変更	ベトナム戦争終結
1976(昭和51)年	4月	大学院工学研究科修士課程に機械工学専攻・建設工学専攻を増設 大学8年ぶりの卒業式(日比谷公会堂)	
1977(昭和52)年		第一回体育祭(大学)開催	
1979(昭和54)年			第一回国公立大学入試共通一次試験実施
1980(昭和55)年	4月	千葉県柏市に芝浦工業大学柏高等学校を設置(開校)	
1982(昭和57)年	4月	芝浦工業大学高等学校を池袋から板橋へ移転し、中学校を開校	
1983(昭和58)年	3月	芝浦工業短期大学を廃止	
1985(昭和60)年	3月	芝浦工業大学付属第一高等学校を廃止 創立者有元史郎記念賞発足	
1987(昭和62)年	7月	第一回校友奨学生(給付)顕彰(卒業生粕谷満辰氏)	
	9月	教育・研究センター設置	
1989(平成元)年			昭和天皇崩御 「平成」と改元



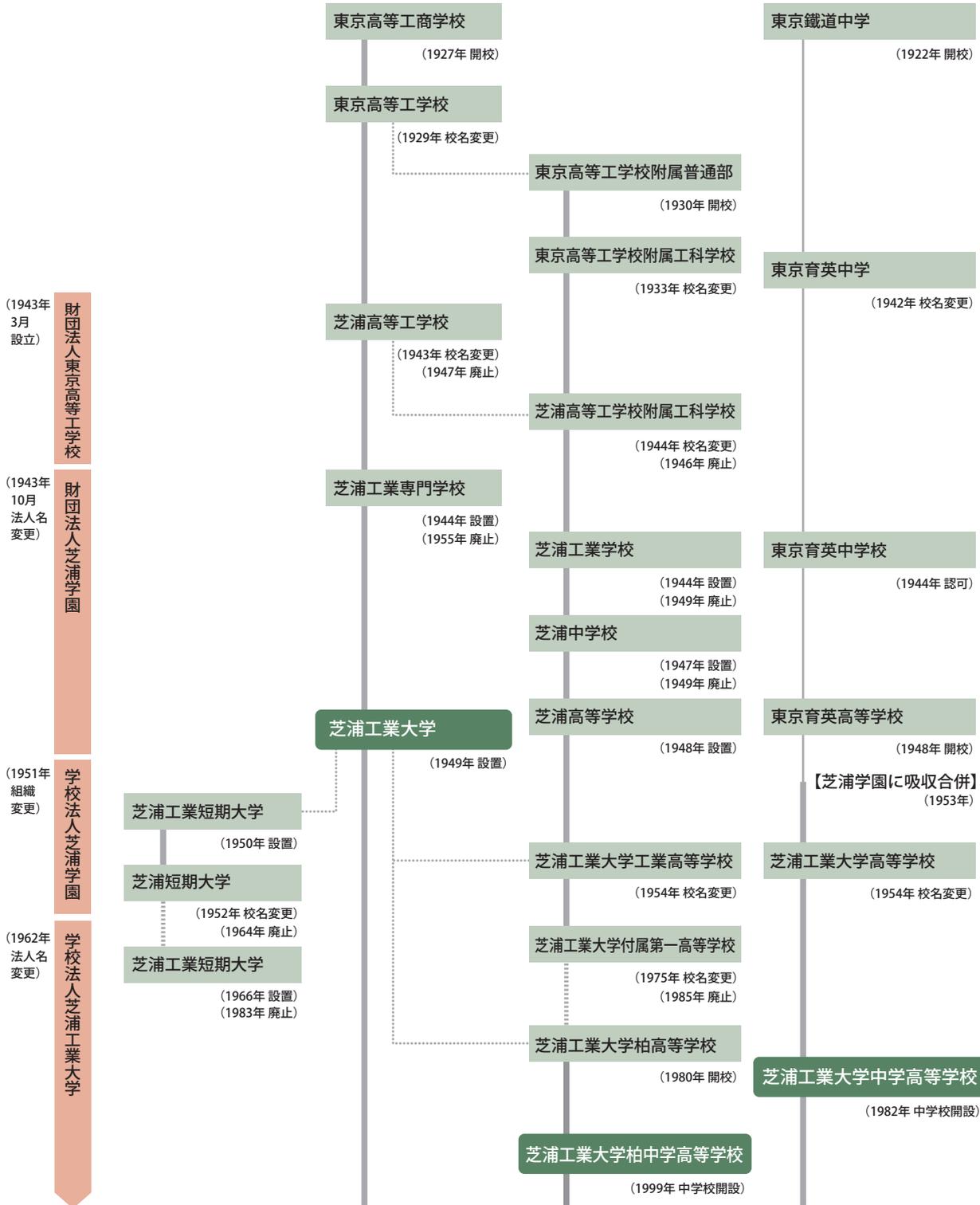
西暦(和暦)年	月	芝浦工業大学の歩み	社会の出来事
1990(平成2)年	4月	芝浦工業大学柏高等学校を男女共学化	第一回大学入試センター試験実施 東西ドイツ統一
1991(平成3)年	4月	芝浦工業大学にシステム工学部を設置(電子情報システム学科、機械制御システム学科、環境システム学科の3学科を開設)	大学設置基準の大綱化 ソビエト連邦消滅
1995(平成7)年	4月 4月	芝浦工業大学大学院工学研究科博士(後期)課程を設置(地域環境システム専攻、機能制御システム専攻の2専攻を開設) 工学部二部に電気設備学科を増設し、合わせて二部の修業年数を5年制から4年制に変更	阪神・淡路大震災
1996(平成8)年	4月	工学部の金属工学科を材料工学科に、大学院の金属工学専攻を材料工学専攻に名称変更	
1997(平成9)年	4月	先端工学研究機構を設置	
1998(平成10)年	6月	株式会社 エスアイテック(学校法人芝浦工業大学 事業法人)設立	
1999(平成11)年	4月	芝浦工業大学柏中学校を開設	
2001(平成13)年	4月	工学部の工業化学科を応用化学科に、工業経営学科を情報工学科に、大学院の工業化学専攻を応用化学専攻に名称変更	アメリカ同時多発テロ発生
2003(平成15)年	4月	大学院工学マネジメント研究科専門職学位課程を設置(工学マネジメント専攻を開設)	イラク戦争勃発
2004(平成16)年	4月	大学院の電気工学専攻を電気電子情報工学専攻に名称変更	
2006(平成18)年	3月 4月	芝浦キャンパスを閉鎖 東京都江東区に豊洲キャンパス開校(本部機能および工学部全学科3・4年生の移転)	
2008(平成20)年	3月 4月	工学部二部を廃止 システム工学部に生命科学科を増設	
2009(平成21)年	4月 4月 4月	芝浦新キャンパスを開校 芝浦工業大学にデザイン工学部を設置(デザイン工学科を開設) システム工学部をシステム理工学部に変更、数理科学科を増設 工学部機械工学第二学科を機械機能工学科に変更	
2011(平成23)年	4月	大学院の工学研究科を理工学研究科に変更してシステム理工学専攻を増設	東日本大震災

技術者教育の系譜

■大学・学部学科および大学院・専攻の変遷



学園系統図



現況

芝浦工業大学

学長 柘植 綾夫

■豊洲キャンパス

〒135-8548
東京都江東区豊洲3-7-5
電話03-5859-7000(代表)

■大宮キャンパス

〒337-8570
埼玉県さいたま市見沼区深作307
電話048-683-2020(代表)

■芝浦キャンパス

〒108-8548
東京都港区芝浦3-9-14
電話03-6722-2600(代表)

■工学部

学部長 水川 真

- 機械工学科
- 機械機能工学科
- 材料工学科
- 応用化学科
- 電気工学科
- 通信工学科
- 電子工学科
- 土木工学科
- 建築学科
- 建築工学科
- 情報工学科

■システム理工学部

学部長 三浦 昌生

- 電子情報システム学科
- 機械制御システム学科
- 環境システム学科
- 生命科学科
- 数理工学科

■デザイン工学部

学部長 篠崎 道彦

- デザイン工学科

■大学院理工学研究科

研究科長 渡部 英二

- 〈修士課程〉
- 電気電子情報工学専攻
- 材料工学専攻
- 応用化学専攻
- 機械工学専攻
- 建設工学専攻
- システム理工学専攻
- 〈博士(後期)課程〉
- 地域環境システム専攻
- 機能制御システム専攻

■大学院工学マネジメント研究科

研究科長 渡辺 孝

- 〈専門職学位課程〉
- 工学マネジメント専攻 (MOT)

■SIT総合研究所・先端工学研究機構

- ユビキタスRTシステム研究センター
- バイオトランスポート研究センター
- ライフサポートテクノロジー研究センター
- 環境微生物生体工学国際交流センター
- ポータブル強磁場マグネットセンター
- フレキシブル微細加工研究センター
- レアメタルバイオリサーチセンター
- ソフトウェア開発技術教育研究センター
- 脳科学ライフテクノロジー寄附研究センター

■学術情報センター

芝浦工業大学中学校

芝浦工業大学高等学校

校長 西山 淳

〒174-8524
東京都板橋区坂下2-2-1
電話03-5994-0721(代表)

芝浦工業大学柏中学校

芝浦工業大学柏高等学校

校長 菅沢 茂

〒277-0033
千葉県柏市増尾700
電話04-7174-3100(代表)

概要 (2011年10月1日現在)

■在籍学生・生徒数

大学	7,296人
大学院	1,036人
専門職大学院	31人
中学校	490人
高等学校	518人
柏中学校	504人
柏高等学校	891人

■教職員数

専任教員	430人
専任職員	173人

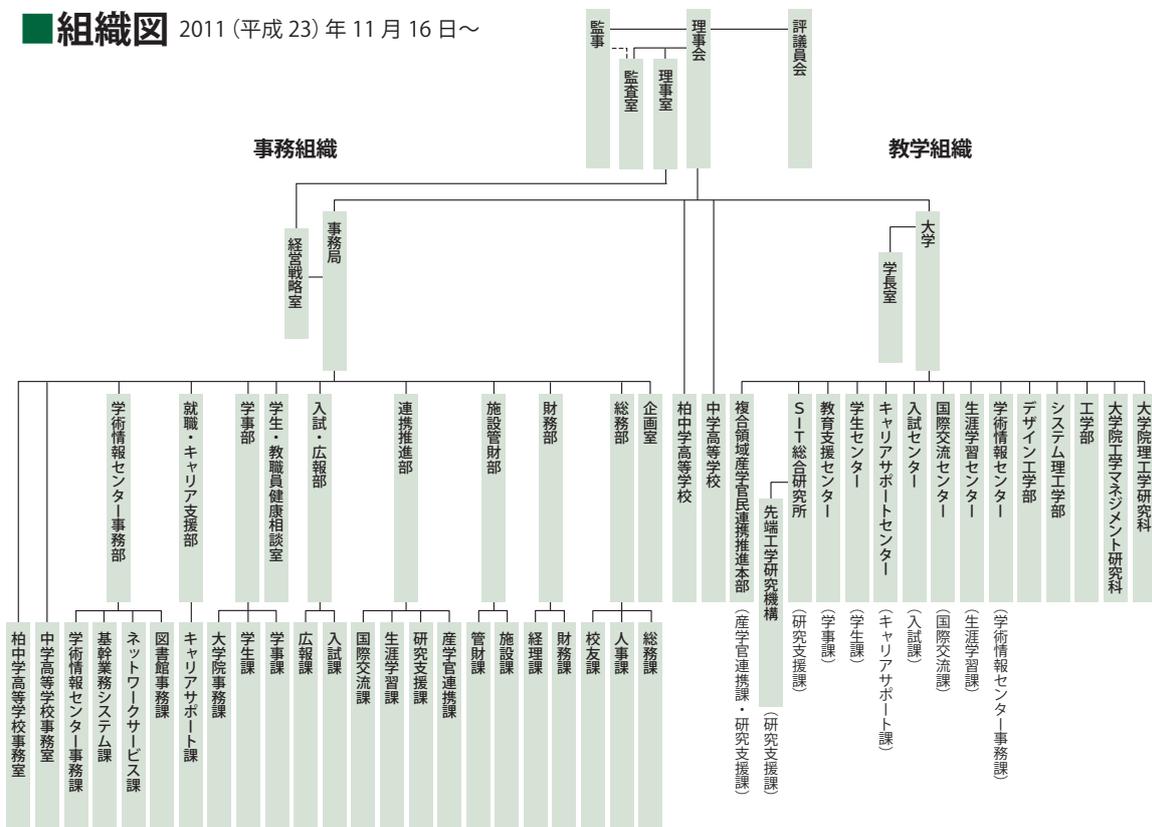
■施設概要

●大学	
〈土地〉	138,513.93m ²
〈建物〉	210,691.25m ²
●中学・高校	
〈土地〉	10,796.68m ²
〈建物〉	10,016.05m ²
●柏中学・高校	
〈土地〉	15,609.25m ²
〈建物〉	43,274.85m ²

■その他の施設

- 葉山セミナーハウス(神奈川県)
- 会津高原高校セミナーハウス(福島県)

■組織図 2011(平成23)年11月16日～



学校法人 芝浦工業大学 《施設史年表》

西暦(和暦)年	月	校地別	出来事	設計者	施工者	備考
1927(昭和2)年	2月	大森校舎	有元史郎、大森の地に東京高等工商学校(芝浦工業大学の前身)を設立(開校は5月)(旧城南女学校校舎の土地及び建物を購入)			旧城南女学校校舎(荏原郡大森町字諏訪1093番地)(現在の戸板女子短大の系列校)
	9月	芝浦校舎	第2校舎として芝浦の地に開設(1921年開校の旧アメリカンスクール校舎を利用)			旧南東校舎の位置 港区芝浦3丁目9番14
1931(昭和6)年	4月	芝浦校舎	東校舎側建物及び地上権を購入			港区芝浦3丁目9番14
1932(昭和7)年	12月	芝浦校舎	北校舎及び講堂建設、玄関塔屋増築(木造)			港区芝浦3丁目9番14
1933(昭和8)年	2月	芝浦校舎	3階建(753坪)の校舎着工			旧・東校舎の位置(3丁目9番14)
	4月	大森校舎	大森校舎閉鎖			
1934(昭和9)年	12月	芝浦校舎	本館側(約800坪)地上権を購入			港区芝浦3丁目9番14
1936(昭和11)年	3月	芝浦校舎	本館北校舎竣工(RC4階建)	建築学科教授 大沢一郎	戸田組	港区芝浦3丁目9番14
1937(昭和12)年	3月	芝浦校舎	本館西校舎竣工(RC4階建)			
1941(昭和16)年	7月	芝浦校舎	校舎中央塔屋の両側に6教室増築工事着工			港区芝浦3丁目9番14
1954(昭和29)年	5月	芝浦寮	芝浦寮建物登記申請(木造2階建、後の工作センター)	建築学科教授 三浦元秀	東海建設	港区芝浦3丁目14番12
1954(昭和29)年	8月	板橋中高	東京育英高等学校を校名変更、芝浦工業大学高等学校(池袋校舎)として開校			豊島区西池袋1丁目11番25
1954(昭和29)年	12月	芝浦校舎	本館北5階部分増築工事竣工(S造)	建築学科教授 三浦元秀	東海建設	港区芝浦3丁目9番14
1957(昭和32)年	2月	芝浦校舎	有元理事・東校舎側地上権を学園に寄付			港区芝浦3丁目9番14
	6月		北校舎竣工(RC4階建+5階S造)	建築学科教授 三浦元秀	西松建設	港区芝浦3丁目9番14
1959(昭和34)年	10月	芝浦校舎	東校舎竣工(RC一部SRC造地下1階地上5階建)	建築学科教授 三浦元秀	戸田組	港区芝浦3丁目9番14
1960(昭和35)年	2月	芝浦寮	土地(工作センターの土地)購入			港区芝浦3丁目14番12
1962(昭和37)年	6月	芝浦校舎	南東・南西校舎竣工(RC造地下1階地上6階建)	建築学科教授 三浦元秀	戸田組	港区芝浦3丁目9番14
1963(昭和38)年	4月	大宮校舎	大宮校舎土地購入			さいたま市見沼区大字深作字溜井原307外
1964(昭和39)年	10月	湯の丸高原寮	湯の丸高原寮落成(土地=国有林)	建築学科 若手教員		長野県東御市新張字湯の丸1270
1965(昭和40)年	8月	保田海岸寮	保田海岸寮開設・土地建物取得(既設建物)			1964(昭和39)年9月30日新築 安房郡鋸南町保田字御吳下424-1
1966(昭和41)年	4月	大宮校舎	大宮校舎開設(2号館・3号館・大会館・体育館・学内寮・円形クラブ棟)	鉄道会館	大林組	さいたま市見沼区大字深作字溜井原307
	7月	芝浦校舎	別館1号館土地購入			港区芝浦3丁目8番15
1967(昭和42)年	8月	保田海岸寮	保田海岸寮土地建物買増(既設建物)			安房郡鋸南町保田字御吳下424-4
	10月	芝浦校舎	別館2号館竣工(賃貸→1977年購入)	建栄工事	建栄工事	港区芝浦3丁目8番17
1968(昭和43)年	3月	大宮校舎	4号館竣工(RC造地下1階地上4階建)	鉄道会館	大林組	さいたま市見沼区大字深作字溜井原307
	12月	芝浦校舎	別館1号館竣工(RC造地下1階地上5階建)	鉄道会館	戸田建設	港区芝浦3丁目8番15
1971(昭和46)年	4月	錦が原運動場	錦が原総合運動場貸借契約締結(101,458.3㎡)			さいたま市西区大字二ツ宮786地内(運動場貸地) さいたま市二ツ宮字岸ノ町113番1、115番1(管理用区分所有1/20)
	11月	大宮校舎	図書館竣工(RC造地下1階地上3階建)	建築工学科 教授沖種郎 十設計連合	鹿島建設	さいたま市見沼区大字深作字溜井原307
1979(昭和54)年	7月	柏高校	土地購入(約4万㎡)			柏市増尾字稲荷下683外

豊洲キャンパス
大宮キャンパス
芝浦キャンパス
柏中学高等学校
中等高等学校(板橋)
葉山セミナーハウス
高杖セミナーハウス

(錦が原運動場含む)
(その他旧施設等)
(旧畜産代教育センター含む)

学校法人 芝浦工業大学 《施設史年表》

西暦(和暦)年	月	校地別	出来事	設計者	施工者	備考
1980(昭和55)年	4月	柏高校	柏高校開校 (管理棟(RC3階建)=3月竣工、教室棟(RC5階建)=12月竣工)	建築学科教授 嶺岸泰夫 建築設計事務所	三井建設	柏市増尾字稻荷下683
	8月	板橋中高	赤羽変電所跡地国鉄と土地売買契約締結			北区志茂1丁目2番58
1981(昭和56)年	3月	板橋中高	土地取得(赤羽土地を板橋坂下と交換 約1万㎡)			板橋区坂下2-22-1,2-23-7
	3月	柏高校	体育館(RC造 屋根鉄骨2階建)・ 武道館(小体育館)(S造平屋建)竣工	建築学科教授 嶺岸泰夫 建築設計事務所	三井建設	柏市増尾字稻荷下683
1982(昭和57)年	4月	板橋中高	高校を池袋から板橋に移転し、中学校を併設開校 校舎棟及び体育館竣工	建築学科教授 三井所清典+ アルセッド 建築研究所	大成建設	板橋区坂下2丁目22番1, 2丁目23番7
	5月	芝浦校舎	本館側土地購入(2,590㎡) 東校舎側底地権購入(3,191㎡)			港区芝浦3丁目9番14
1984(昭和59)年	11月	板橋中高	プール棟(エアドーム屋根)竣工(RC造3階建)	建築学科教授 三井所清典+ アルセッド 建築研究所	大成建設	板橋区坂下2丁目23番7
	11月	柏中高	プール・更衣室棟竣工(RC造平屋建)	建築学科教授 嶺岸泰夫+建築 設計事務所	三井建設	柏市増尾字稻荷下683
	11月	芝浦校舎	東校舎屋上にテニスコートオープン	戸田建設	戸田建設	港区芝浦3丁目9番14
1985(昭和60)年	3月	大宮学内寮	大宮校舎学内寮解体			さいたま市見沼区大字深作字溜井原307
	6月	芝浦寮	芝浦寮解体		戸田建設	港区芝浦3丁目14番12
	4月	大宮校舎	食堂棟竣工(S造平屋建)	建築学科教授 橋本邦雄+建築 計画研究所	安藤建設	さいたま市見沼区大字深作字溜井原 307
	4月	柏中高	クラブハウス竣工(軽量S造2階建)	建築学科教授 嶺岸泰夫 建築設計事務所	三井建設	柏市増尾字稻荷下683
	11月	大宮校舎	第二体育館竣工(体育館増築を含む) (SRCおよびRC2階建)	建築工学科教授 藤井博巳+藤井 建築研究所	大林組	さいたま市見沼区大字深作字溜井原 307
1987(昭和62)年	3月	工作センター	工作センター(芝浦寮跡地)竣工(S造2階建)	戸田建設	戸田建設	港区芝浦3丁目14番12
	4月	高杖セミナー ハウス	会津高原高杖研修センター土地購入(5,300㎡) (1992年に別の土地と交換)			福島県南会津郡磐岩村大字八総字高 杖原甲1098番579
	5月	柏高校	弓道場竣工(S造平屋建)	三井建設	三井建設	柏市増尾字稻荷下683
1988(昭和63)年	6月	工作センター	工作センター(芝浦寮跡地)土地建物売却			港区芝浦3丁目14番12
1989(平成元年)	5月	大宮校舎	水防災実験棟竣工(軽量S造平屋建)	郡リース	大林組	さいたま市見沼区大字深作字溜井原 307
1990(平成2)年	3月	柏高校	家庭科教室棟竣工(軽量S造平屋建)	プレハブ	三井建設	柏市増尾字稻荷下683
	10月	大宮校舎	齋藤記念館竣工(RC造2階建)	建築工学科 教授相田武文+ 設計研究所	大林組	さいたま市見沼区大字深作字溜井原 307
1991(平成3)年	2月	大宮校舎	5号館(システム工学部棟)竣工 (RC造5階建一部地下1階)	松田平田坂本 設計事務所	大林組	さいたま市見沼区大字深作字溜井原 307
	2月		カレッジストア(食堂棟増築)竣工(S造平屋建)	建築学科教授 橋本邦雄+建築 計画研究所	安藤建設	さいたま市見沼区大字深作字溜井原 307
	3月	板橋中高	クラブハウス棟(弓道場含む)竣工(RC造2階建)	建築学科教授 三井所清典+ アルセッド建 築研究所	大成建設	板橋区坂下2丁目23番7
1992(平成4)年	4月	大宮校舎	第2学生クラブハウス竣工 (S造2階建一部地下1階)	建築学科教授 小柳津醇一+ 建築学科(卒) 宮地巖主宰 アーキドラマ	安藤建設	さいたま市見沼区大字深作字溜井原 307
	11月	高杖セミナー ハウス	会津高原高杖セミナーハウス用地交換および 購入(交換買増 合計7,404㎡)	会津高原観 光開発		福島県南会津郡南会津町高杖原740

豊洲キャンパス

大宮キャンパス

芝浦キャンパス

柏中学高等学校

中学高等学校(板橋)

葉山セミナーハウス

高杖セミナーハウス

(錦が原運動場含む) (その他旧施設等)

(旧猪苗代教育センター含む)



西暦(和暦)年	月	校地別	出来事	設計者	施工者	備考
1995(平成7)年	7月	葉山セミナーハウス	葉山セミナーハウス開設 (土地354.35㎡、建物S造3階建)	建築学科(卒) 余川辰哉 アルボス一級 建築事務所	山岸建設	三浦郡葉山町堀内字五ッ合162-1
1998(平成10)年	1月	中高猪苗代	中高・猪苗代教育センター (研修・宿泊棟・温泉棟)竣工(4月開校)	一矢建設	一矢建設	福島県耶麻郡猪苗代町字林崎463
	3月	大宮校舎	先端工学研究機構棟竣工(S造3階建)	松田平田設計事務所	大林組	さいたま市見沼区大字深作字溜井原307
	9月	高杖セミナーハウス	会津高原高杖セミナーハウス新築竣工 (RC造地上6階地下1階建)	山下設計	前田建設工業	福島県南会津郡南会津町高杖原740
1999(平成11)年	4月	柏中高	柏中学校開校 教室棟・多目的ホール棟竣工	佐藤総合計画	三井住友建設	柏市増尾字稲荷下683
	10月	大宮校舎	第3学生クラブハウス竣工(S造2階建)	建築学科(卒) 設楽壮一 クリップ建築事務所	浅沼組	さいたま市見沼区大字深作字新田198番1
2000(平成12)年	11月	大宮校舎	第1学生クラブハウス竣工(RC造3階建)	建築学科(卒) 五十川勝 MI都市設計	飛鳥建設	さいたま市見沼区大字深作字溜井原307
2001(平成13)年	7月	大宮校舎	5号館(旧システム工学部棟) (情報系教室棟として)増築工事竣工(RC造5階建)	松田平田設計事務所	大林組	さいたま市見沼区大字深作字溜井原307
2002(平成14)年	3月	柏中高	ホール棟(高校新教室棟)竣工(RC造5階建)	三井住友建設	三井住友建設	柏市増尾字稲荷下683
	4月	住友三田ビル	MOTキャンパス開設 4階・11階賃貸契約 (2008(平成20)年4月25日現状回復)		住友不動産	港区芝5丁目37番8
2003(平成15)年	3月	豊洲キャンパス	豊洲キャンパス土地購入(30,000㎡)			江東区豊洲3丁目1番35
	2月	保田海岸寮	二分筆して土地売却(2000年12月解体)		相原工務店	安房郡鑑南町保田字御吳下424-5(分筆)
	5月					安房郡鑑南町保田字御吳下424-1(分筆)
2004(平成16)年	4月	キャンパスイノベーションセンター	国立大学財務経営センター(東京工業大学3階) MOT研修センターとして一部賃貸契約			港区芝浦3丁目3番6
2006(平成18)年	4月	豊洲キャンパス	豊洲キャンパス開設(2005年9月竣工) 交流棟・教室棟・研究棟(S造地上14階地下1階建)	日建設計+ NTTファシリティーズJV	大成建設 三井住友建設 戸田建設	江東区豊洲3丁目7番5
		板橋中高	会議室棟利用開始(2006年2月竣工)(S造平屋建)	大成建設	大成建設	板橋区坂下2丁目23番7
2008(平成20)年	3月	中高猪苗代	中高・猪苗代教育センター 土地建物売却 (2008年3月18日 譲渡契約締結)			福島県耶麻郡猪苗代町字林崎463
	6月	大宮キャンパス	6号館(生命科学実験棟)竣工(RC造2階建)	清水建設	清水建設	さいたま市見沼区大字深作字溜井原307
2009(平成21)年	3月	湯の丸高原寮	高原寮閉鎖(3月31日) (建物2009(平成21)年6月17日解体撤去完了)			5月10日閉寮式 長野県東御市新張字湯の丸1270
	4月	新芝浦キャンパス	新芝浦キャンパス開設(2009年1月竣工) (SRC造地上8階地下1階建)	戸田建設	戸田建設	港区芝浦3丁目1番6
	10月	柏中高	交流館竣工(S造平屋建)	三井住友建設	三井住友建設	柏市増尾字稲荷下683
2010(平成22)年	1月	大宮キャンパス	弓道場・アーチェリー場竣工(S造平屋建)	ミズノ	ミズノ	さいたま市見沼区大字深作字原794-1
2011(平成23)年	1月	大宮キャンパス	新2号館竣工 (S造一部RC造地上4階地下1階建)	日本設計	清水建設	さいたま市見沼区大字深作字溜井原307
			5号館(旧システム工学部棟、数理学科棟として)増築工事竣工(RC造地上5建)	松田平田設計事務所	竹中工務店	さいたま市見沼区大字深作字溜井原307
	10月	豊洲キャンパス	SITアスレチックジム(交流棟1階)開設	戸田建設	戸田建設	江東区豊洲3丁目7番5
	11月	豊洲キャンパス	SIT総合研究所開設 佃イノベーションスクエア(リバーシティM-Square7階)			
板橋中高		社会科研究室竣工(S造平屋建)	アルセッド建築研究所	大成建設	板橋区坂下2丁目23番7	

注-1: 原則として確認床面積を表すが、その記録が残っていないものは登記面積を表す
注-2: 原則として地名地番・住居表示は2010年10月28日付とした
注-3: 豊洲キャンパス開設時より校舎から「キャンパス」に表記替えを行なった
注-4: 新築とは更地に建物を建築する事を指し、増築とはその建物の増床する事とした
注-5: 中学高等学校(板橋)の前身は東京鉄道中学。1922(大正11)年4月、東京府麹町区永楽町に開校(旧国鉄所有)
1923(大正12)年9月、関東大震災により校舎が消失したため、東京府荏原郡南品川の東京鉄道教習所内に移転
1924(大正13)年6月、東京府北豊島郡西巢鴨町字池袋の東京鉄道教習所内に移転
1953(昭和28)年7月、東京育英高等学校(変更後の校名)は学校法人芝浦学園に吸収合併された

(施設課・高田 潤 原案作成)

豊洲キャンパス 大宮キャンパス 芝浦キャンパス 柏中学高等学校 中学高等学校(板橋) 葉山セミナーハウス 高杖セミナーハウス
(豊イノベーションスクエア含む) (錦が原運動場含む) (その他旧施設等) (旧猪苗代教育センター含む)

学校別卒業生数(年度別)

東京高等工商学校

卒業年度	卒業生数(名)
1929年	330
計	330

東京高等工学校

卒業年度	卒業生数(名)
1929年	72
1930年	54
1931年	202
1932年	282
1933年	359
1934年	308
1935年	407
1936年	96
1937年	350
1938年	360
1939年	417
1940年	641
1941年	946
1942年	637
1943年	377
計	5,508

附属普通部

卒業年度	卒業生数(名)
1931年	76
計	76

附属工科学校

卒業年度	卒業生数(名)
1933年	38
1934年	83
1935年	89
1936年	144
1937年	337
1938年	628
1939年	900
1940年	1,172
1941年	1,651
1942年	1,721
1943年	1,721
計	8,484

芝浦高等工学校

卒業年度	卒業生数(名)
1943年	337
1944年	1,095
1945年	787
1946年	114
1947年	276
計	2,609

附属工科学校

卒業年度	卒業生数(名)
1944年	1,865
1945年	1,434
1946年	441
計	3,740

芝浦工業専門学校

卒業年度	卒業生数(名)
1947年	287
1948年	397
1949年	302
1950年	356
1951年	335
1952年	140
1953年	155
1954年	64
1955年	58
計	2,094

芝浦短期大学

卒業年度	卒業生数(名)
1952年	55
1953年	60
1954年	147
1955年	164
1956年	161
1957年	132
1958年	13
1959年	14
1960年	—
1961年	28
1962年	39
1963年	89
計	902

芝浦工業短期大学

卒業年度	卒業生数(名)
1968年	100
1969年	85
1970年	100
1971年	102
1972年	94
1973年	128
1974年	157
1975年	127
1976年	136
1977年	143
計	1,172

芝浦工業大学

卒業年度	卒業生数(名)
1953年	85
1954年	102
1955年	191
1956年	284
1957年	445
1958年	480
1959年	532
1960年	696
1961年	728
1962年	1,080
1963年	1,192
1964年	1,296
1965年	1,336
1966年	1,307
1967年	1,175
1968年	1,344
1969年	1,531
1970年	1,447
1971年	1,502
1972年	1,183
1973年	1,151
1974年	1,582
1975年	1,643
1976年	1,515
1977年	1,298
1978年	1,261
1979年	1,269
1980年	1,260
1981年	1,258
1982年	1,132
1983年	1,214
1984年	1,252
1985年	1,398
1986年	1,337
1987年	1,216
1988年	1,301
1989年	1,388
1990年	1,421
1991年	1,204
1992年	1,230
1993年	1,167
1994年	1,372
1995年	1,609
1996年	1,494
1997年	1,458
1998年	1,661
1999年	1,607
2000年	1,629
2001年	1,613
2002年	1,553
2003年	1,622
2004年	1,486
2005年	1,479
2006年	1,498
2007年	1,386
2008年	1,530
2009年	1,357
2010年	1,455
計	71,242

大学院工学研究科

卒業年度	卒業生数(名)
1964年	5
1965年	9
1966年	10
1967年	10
1968年	8
1969年	11
1970年	8
1971年	6
1972年	15
1973年	14
1974年	15
1975年	11
1976年	16
1977年	35
1978年	46
1979年	27
1980年	41
1981年	30
1982年	41
1983年	42
1984年	31
1985年	52
1986年	65
1987年	93
1988年	96
1989年	118
1990年	121
1991年	134
1992年	156
1993年	144
1994年	157
1995年	177
1996年	245
1997年	222
1998年	223
1999年	251
2000年	272
2001年	287
2002年	277
2003年	316
2004年	359
2005年	363
2006年	339
2007年	322
2008年	343
2009年	326
2010年	352
計	6,241

大学院工学 マネジメント研究科

卒業年度	卒業生数(名)
2004年	41
2005年	24
2006年	23
2007年	20
2008年	14
2009年	23
2010年	7
計	152

芝浦工業学校

卒業年度	卒業者数(名)
1947年	171
1949年	333
計	504

芝浦中学校

卒業年度	卒業者数(名)
1949年	308
計	308

芝浦高等学校

卒業年度	卒業者数(名)
1950年	219
1951年	253
1952年	286
1953年	214
計	972

芝浦工業大学 工業高等学校

卒業年度	卒業者数(名)
1954年	302
1955年	306
1956年	323
1957年	332
1958年	331
1959年	396
1960年	517
1961年	459
1962年	528
1963年	481
1964年	380
1965年	503
1966年	472
1967年	465
1968年	425
1969年	337
1970年	235
1971年	287
1972年	237
1973年	265
1974年	291
1975年	280
計	8,152

芝浦工業大学 付属第一高等学校

卒業年度	卒業者数(名)
1976年	296
1977年	196
1978年	223
1979年	253
1980年	261
1981年	200
1982年	205
1983年	150
1984年	96
計	1,880

芝浦工業大学 柏高等学校

卒業年度	卒業者数(名)
1983年	368
1984年	285
1985年	258
1986年	377
1987年	285
1988年	287
1989年	303
1990年	322
1991年	328
1992年	298
1993年	276
1994年	313
1995年	288
1996年	335
1997年	270
1998年	305
1999年	263
2000年	280
2001年	254
2002年	257
2003年	301
2004年	288
2005年	278
2006年	279
2007年	272
2008年	287
2009年	297
2010年	278
計	8,232

芝浦工業大学 柏中学校

卒業年度	卒業者数(名)
2001年	162
2002年	162
2003年	163
2004年	158
2005年	161
2006年	178
2007年	165
2008年	163
2009年	163
2010年	165
計	1,640

東京鐵道中学

卒業年度	卒業者数(名)
1927年	26
1928年	27
1929年	38
1930年	57
1931年	55
1932年	72
1933年	60
1934年	57
1935年	68
1936年	65
1937年	74
1938年	58
1939年	68
1940年	72
1941年	82
1942年	81
計	960

東京育英中学

卒業年度	卒業者数(名)
1943年	76
1944年	93
計	169

東京育英中学校

卒業年度	卒業者数(名)
1945年	61
1946年	117
1947年	21
1948年	50
計	249

東京育英高等学校

卒業年度	卒業者数(名)
1949年	23
1950年	86
1951年	92
1952年	91
1953年	98
1954年	84
計	474

芝浦工業大学 高等学校

卒業年度	卒業者数(名)
1955年	99
1956年	131
1957年	98
1958年	137
1959年	144
1960年	178
1961年	190
1962年	180
1963年	179
1964年	196
1965年	182
1966年	221
1967年	216
1968年	214
1969年	206
1970年	230
1971年	191
1972年	169
1973年	188
1974年	206
1975年	194
1976年	221
1977年	193
1978年	178
1979年	209
1980年	188
1981年	195
1982年	203
1983年	209
1984年	233
1985年	218
1986年	228
1987年	265
1988年	249
1989年	259
1990年	252
1991年	270
1992年	254
1993年	241
1994年	202
1995年	208
1996年	198
1997年	171
1998年	170
1999年	182
2000年	177
2001年	177
2002年	177
2003年	167
2004年	167
2005年	183
2006年	181
2007年	178
2008年	163
2009年	181
2010年	188
計	10,884

芝浦工業大学 中学校

卒業年度	卒業者数(名)
1985年	131
1986年	130
1987年	139
1988年	138
1989年	140
1990年	135
1991年	138
1992年	143
1993年	138
1994年	147
1995年	136
1996年	136
1997年	177
1998年	167
1999年	172
2000年	182
2001年	162
2002年	163
2003年	176
2004年	168
2005年	171
2006年	180
2007年	192
2008年	165
2009年	166
2010年	171
計	4,063

大学院(専攻別)・大学(学部学科別)卒業生数(年別)

年	大学院											小計	機械工学科	機械工学第二学科	金属工学科	材料工学科	工業化学科
	電気工学専攻	電気電子情報工学専攻	金属工学専攻	材料工学専攻	工業化学専攻	応用化学専攻	機械工学専攻	建設工学専攻	地域環境システム専攻	機能制御システム専攻	工学マネジメント専攻						
1953年													10				
1954年													10				
1955年													19				
1956年													50				
1957年													67				
1958年													80				56
1959年													101				48
1960年													107				53
1961年													144				79
1962年													140				80
1963年													138		53		109
1964年													109	73	97		105
1965年	2		2		1							5	68	129	99		109
1966年	5		3		1							9	107	118	100		94
1967年	8		1		1							10	116	120	111		98
1968年	5		3		2							10	107	104	65		82
1969年	5		0		3							8	100	127	99		113
1970年	4		2		5							11	134	115	85		87
1971年	3		3		2							8	210	123	84		94
1972年	1		3		2							6	183	96	81		100
1973年	5		4		6							15	80	94	81		81
1974年	5		6		3							14	92	87	87		87
1975年	6		4		5							15	113	229	97		117
1976年	5		1		5							11	122	197	115		136
1977年	7		3		6							16	129	125	99		114
1978年	7		2		11		5	10				35	96	104	88		125
1979年	12		6		10		5	13				46	125	95	104		113
1980年	9		2		2		3	11				27	82	116	90		68
1981年	17		3		4		4	13				41	105	105	83		88
1982年	15		2		0		1	12				30	97	78	111		89
1983年	18		2		5		6	10				41	82	77	65		90
1984年	17		3		5		4	13				42	100	97	83		83
1985年	16		1		1		5	8				31	127	92	76		92
1986年	14		2		5		13	18				52	126	103	98		158
1987年	30		1		5		5	24				65	112	145	106		99
1988年	31		1		7		19	35				93	86	93	105		104
1989年	42		5		2		18	29				96	107	115	83		95
1990年	40		11		14		16	37				118	106	111	105		125
1991年	39		8		7		24	43				121	108	110	107		116
1992年	29		14		10		28	53				134	84	102	108		109
1993年	38		17		13		31	57				156	114	99	63		94
1994年	46		15		7		29	47				144	89	109	94		93
1995年	46		11		8		47	45				157	84	78	100		69
1996年	47		21		14		45	50				177	129	117	95		94
1997年	61		31		11		72	67	2	1		245	90	120	100		94
1998年	53			28	6		65	60	8	2		222	92	93	105		90
1999年	54			24	4		71	65	4	1		223	101	106	94		93
2000年	66			23	11		60	79	7	5		251	99	95	6	99	105
2001年	65			33	16		80	70	5	2		271	105	106		99	123
2002年	73			28	24		79	69	8	6		287	124	101		102	95
2003年	76			24		11	73	83	6	4		277	102	112		97	101
2004年	84			31		19	87	88	5	2		316	88	106		111	117
2005年	94			36		19	95	106	5	6	41	402	84	104		100	6
2006年	3	106		33		26	91	98	3	4	24	388	105	101		102	1
2007年	1	113		29		19	85	81	6	3	23	360	116	88		130	
2008年		112		28		20	83	67	6	11	20	347	112	107		82	
2009年		117		45		15	65	94	12	6	15	369	123	109		116	
2010年		116		28		26	67	90	9	8	23	367	97	119		97	
計	1,204	564	193	390	244	155	1,381	1,645	86	61	146	6,069	5,933	5,150	3,422	1,135	4,571

工学部（一部）										工学部（二部）				システム工学部				合計
応用 化学科	電気 工学科	通信 工学科	電子 工学科	土木 工学科	建築学科	建築 工学科	工業 経営学科	情報 工学科	小計	機械 工学科	電気 工学科	電気 設備学科	小計	電子情報 システム 学科	機械制御 システム 学科	環境 システム 学科	小計	合計
				12					22									22
	37			7					54									54
	53			17					89									89
	79			29					158									158
	104			77					248									248
	126			76	75				413									413
	139			77	70				435									435
	156			62	64				442	16	19		35					477
	174			63	86				546	61	34		95					641
	181			85	87				573	55	41		96					669
	220		81	92	184				877	87	74		161					1,038
	254		111	103	206				1,058	76	58		134					1,192
	254		132	110	157				1,058	117	76		193					1,256
	246		111	122	130				1,028	149	108		257					1,294
	232		122	122	171				1,092	92	75		167					1,269
	112	92	111	121	155				949	78	97		175					1,134
	121	121	114	130	176				1,101	116	84		200					1,309
	112	107	115	120	221	93	160		1,349	108	74		182					1,542
	88	104	104	106	202	116	108		1,339	69	39		108					1,455
	94	89	106	108	224	108	104		1,293	136	73		209					1,508
	78	96	97	101	88	100	69		965	138	80		218					1,198
	79	95	91	94	111	98	90		1,011	79	61		140					1,165
	110	102	138	169	125	128	119		1,447	64	71		135					1,597
	149	124	111	114	131	140	123		1,462	97	84		181					1,654
	123	122	123	132	120	106	122		1,315	113	87		200					1,531
	81	90	71	93	111	109	96		1,064	114	121		235					1,334
	92	116	115	90	96	104	97		1,147	69	45		114					1,307
	115	102	90	127	98	115	119		1,122	76	71		147					1,296
	106	132	106	111	103	107	94		1,140	69	51		120					1,301
	112	109	108	96	104	122	115		1,141	60	57		117					1,288
	100	99	104	97	84	108	101		1,007	58	67		125					1,173
	98	97	105	111	100	132	119		1,125	46	43		89					1,256
	104	123	145	108	112	103	86		1,168	47	37		84					1,283
	139	123	126	92	112	108	140		1,325	35	38		73					1,450
	114	117	100	113	125	94	114		1,239	41	57		98					1,402
	89	100	95	106	92	125	97		1,092	59	65		124					1,309
	91	109	129	93	115	86	123		1,146	84	71		155					1,397
	127	123	94	82	109	123	113		1,218	88	82		170					1,506
	130	115	126	106	109	118	121		1,266	77	78		155					1,542
	79	79	96	89	103	95	82		1,026	94	84		178					1,338
	97	107	100	87	99	105	91		1,056	85	89		174					1,386
	77	96	77	82	103	106	85		1,011	80	76		156					1,311
	103	101	75	108	81	105	77		981	83	62		145	79	91	76	246	1,529
	110	94	138	104	135	117	122		1,255	86	79		165	66	59	64	189	1,786
	100	93	106	99	114	91	100		1,107	90	72		162	66	77	82	225	1,739
	107	93	97	105	107	109	101		1,099	92	78		170	64	60	65	189	1,680
	104	107	102	105	106	105	108		1,131	124	125	69	318	68	73	71	212	1,884
	101	119	102	117	105	117	106		1,171	76	69	80	225	69	64	78	211	1,858
	100	116	107	112	106	113	112		1,199	86	80	65	231	61	64	74	199	1,900
	127	103	104	107	105	105	102		1,175	78	69	77	224	71	74	69	214	1,900
	107	107	100	90	102	112	117		1,147	73	68	60	201	62	71	72	205	1,830
	100	105	98	101	114	110	91		1,141	72	52	34	158	152	101	70	323	1,938
84	104	115	106	99	97	104	5	106	1,114	56	39	33	128	113	54	77	244	1,888
86	92	104	94	96	108	101	1	86	1,077	78	40	19	137	125	72	68	265	1,867
98	91	91	125	112	110	139		125	1,225	8	7	19	34	98	72	69	239	1,858
87	98	98	94	90	112	127		115	1,122	2		2	4	127	72	61	260	1,733
102	103	116	95	107	142	125		111	1,249					123	79	87	289	1,907
95	99	80	82	95	106	118		110	1,098					113	77	82	272	1,737
552	6,718	4,531	5,079	5,579	6,308	4,547	3,730	653	57,908	3,837	3,207	458	7,502	1,457	1,160	1,165	3,782	75,261

歴代理事長



岸本綾夫



喜多藤吉



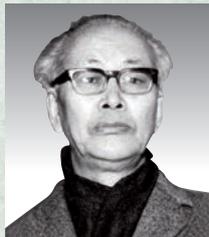
手島勝二



松縄信太



服部定一



藤田 栄



橋本富寿



新村義宏



三浦元秀



古田晋吾



吉田峰夫



梅村 魁



吉田秀雄



法貴四郎



石川洋美



藤田幸男



長友隆男



小暮剛一

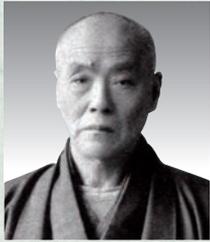


五十嵐久也

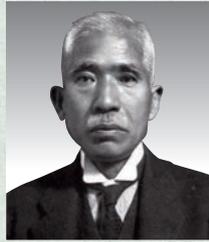
岸本綾夫 理事会会長 (1938年 9月21日～1943年 4月14日)
 〃 理 事 長 (1943年 4月15日～1944年 2月19日)
 喜多藤吉 〃 (1944年 2月24日～1945年 11月)
 手島勝二 〃 (1945年 12月 8日～1947年 5月25日)
 松縄信太 〃 (1947年 5月26日～1966年 2月28日)
 服部定一 〃 (1966年 3月 1日～1968年 11月 6日)
 藤田 栄 理事長代行 (1969年 1月 4日～1970年 2月13日)
 橋本富寿 理 事 長 (1970年 2月14日～1971年 10月15日)
 新村義宏 理事長職務代行 (1971年 10月16日～1972年 10月25日)
 三浦元秀 理 事 長 (1972年 10月26日～1975年 10月22日)
 〃 〃 (1975年 10月23日～1978年 3月20日)
 古田晋吾 理事長代行 (1978年 3月21日～1978年 10月25日)
 〃 理 事 長 (1978年 10月26日～1982年 7月24日)

吉田峰夫 理事長代行 (1982年 7月25日～1982年 11月30日)
 梅村 魁 理 事 長 (1982年 12月 1日～1985年 6月26日)
 〃 〃 (1985年 6月27日～1988年 3月31日)
 吉田秀雄 理事長代行 (1988年 4月 1日～1988年 6月26日)
 法貴四郎 理 事 長 (1988年 6月27日～1991年 7月23日)
 石川洋美 〃 (1991年 7月24日～1994年 6月26日)
 〃 〃 (1994年 6月27日～1997年 6月26日)
 〃 〃 (1997年 6月27日～2000年 6月26日)
 〃 〃 (2000年 6月27日～2003年 6月26日)
 藤田幸男 〃 (2003年 6月27日～2006年 6月26日)
 長友隆男 〃 (2006年 6月27日～2009年 6月26日)
 小暮剛一 〃 (2009年 6月27日～2010年 6月16日)
 五十嵐久也 〃 (2010年 6月17日～ 現在)

歴代校長・学長



瀧本誠一



名井九介



有元史郎



岸本綾夫



松縄信太



服部定一



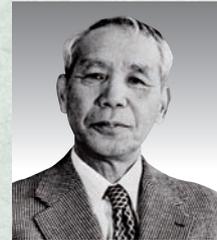
大北忠男



鳥山武雄



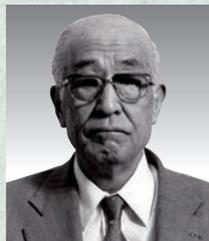
沖種郎



藤井正一



宮地杭一



柳井久義



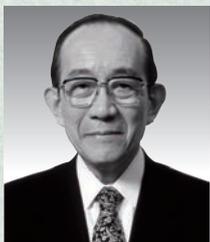
大本修



小口泰平



江崎玲於奈



平田賢



柘植綾夫

瀧本誠一 校長 (1927年 5月 1日 ~ 1929年 6月 7日)
名井九介 校長 (1929年 6月 8日 ~ 1936年 3月31日)
有元史郎 校長 (1936年 4月 1日 ~ 1937年 4月16日)
岸本綾夫 総長 (1937年 4月17日 ~ 1938年 5月31日)
 “ 校長代理 (1938年 6月 1日 ~ 1938年 6月13日)
 “ 校長 (1938年 6月14日 ~ 1943年 1月17日)
名井九介 校長 (1943年 1月18日 ~ 1943年 5月26日)
 “ 学園会長 (1943年 5月27日 ~ 1943年 7月22日)
岸本綾夫 校長 (1943年 7月23日 ~ 1943年 10月31日)
 “ 学園会長 (1943年 11月 1日 ~ 1944年 2月18日)
松縄信太 校長 (1944年 2月19日 ~ 1944年 3月13日)
岸本綾夫 名誉校長 (1944年 3月14日 ~ 1946年 10月15日)
松縄信太 校長 (1946年 10月16日 ~ 1949年 3月31日)
 “ 初代学長 (1949年 4月 1日 ~ 1961年 6月29日)
服部定一 学長 (1961年 6月30日 ~ 1968年 11月 5日)
大北忠男 学長代行 (1968年 11月 6日 ~ 1969年 12月25日)

鳥山武雄 学長 (1969年 12月26日 ~ 1972年 12月26日)
沖種郎 “ (1972年 12月27日 ~ 1975年 12月25日)
 “ “ (1975年 12月26日 ~ 1976年 1月22日)
藤井正一 “ (1976年 1月23日 ~ 1979年 1月22日)
 “ “ (1979年 1月23日 ~ 1981年 1月22日)
宮地杭一 “ (1981年 1月23日 ~ 1984年 1月22日)
 “ “ (1984年 1月23日 ~ 1986年 3月31日)
柳井久義 “ (1986年 4月 1日 ~ 1989年 3月31日)
 “ “ (1989年 4月 1日 ~ 1991年 3月31日)
大本修 “ (1991年 4月 1日 ~ 1994年 3月31日)
 “ “ (1994年 4月 1日 ~ 1997年 3月31日)
小口泰平 “ (1997年 4月 1日 ~ 2000年 3月31日)
江崎玲於奈 “ (2000年 4月 1日 ~ 2005年 3月31日)
平田賢 “ (2005年 4月 1日 ~ 2007年 11月30日)
柘植綾夫 “ (2007年 12月 1日 ~ 2012年 3月31日)

名誉理事長・名誉学長・名誉教授

名誉理事長・名誉学長

氏名	称号授与年	氏名	称号授与年
石川洋美	2004(平成16)年	小口泰平	2005(平成17)年
沖 種郎	2004(平成16)年	江崎玲於奈	2005(平成17)年
藤井正一	2004(平成16)年		
大本 修	2004(平成16)年		

名誉教授

氏名	所属学科	称号授与年	氏名	所属学科	称号授与年	氏名	所属学科	称号授与年
弓削政隆	機械工学科	1974(昭和49)年	石田博	二部電気設備学科	1999(平成11)年	阿部剛久	機械制御システム学科	2006(平成18)年
中居富太郎	物理学教室	1974(昭和49)年	河端春雄	人間科学教室(人文)	1999(平成11)年	中田毅	材料工学科	2007(平成19)年
島村陽來	社会科学教室	1975(昭和50)年	三浦睦夫	機械制御システム学科	1999(平成11)年	鶴飼武	電子工学科	2007(平成19)年
中村正治	社会科学教室	1975(昭和50)年	川上幸作	機械工学科	2000(平成12)年	山川陸夫	電気・情報系共通(数学)	2007(平成19)年
武田修治	通信工学科	1976(昭和51)年	春日智恵	電気工学科	2000(平成12)年	佐々木明男	電気・情報系共通(保健体育)	2007(平成19)年
沖種郎	建築工学科	1980(昭和55)年	中澤重夫	土木工学科	2000(平成12)年	矢島哲司	土木工学科	2007(平成19)年
古田晋吾	電気工学科	1982(昭和57)年	相田武文	建築工学科	2000(平成12)年	松浦章夫	土木工学科	2007(平成19)年
直井武敏	工業化学科	1983(昭和58)年	江川亮	工業経営学科	2000(平成12)年	笠原克昌	電子情報システム学科	2007(平成19)年
和田浩	自然科学教室	1984(昭和59)年	萩原一義	人間科学教室	2000(平成12)年	水口俊典	環境システム学科	2007(平成19)年
鴨井光夫	自然科学教室	1985(昭和60)年	新村幹夫	自然科学教室	2000(平成12)年	岡本紀明	機械工学科	2008(平成20)年
濱田大蔵	建築学科	1985(昭和60)年	仁井田洋	自然科学教室	2000(平成12)年	小川誠	機械工学第二学科	2008(平成20)年
宮地杭一	電子工学科	1986(昭和61)年	廣田繁	人間自然科学教室	2000(平成12)年	臼井健介	機械工学第二学科	2008(平成20)年
藤井正一	建築工学科	1986(昭和61)年	橋本邦雄	建築学科	2001(平成13)年	平野克比古	応用化学科	2008(平成20)年
高木亮一郎	工業化学科	1990(平成 2)年	林清賛	材料工学科	2002(平成14)年	小泊満生	応用化学科	2008(平成20)年
松田信行	二部一般教養教室(数学)	1990(平成 2)年	木邑隆保	応用化学科	2002(平成14)年	浦野四郎	応用化学科	2008(平成20)年
柳井久義	電気工学科	1991(平成 3)年	永田親清	応用化学科	2002(平成14)年	渋谷義一	電気工学科	2008(平成20)年
吉田秀雄	建築学科	1991(平成 3)年	藤山修己	情報工学科	2002(平成14)年	住広尚三	通信工学科	2008(平成20)年
榊原秋策	金属工学科	1992(平成 4)年	井口泰夫	自然科学教室	2002(平成14)年	大賀壽郎	通信工学科	2008(平成20)年
高木尚	通信工学科	1992(平成 4)年	佐藤運男	機械工学第二学科	2003(平成15)年	小柳津醇一	建築学科	2008(平成20)年
小平信	二部機械工学科	1994(平成 6)年	石黒哲郎	建築学科	2003(平成15)年	奥村克夫	電気設備学科	2008(平成20)年
斎川長三	自然科学教室	1994(平成 6)年	富永良子	人間科学教室	2003(平成15)年	長谷川茂	電気・情報系共通(数学)	2008(平成20)年
高橋庸三	人間科学教室	1994(平成 6)年	長谷部英雄	人間自然科学教室	2003(平成15)年	増田千尋	電子情報システム学科	2008(平成20)年
加藤角一	環境システム学科	1995(平成 7)年	藤井博巳	建築工学科	2004(平成16)年	上田和宏	電子情報システム学科	2008(平成20)年
斎藤正治郎	工業化学科	1996(平成 8)年	十代田知三	電気設備学科	2004(平成16)年	岡村宏	機械制御システム学科	2008(平成20)年
峰松陽一	工業化学科	1996(平成 8)年	小林忠夫	人間科学教室	2004(平成16)年	柴田順二	工学マネジメント研究科	2008(平成20)年
高橋清	電子工学科	1996(平成 8)年	小口泰平	機械工学第二学科	2005(平成17)年	今井八郎	材料工学科	2009(平成21)年
林正幸	工業経営学科	1996(平成 8)年	棚橋實	人間科学教室	2005(平成17)年	石橋文徳	電気工学科	2009(平成21)年
伊藤友信	人間科学教室	1996(平成 8)年	佐藤敏彦	材料工学科	2005(平成17)年	野村徹	通信工学科	2009(平成21)年
吉富末彦	工業化学科	1997(平成 9)年	鶴見近夫	応用化学科	2005(平成17)年	畑聰一	建築工学科	2009(平成21)年
岡田平治	通信工学科	1997(平成 9)年	吉武敦磨	人間科学教室	2005(平成17)年	大河内信司	環境システム学科	2009(平成21)年
大本修	電子工学科	1997(平成 9)年	高橋英郎	電子工学科	2005(平成17)年	友田晴彦	応用化学科	2010(平成22)年
峰岸泰夫	建築学科	1997(平成 9)年	平雄之	人間科学教室	2005(平成17)年	柴山秀雄	通信工学科	2010(平成22)年
津村豊治	工業経営学科	1997(平成 9)年	足立格一郎	土木工学科	2005(平成17)年	長友隆男	電子工学科	2010(平成22)年
坂田文男	人間科学教室	1997(平成 9)年	山本泰稔	建築学科	2005(平成17)年	吉野益弘	物理科目	2010(平成22)年
佐竹宣夫	人間科学教室	1997(平成 9)年	高橋貞夫	電子情報システム学科	2005(平成17)年	藤井亀	情報科目	2010(平成22)年
笠井尚雄	機械工学科	1998(平成10)年	曾根幸一	環境システム学科	2005(平成17)年	伊藤博	体育・健康科目	2010(平成22)年
明野徳夫	二部電気設備学科	1998(平成10)年	清田清司	建築学科	2006(平成18)年	児玉文雄	工学マネジメント研究科	2010(平成22)年
高澤惇	機械制御システム学科	1998(平成10)年	三井所清典	建築学科	2006(平成18)年	大田正人	応用化学科	2011(平成23)年
浅野利昭	環境システム学科	1998(平成10)年	藤上輝之	建築工学科	2006(平成18)年	古宮誠一	情報工学科	2011(平成23)年
加藤一一	通信工学科	1999(平成11)年	藤澤好一	建築工学科	2006(平成18)年	岡本史紀	デザイン工学科	2011(平成23)年
森信郎	電子工学科	1999(平成11)年	堀富栄	電子情報システム学科	2006(平成18)年			

名誉賛助員

■ 特別名誉賛助員

相田武文	岡本史紀	芝浦工業大学校友会	島山日出生
五十嵐久也	小口泰平	柴村堯海	福村保男
石川洋美	春日智恵	大成建設(株)	松縄梅美
石丸洋明	金子重彦	竹内富明	三菱重工業(株)
石渡朝男	金子誠司	武田邦彦	柳井久義
岩佐恵美	倉沢寿朗	津崎郷太郎	山田一雄
梅村護	小暮剛一	寺田孝一	山田清人
(株)エスアイテック	小谷邦夫	戸田建設(株)	横山修二
(株)大林組	齋藤トシ	長友隆男	(株)IH I
大本修	芝浦工業大学柏中学高等学校後援会	西河洋一	Mikko Arimoto Henson
岡田平治	芝浦工業大学後援会	野末鐵有	

■ 名誉賛助員

内山全二	前田建設工業(株)	東光電気工事(株)	島崎進
樋口茂	高桑忠	高砂熱学工業(株)	占部昭久
酒井ゆう子	増川武二	三宅宗雄	本間稔
河村達雄	小木田寛治	長谷川貴訓	鶴飼武
渡辺真一	窪田道子	平野雅昭	米井健治
堀江覚	五反田強	(株)関電工	早乙女徹
長島清和	小日向允	(株)奥村組	佐藤正行
佐藤勲	山川陸夫	勝村建設(株)(現株エム・ラック)	矢吹浩二
内野治泰	富永良子	島畑朝羊	(株)イトーキ
国際証券(株)(現三菱UFJモルガン・スタンレー証券株)	飛鳥建設(株)	三菱UFJキャピタル(株)	三尾仁
小島康誉	三浦陸夫	岩壁秀夫	安藤脩二
吉田健一	石田博	小林久泰	村松昭男
北島有三	鈴木隆	宇津野義弘	斎藤次雄
辻村進	柳澤健	押切隆	伊東利文
荻野勝弘	鶴田輝彦	浅見潮音	今井弘
皆川清治	鶴田トミ子	安敬一	稻増美智子
森栄	新宅則行	藤澤好一	遠藤智恵子
佐伯忠義	黒須晴子	藤田幸男	小川誠
佐々木正男	中山隆志	広井和子	石井博文
高原三平	(社)埼玉建築設計監理協会	伊東勝子	相良達一郎
湯本一彦	岡部稔	臼井健介	相良浩二郎
灰谷登喜和	奥津好恵	三建設備工業(株)	杉野誠
嶺岸泰夫	菊池岩	重盛小百合	(株)大気社
大山徳高	知久富男	平田賢	白谷武一
高田潤	岡上忠夫	藤川仁	山田勝巳
今井八郎	平山菊雄	中谷芳人	江藤浩一
野崎充	小林啓邦	宇野勇雄	渡辺美明
藤田耕治	若月尊博	横山宏	芝浦工業大学中学高等学校PTA
安藤建設(株)	村尾洋	野戸恒男	芝浦工業大学中学高等学校後援会
三井建設(株)(現三井住友建設(株))	中平浩司	住友電設(株)	清水建設(株)
村上一憲	菅和利	松井康雄	芝浦工業大学柏高等学校同窓会
小山武	日本電設工業(株)	野々上熹	佐粧栄子
高野義昭	日比谷総合設備(株)	三井所清典	西村善光
中村正雄	目時健二	半田英司	長谷川成樹
福岡恭子	(株)関工ファシリティーズ	石原昌幸	今井貴則
林愛子	東洋熱工業(株)	日本道路(株)	鈴見健夫
宮地直丸	清水和枝	有元英史	守谷香代美
(株)浅沼組	森康修	鈴木守	廣瀬義征

建学の精神に関する資料

建学の精神

社会に学び、社会に貢献する技術者の育成

芝浦工業大学の源は、1927（昭和2）年、創立者有元史郎が創設した東京高等工商学校です。前身校の時代から芝浦工業大学が継承、堅持しているのが実学重視の技術者育成教育であり、これに建学の精神は根ざしています。

有元史郎が唱えたのは「現代文化の諸相を教材とし、社会的活動の意義を体得する教育」でした。この実学主義の教育により、実用的な知識と技術を併せ持つ

て技術立国を担う技術者、しかも高い倫理観と豊かな見識を備えた優れた技術者の育成に取り組み、芝浦工業大学は社会の進歩発展に貢献してきました。

この建学の精神に基づく教育の結実である有為な人材を輩出して芝浦工業大学は今日に至っており、卒業生は堅実に仕事ができる技術者として高く評価されています。

The Founding Philosophy of Shibaura Institute of Technology

Nurturing Engineers Who Learn from Society and Contribute to Society

Shibaura Institute of Technology dates back to Tokyo Koto Koshogakko, which was founded in 1927 by Shiro Arimoto. Since the days of its establishment, Shibaura Institute of Technology has carried on and firmly maintained the commitment to nurturing practical engineers. The mission statement of the Institute is firmly rooted in this legacy.

Shiro Arimoto proposed to provide “education in which the various aspects of modern culture are incorporated in the curriculum to help students learn their significance through experience.” Under this spirit of practical education, Shibaura Institute of Technology constantly strives to

nurture engineers who have the practical knowledge and skills needed to carry the technology-oriented country, and it also strives to create talented engineers who possess both high ethical mind and comprehensive knowledge, so as to contribute to the progress and development of society.

Today Shibaura Institute of Technology stands on its legacy of producing promising talents through its educational curricula based on our founding philosophy. The graduates of our university are highly recognized in society as capable and dependable engineers.

非科学的教育の提唱 (現代語訳)

東京高等学校機械工学科科長 工学士 経済学士 有元史郎

私達の知識、私達の情気が現代文化の中にあつて発展する限り、私達は現代文化の諸相とより緊密な接触、より深い関係を持たなければならない。

今の学校教育が世の中の非難を受けるのは、その教育が学問を学問として授け、私達の生活、私達の社会と絶縁する傾向があるからである。学校を卒業して社会の荒波にもまれようとしている青年は、「学校の正科が、その学修が自分達をくだらない人間にしてしまった」とさえ言っている。

中学校の卒業生は言った。「歴史、博物等々の学習が、私達の生活をどのように助けたか。私達の人生にどのような意義を与えたか。私達の中学五年間の生活は、上級学校入学者のお付き合いに過ぎなかったのではないか、法律の規定するところや教科書の示すところに従った私達の学修、一週二十余時間五年間の私達の努力、それが私達に何を与えたか、それはせいぜい新聞や雑誌にある記事やその他のくだらない、何の役にも立たない、まともではない事項の記憶に過ぎなかったのではないか」と。現代教育に対するこの嘆き、この不平を、私達教育者はどのように聞くべきか。……これは現代社会の実情を無視した学校教育に対する怨みの声、呪いの声でなくて何であろう。

大学教育はいくらか上記の傾向を緩和したかのように見えなくはないが、しかし、その実際を見るとやはり個々の学問的観点からだけ教材を選択して各教科を孤立させ、私達の社会生活と縁遠いものにしてしまっている。見てほしい、文学の教材を、法律、経済、理数の教材を、更に見てほしい、それが私達の社会生活の中にどのように溶け込んでいるかを。文学は文学、法律は法律、経済は経済、理学は理学と、各自が独立した姿で相対峙し、それぞれの領域から教材を選択し、学生の教養に役立てようとしている。その結果、学生の知識、学生の情気がお互いに関連を失い、

統一ある知識、統一ある行動を取ることができなくなっている。

学校教育が一方で学問的観点より教科を選定し、教材を集集している間に、他方、私達の社会生活では、これらの諸科学がその体系を解体し、私達の社会生活に解け込み、各方面に現代の特色ある文化の諸相を示している。学校教育はここに着眼すべきではないか。

学校は少なくとも専門教育以上としては、学校は学問だけを教えるところではない。学校教育の任務は、私達の生活を、社会的個人としての私達の生活をより良くし、より意義あるものとするところに深い意義を持っている。私達の社会生活に関係を持たない純学問的修養は、少なくとも専門教育では意義をなさない。学校の諸教科が学問的に選定されて、各教科の教材が学問的配列から脱却することができず、それぞれが独立の姿で相対峙することは何としても教育の効果を減殺する障害とならないわけにはいかない。今後の教育は現代文化の諸相を中心とする合科的教材、合科的教育でなければならない。いや、現代文化の諸相を教材とする非科学的教育でなければならない。

ここでいう非科学的教育とは科学を排斥するものでも教育の科学研究を否認するものでもなく、学問的体系によらない教育、科学的観点の下に教材を集集することのない教育を意味するもの、積極的に言えば私達の生活の中に科学の解け込んだ現代文化の諸相を教材とし、社会の一員たる個人に社会的活動の意義を体得させる教育を意味するものである。私達は上述の現代教育の根本的欠陥を救済するために、この意味での非科学的教育を提唱しなければならないのである。

以上の考えに基づき、本校は今後わが国の私立学校として特色ある専門教育を行い、それによって実社会に貢献することを目指している。本校の学生諸君と教職員が一致協力してその実をあげ、天下に東京高等学校の名声が讃美され、ついには就職を希望する官庁会社から、採用は東京高工の卒業生に限るとされるまでに本校の特色を發揮することを期している。

Proposal for Unscientific Educational Approaches

Published in December 1931

By Shiro Arimoto, Bachelor of Engineering, Bachelor of Economics
Dean of the Engineering Department, Tokyo Koto Kogakko
Founder of Shibaura Institute of Technology

As long as our knowledge and our sentiment continue to develop in conjunction with our modern culture, we must seek closer contact with various aspects of modern culture and maintain deeper relationships with them.

Education in today's schools has been criticized by society. The reason is that too much focus is given to academic learning that is completely isolated from our everyday life and society. I can even hear young graduates crying out, "School curricula and study based on such curricula have made us worthless beings." This is the stark realization of young grads after being tossed around in society's rough seas.

This is a comment from one high school graduate: "How did the school study of history, natural history and all other subjects help us in our real life? What meaning did they add to our life? The five years we spent at high school seemed to me just a period of wasting time because of study along side with students who are advancing to higher education. We studied more than 20 hours a week for five years in textbooks as prescribed by law, but what did we get? It seems only memorization after memorization of worthless, random matter such as almanac, newspaper and magazine articles and others now considered useless facts."

How should we, as educators, listen to such despair and complaints in regard to modern education? This is none other than an expression of resentment and bitterness against school education, which has been ignoring the actual state of modern society.

University level education seems to be less critical in terms of the aforementioned trend as higher education requires specialized knowledge but in reality somewhat the same thing has been observed. Textbooks are selected simply from the pure academic standpoint, and each subject is taught in isolation from each other in a manner far removed from real social life. Look at them! Look closely at the textbooks for literature or law, economics and science. How are they integrated into our social life? Teaching of literature as literature, law as law, economics as economics and science as science as though there is no applicable connection to real life. Each subject matter remains isolated and textbooks are selected only in the specified field for the purpose of helping students acquire specialized knowledge. As a result, the knowledge and sentiment that students have toward various subjects are not interconnected. Consequently they cannot realize or acquire practical knowledge and take practical action.

Careful observation reveals what is happening in the present day real society. While schools are selecting and gathering textbooks for various sciences from the academic standpoint, these various sciences are breaking away from their original structures and integrating into society, application of sciences creating unique aspects of modern culture that are felt in various quarters. School education should focus on this dynamic.

It is my belief that schools, or at least those that offer vocational training, should not be a place where only academic subjects are taught. The mission of school education is to better our life or improve the way in which we as the members of society live, and to make our lives more meaningful. To me that is the deeper significance of school education. Pure academic training that has nothing to do with real life has no meaning, at least in the context of vocational training.

If various school subjects are selected based on academic reasons only and the textbooks for each subject contain only line after line of academic facts, and each subject segregated from one another then the overall benefits of education will be reduced. Future education must be based on curriculum, which encompasses all subjects, or a combination of subjects, with focus on various aspects of present day culture. Thus I came to the conclusion of proposing an ironic idea, which I call "the unscientific educational approaches," in which the various aspects of modern culture are incorporated in teaching the subject to be more practical.

Here, "Unscientific Education" is not something that rejects science or denies the scientific method of study. Instead, it means education that is not dependent on the traditional system of academic education in which textbooks are simply chosen from the academic standpoint. To put it more aggressively, this education in which the science and various aspects of our modern culture are blended will enhance each other and every member of society will learn their significance in the meaning of life. By proposing the unscientific educational approaches I would like to revise the aforementioned fundamental defect in today's education.

Based on the above notion, our school aims to provide unique professional training as a private institution in Japan so that we can contribute to the real world. It is my hope that our students and faculty members will work together to produce great fruits so as to make the name of Tokyo Koto Kogakko (currently Shibaura Institute of Technology) known to the world, so that government agencies and various companies recruiting recent school graduates will be made to think they will only hire our graduates and will proclaim our school's uniqueness.

参考文献

- 『50年のあゆみ』(1977年、学校法人芝浦工業大学)
- 『60年のあゆみ』(1987年、学校法人芝浦工業大学)
- 『芝浦工業大学 70年の歩み』(1997年、学校法人芝浦工業大学)
- 『芝浦工業大学—60年の軌跡—』(1991年、芝浦工業大学・広報室)
- 『歴史における芝浦工業大学』(1997年、芝浦工業大学創立70周年記念事業事務局)
- 『温故知新 1927-2007 芝浦工業大学』(2007年、学校法人芝浦工業大学)
- 『芝浦工業大学保存歴史資料目録』(2008年、芝浦工業大学総合企画部広報課)
- 『芝浦工業大学 豊洲キャンパス 建設記録』(2008年、学校法人芝浦工業大学)
- 『「システム工学部」完成までの全記録』(1995年、芝浦工業大学システム工学部)
- 『システム工学部10年の歩み』(2002年、芝浦工業大学システム工学部)
- 『鐵中育英六十五周年[1922-1981]』(1986年、芝浦工業大学中学高等学校)
- 『芝浦工業大学高等学校の三十年[1954-1983]』(1984年、芝浦工業大学中学高等学校)
- 『中学開校・板橋移転 十年のあゆみ』(1991年、芝浦工業大学中学高等学校)
- 『鐵中・育英・芝浦工業大学中学高等学校 八十周年[1922-2003]』(2003年、芝浦工業大学中学高等学校)
- 『十年の歩み』(1989年、芝浦工業大学柏高等学校創立十周年記念誌編集委員会)
- 『30年の歩み』(2009年、芝浦工業大学柏中学高等学校創立30周年記念事業委員会)
- 『芝浦工大新聞』(第4号[1954.9.15]～第289号[1994.6.8]、芝浦工業大学新聞部・新聞会)
- 『轍』(1972年、芝浦工業大学教職員組合教宣部)
- 『傳』(1974年、芝浦工業大学校友会クラス代議員連絡会)
- 『芝浦祭史』(2005年、大竹昇司 他)
- 『望郷 湯の丸高原寮』(2009年、芝浦工業大学・広報課)
- 『もうひとつの全共闘 芝浦工大全学闘 1968-1972』(2010年、芝工大闘争史を語る会)
- 『有元史郎傳記』(1940年、有元傳記編纂所)
- 『静かなる革命』(1959年、松縄信太著、誠信書房)
- 『雑草2』(1969年5月、三浦元秀著)
- 『雑草2(付)』(1969年9月、三浦元秀著)
- 『雑草2(補)』(1970年12月、三浦元秀著)
- 卒業論文「芝浦工業大学旧アメリカンスクール校舎の復元研究」(2010年、田中紗耶花)
- 『国士館九十年』(2007年、学校法人国士館)
- 『工学院大学学園百年史』(1993年、学校法人工学院大学)
- 『工学院大学学園アーカイブズ 1888-2005』(2005年、学校法人工学院大学)
- 『武蔵工業大学75年史』(2005年、学校法人五島育英会 武蔵工業大学)
- 『千葉工業大学50年史』(2012年、学校法人千葉工業大学)
- 『東京電機大学百年史 正史編・図録編・資料編・年表』(2008年、学校法人東京電機大学)

校史編纂委員会 (2011年4月1日設置)

委員長：福川 敏機

委員：山田 清人

苅谷 義治

角野 和明

土屋 公平

村松 昭男

新井 剛

山之内 義治

山口 賢

編集後記

「歴史は過去の嘸語(ばやきの意)に非ず、未来の指針にして警策なり」、2011年3月11日、東日本大震災の津波で逝った岩手・釜石の郷土史研究家、昆勇郎さんの言葉に感銘をうける。「温故知新」や「脚下照顧」も念頭に置いて本書の制作に取り組んだ。

難産だった。最終局面では委員以外の方々にも原稿執筆や校正をお願いし、窮状を助けていただいた。本学の歴史について書物などに書かれた文を随所で引いている。本書は、多くの方のお力を拝借して成立した。深く感謝申し上げます。

制作の主眼は、2006年の豊洲キャンパス開校以降に本学と関わるようになった人にもわかりやすく理解できる「芝浦工大歴史入門」を作ることである。表層をなぞり、総花的になった。ただ、これまで本学の歴史が語られる時に表に出なかったこと、知られることの少なかった出来事や人物についても触れている。

体裁は、校史と言うよりは、むしろ、記念誌に近い。本格的な校史の編纂は、90周年や100周年の課題である。これは、そのための叩き台であり、後代の取り組みに期待している。本書の発行を機に、本学の足跡を見つめ、幾多の苦難を越えて芝浦工大を守り築いてきた人たちに学ぶ気風が学園に広がり、大きくなることを強く願う。

(福川 敏機)

『芝浦工業大学の歩み 1927～2011』

2012年3月31日発行

発行者 五十嵐久也

発行所 学校法人芝浦工業大学校史編纂委員会

〒135-8548 東京都江東区豊洲3-7-5

TEL.03-5859-7070

印刷・製本 株式会社 **ぎょうせい**

本誌掲載記事の無断転載を禁じます。